新時代における遍路受入態勢のあり方

～遍路宿泊施設の現状・課題等調査～

２０１９年６月

四 国 経 済 連 合 会

四国アライアンス地域経済研究分科会

本調査は、四国経済連合会と、四国の地方銀行４行（阿波銀行、百十四銀行、伊予銀行、四国銀行）による四国創生に向けた包括提携「四国アライアンス」の「地域経済研究分科会」（４行の系列シンクタンクで構成）が共同で実施した。

は　じ　め　に

現在、「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会（以下、「推進協議会」）を中心に、四国遍路の世界遺産登録に向けた活動が四国を挙げて展開されている。世界遺産登録が実現すると、外国人を含め来訪者の大幅な増加が予想されるため、今から受入態勢を着実に整備していく必要がある。

こうした問題意識から、本調査は、将来の世界遺産登録を見据え、宿泊施設をはじめ遍路受入態勢の現状や課題を分析し、あるべき方向について検討したものである。

本調査のきっかけとなったのは、2017 年に行った世界遺産「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」（以下、「サンティアゴ巡礼路」）の視察である。同年７～９月にスペイン・ガリシア州立巡礼史博物館において、推進協議会等が主催する「四国遍路展」が開催された。その開会式への出席に合わせ、推進協議会有志で巡礼路の視察を行った。

スペインのサンティアゴ巡礼路では、世界遺産登録前には１万人に満たなかった巡礼者が、1993 年の世界遺産登録後、右肩上がりで増え続けており、2018 年には 32 万人を超えている。これには、世界遺産効果だけでなく、アルベルゲと呼ばれる巡礼宿を中心とした受入態勢の整備が大きな役割を果たしており、過疎に悩んでいた地域にも大きな経済効果が生まれている。

また、四国経済連合会が 2018 年４月に行った世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」、いわゆる「熊野古道」への視察も本調査の大きな動機付けとなった。

その際、現地で観光客の受入に当たっている一般社団法人田辺市熊野ツーリズムビューローの多田稔子会長から、「世界遺産登録に向けた取り組みと並行して、巡礼者の受入態勢を整備していくことが非常に重要だ」との指摘があった。世界遺産登録の後、受入態勢を整えないまま大勢の観光客が訪れたことで、観光客と地域住民の双方に大きなストレスが生じたという、過去の苦い経験を踏まえての助言であった。その後、熊野では成熟した旅行スタイルを持つ欧米豪の個人旅行者を主要ターゲットに「持続可能で質の高い観光地」を目指した取り組みを進めることで、宿泊客が着実に増加して地域も潤うようになったという。

このように、サンティアゴ巡礼路や熊野古道は世界中から多くの巡礼者を集めており、交流人口の拡大が地域活性化に貢献している。一方、四国ではお遍路さんが減少傾向をたどるとともに、遍路道沿線地域では過疎化が進み、後継者難などもあって遍路宿が廃業を余儀なくされ、お接待の担い手である住民も減るなど、遍路文化の維持・継承を危うくしかねない事態が進行しつつある。

ただ、幸いなことに、歩きによる巡礼旅は世界的なブームとなっており、四国でも外国人遍路が人数こそまだ少ないものの、近年大幅に増えている。

こうした外国人をはじめ、お遍路さんの今後の受入態勢を地域で検討していく上で、本報告書がご参考になれば幸いである。

目　　次

要旨 ・・・

【資料編】

資料Ⅰ　遍路の受入態勢等に関するアンケート調査・・・・・・・・・・・・・54
（対象：四国八十八ヶ所霊場）

資料Ⅱ　遍路の受入態勢等に関するアンケート調査・・・・・・・・・・・・・60
（対象：遍路道沿線の市町村）

資料Ⅲ　歩き遍路を対象としたアンケート調査・・・・・・・・・・・・・・・64
（対象：日本人と外国人）

資料Ⅳ　世界遺産「スペイン・サンティアゴ巡礼路」の概要・・・・・・・・72

資料Ⅴ　世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道（熊野古道）」の視察概要　・・・83

「新時代における遍路受入態勢のあり方」
要　旨

○四国遍路の歴史を振り返ると、昭和には団体バス遍路が、平成にはマイカー遍路が全盛期を迎えたが、近年、いずれも減少傾向にある。全体の遍路人数は 10 数年前に比べ４割程度の大幅減少になっている可能性がある。

○遍路宿泊施設については、遍路人数の減少に加え、宿主の高齢化や後継者難、人手不足などにより、過疎地域で宿不足が深刻になっている。歩き遍路の場合、車のように広域的に移動できないため、遍路道沿いでの宿不足が大きな問題となる。

○「お遍路さんの減少」、「遍路宿泊施設の不足」に加え、「地域住民（お接待の担い手）の減少」、「遍路道の維持修復難」という“４つの問題”が、今後、遍路文化の維持・継承を揺るがしかねない。こうした構造的問題を解決するための糸口になると期待されるのが、歩き遍路、なかんずく外国人歩き遍路である。

○外国人歩き遍路は年間 400 人程度（遍路人数の約 0.5%）にとどまっており、熊野古道に比べても見劣りする。その主因は、団体バス遍路やマイカー遍路に適合した日本人向けの受入態勢が、外国人歩き遍路のニーズにうまくマッチしていないためである。

○スペインのサンティアゴ巡礼路では、1992 年に１万人に満たなかった巡礼者が、1993 年の世界遺産登録を経て、右肩上がりで増加し、2018 年には 32 万人を超えた。歩きの巡礼旅は世界的なブームになっているが、四国遍路はその流れにうまく乗れていない。

○サンティアゴ巡礼路では、行政主導で整備した巡礼者専用の簡易な宿「アルベルゲ」が巡礼者の増加、さらには地域活性化に大きく寄与している。その多くは、使われなくなった建物を改装した大部屋・２段ベッド、素泊まり（１泊千円程度）の宿である。

○外国人歩き遍路にとって最大の困り事は、宿泊施設である。外国人は日本までの航空運賃などに大きな出費をしており、四国での滞在も 40～50 日に及び滞在費が嵩むため、宿泊費を切り詰めたいと考える。スペインのアルベルゲでは格安で泊まれることもあり、四国での宿泊料金に強い割高感を抱く。また、ネット上での英語による宿泊施設の情報が少ないほか、外国人からのメールや電話での宿泊予約に対応できない宿もある。

○今後は、①「外国人遍路の受入態勢整備に本格着手する～四国版アルベルゲの整備など宿泊施設不足への対応およびお遍路さん向けコンシェルジュ機能の強化～」、②「“駆け足遍路”から“体験型・滞在型遍路”に変えていく」、③「お遍路さんの受入態勢づくりに地域を挙げて取り組む」ことが重要と考えられる。

○令和の時代を迎え、外国人遍路によって特徴づけられる「四国遍路新時代」が到来するかどうかは、四国側の受入態勢づくりにかかっている。

１．お遍路さんの大幅な減少と四国遍路新時代の幕開け

1.1　四国遍路の概要とお遍路さんの変遷

(1) 四国遍路の概要

四国遍路とは、四国一円に点在する空海（弘法大師、774 年～835 年）ゆかりの 88 ヶ所の札所（寺院）を巡礼することである。札所を巡るルートは、１番札所霊山寺（徳島県鳴門市）を起点に 88 番札所大窪寺（香川県さぬき市）を経て１番札所に戻る、世界的にも稀な回遊型（円環状）の巡礼路となっている（図表 1-1）。その総延長は従来から 1,400km に及ぶとされてきた。近年は、道路整備で近道が開通したり、かつての遍路道が使われなくなったりしたことで、歩き遍路の場合の総延長は約 1,200km となっている。それでも全行程を一気に巡ると､歩きで 40～50 日程度､四国発着のバスツアーでも 13 日程度を要する。

(2) 四国遍路の歴史

かつて四国は修験者の修行の場であり、空海も修験者の一人であったと考えられる [1)]。空海の入定後、修行僧らが空海の足跡をたどる遍歴の旅を始めたことが四国遍路の原型とされているものの、信仰上は 815 年（弘仁６年）に「空海が開創した」ことになっている。

室町時代になると、僧侶に限らず一般庶民も遍路に加わるようになった。さらに江戸時代には空海への信仰心、いわゆる「お大師様信仰」から遍路を行う人が増えていった。

かつては人家もまばらな険しい山道や太平洋沿いに延々と続く道など 1,400km も歩き通すことは大変な苦痛や危険を伴うものであった。このため、戦後になっても、難病を患った人が家族に迷惑をかけないよう死地を求めて四国を巡り歩くなど、死を覚悟して四国に赴き、途中で行き倒れる巡礼者も少なくなかった。

(3) 団体バス遍路・マイカー遍路の登場

こうした状況を大きく変えたのが、伊予鉄道が 1953 年（昭和 28 年）に始めた「四国八十八ヶ所順拝バス」､いわゆる団体バス遍路である。順拝バスは戦没者など肉親や先祖の慰霊を目的とした人などに評判となり､その後､他のバス会社や旅行会社もこれに追随した。

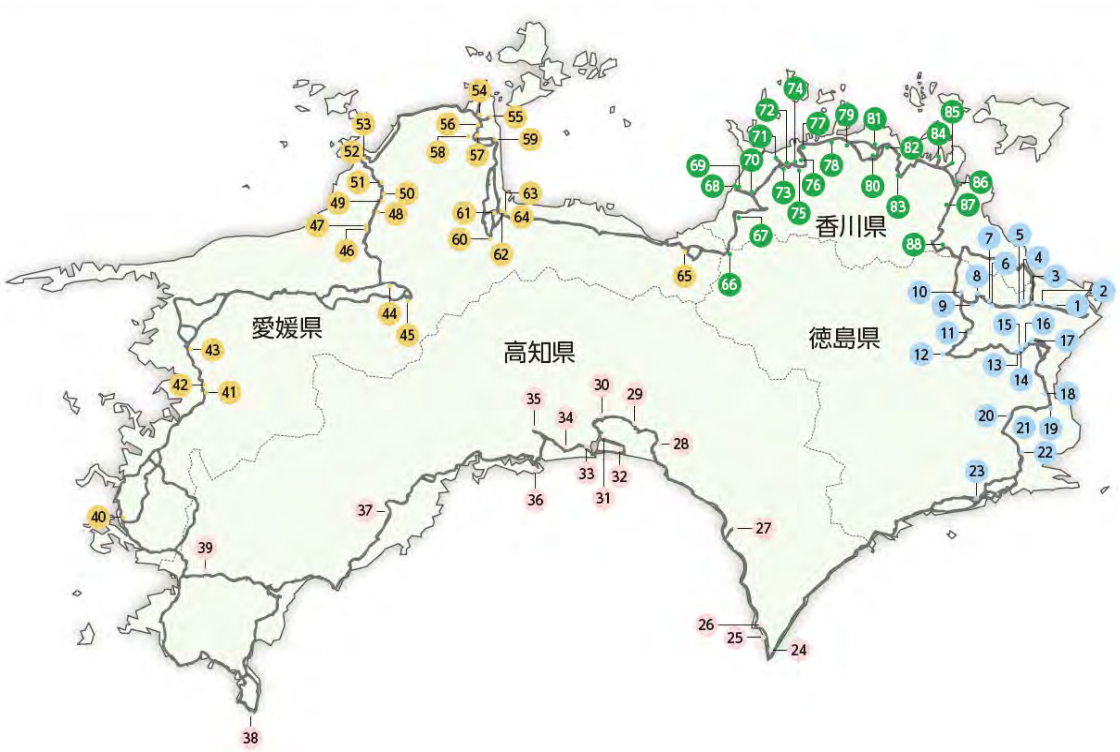
次いで大きな転機となったのが、1988 年（平成元年の前年）に開通した瀬戸大橋をはじめとする本四連絡橋や、橋と接続する高速道路の整備進展である [2)]。四国が本州と陸続きとなり、札所へのアクセスが格段に改善されたことで、平成の時代には日帰り遍路・週末遍路とも呼ばれるマイカー利用のお遍路さんが大きく増加した。

このように昭和では団体バス遍路、平成ではマイカー遍路が人気を博したことで、以前とは比べ物にならないほど多数のお遍路さんが四国を巡るようになった。

[1)] 空海の処女作『三教指帰』（さんごうしいき、797 年）に「阿波太龍嶽に登りよじ土州室戸の崎に勤念す」とある。阿波太龍嶽は徳島県阿南市の太龍寺近辺、土州室戸は高知県の室戸岬を指すとされる。

[2)] 開通年は、瀬戸大橋が 1988 年(昭和 63 年)、明石海峡大橋が 1998 年（平成 10 年)、しまなみ海道が 1999 年（平成 11 年)、四国の４県都をＸ字型に結ぶ高速道路が 2000 年（平成 12 年）である。

図表 1-1 四国遍路の札所位置図



札所番号	札所名（所在地）	札所番号	札所名（所在地）	札所番号	札所名（所在地）	札所番号	札所名（所在地）
1	霊山寺（鳴門市）	23	薬王寺（美波町）	45	岩屋寺（久万高原町）	67	大興寺（三豊市）
2	極楽寺（鳴門市）	24	最御崎寺（室戸市）	46	浄瑠璃寺（松山市）	68	神恵院（観音寺市）
3	金泉寺（板野町）	25	津照寺（室戸市）	47	八坂寺（松山市）	69	観音寺（観音寺市）
4	大日寺（板野町）	26	金剛頂寺（室戸市）	48	西林寺（松山市）	70	本山寺（三豊市）
5	地蔵寺（板野町）	27	神峯寺（安田町）	49	浄土寺（松山市）	71	弥谷寺（三豊市）
6	安楽寺（上板町）	28	大日寺（香南市）	50	繁多寺（松山市）	72	曼荼羅寺（善通寺市）
7	十楽寺（阿波市）	29	国分寺（南国市）	51	石手寺（松山市）	73	出釈迦寺（善通寺市）
8	熊谷寺（阿波市）	30	善楽寺（高知市）	52	太山寺（松山市）	74	甲山寺（善通寺市）
9	法輪寺（阿波市）	31	竹林寺（高知市）	53	円明寺（松山市）	75	善通寺（善通寺市）
10	切幡寺（阿波市）	32	禅師峰寺（南国市）	54	延命寺（今治市）	76	金倉寺（善通寺市）
11	藤井寺（吉野川市）	33	雪蹊寺（高知市）	55	南光坊（今治市）	77	道隆寺（多度津町）
12	焼山寺（神山町）	34	種間寺（高知市）	56	泰山寺（今治市）	78	郷照寺（宇多津町）
13	大日寺（徳島市）	35	清瀧寺（土佐市）	57	栄福寺（今治市）	79	天皇寺（坂出市）
14	常楽寺（徳島市）	36	青龍寺（土佐市）	58	仙遊寺（今治市）	80	國分寺（高松市）
15	國分寺（徳島市）	37	岩本寺（四万十町）	59	国分寺（今治市）	81	白峯寺（坂出市）
16	観音寺（徳島市）	38	金剛福寺（土佐清水市）	60	横峰寺（西条市）	82	根香寺（高松市）
17	井戸寺（徳島市）	39	延光寺（宿毛市）	61	香園寺（西条市）	83	一宮寺（高松市）
18	恩山寺（小松島市）	40	観自在寺（愛南町）	62	宝寿寺（西条市）	84	屋島寺（高松市）
19	立江寺（小松島市）	41	龍光寺（宇和島市）	63	吉祥寺（西条市）	85	八栗寺（高松市）
20	鶴林寺（勝浦町）	42	仏木寺（宇和島市）	64	前神寺（西条市）	86	志度寺（さぬき市）
21	太龍寺（阿南市）	43	明石寺（西予市）	65	三角寺（四国中央市）	87	長尾寺（さぬき市）
22	平等寺（阿南市）	44	大寶寺（久万高原町）	66	雲辺寺（三好市）	88	大窪寺（さぬき市）

1.2　お遍路さんの大幅な減少

(1) お遍路さんの年間人数は不明

お遍路さんの人数に関する公式の統計はなく、正確な人数は不明である。

そもそも遍路道は約 1,200km と長距離に及び、88 の札所を巡る順番や巡り方にも決まりがない（図表 1-2)。また、88 ヶ寺を複数年にわたって巡る人や、途中で 88 ヶ寺全てを回ることを断念する人も少なくない。その上、お遍路さん以外の参拝客や観光客も各札所を参拝している。こうしたことから、お遍路さんの正確な人数を捉えるのは難しい。

なお、四国遍路がテレビで話題になったり、集客に繋がるイベントなどがあると、お遍路さんの人数は一時的に押し上げられる。このため、遍路人数は年によってバラツキがあり、傾向的な変化を捉えにくいという側面もある。

(2) お遍路さんの人数は 10 数年前に比べ４割減か

本調査では、遍路人数の経年的な推移を２つの方法で捉えることとした。

一つは、四国霊場 21 番札所太龍寺（阿南市）と麓を結ぶ太龍寺ロープウェイの輸送実人員である。太龍寺へは細い山道が続くため大半のお遍路さんがロープウェイを利用する[3)]。

太龍寺ロープウェイの輸送実人員は、開業した 1992 年の約 16 万人がピークで、その後、明石海峡大橋の開通効果などで 2001 年に２度目のピークを迎え、以後、減少傾向をたどっている。ちなみに、明石海峡大橋の開通効果などで輸送実人員が底上げされた 1998～2002 年度の年度平均 13.5 万人に対し、直近５年間（2014～2018 年度）の年度平均は 7.8 万人であり、この 10 数年の間に４割もの大幅な減少となっている（図表 1-3)。

２つ目の方法として、札所へのアンケートを行い、「巡礼者数が概ね 10 年前に比べ、どの程度増減していると思うか」を尋ねた。この設問に回答があったのは 36 ヶ寺で、そのうち全ての札所が「減っている」と答えた。また、その減少割合について尋ねると、▲１割～▲７割までバラツキはあるものの、最も多かったのが▲50％で、次いで▲40％の順となった。また、回答のあった 36 ヶ寺の平均では▲38％となり、太龍寺ロープウェイ輸送実人員の減少幅と近似した結果となった（図表 1-4)。

この二つのデータから、遍路人数が近年大きく減少していることはほぼ間違いない。また、その減少幅は 10 年数前に比べ▲４割程度の大幅なものになっている可能性がある。

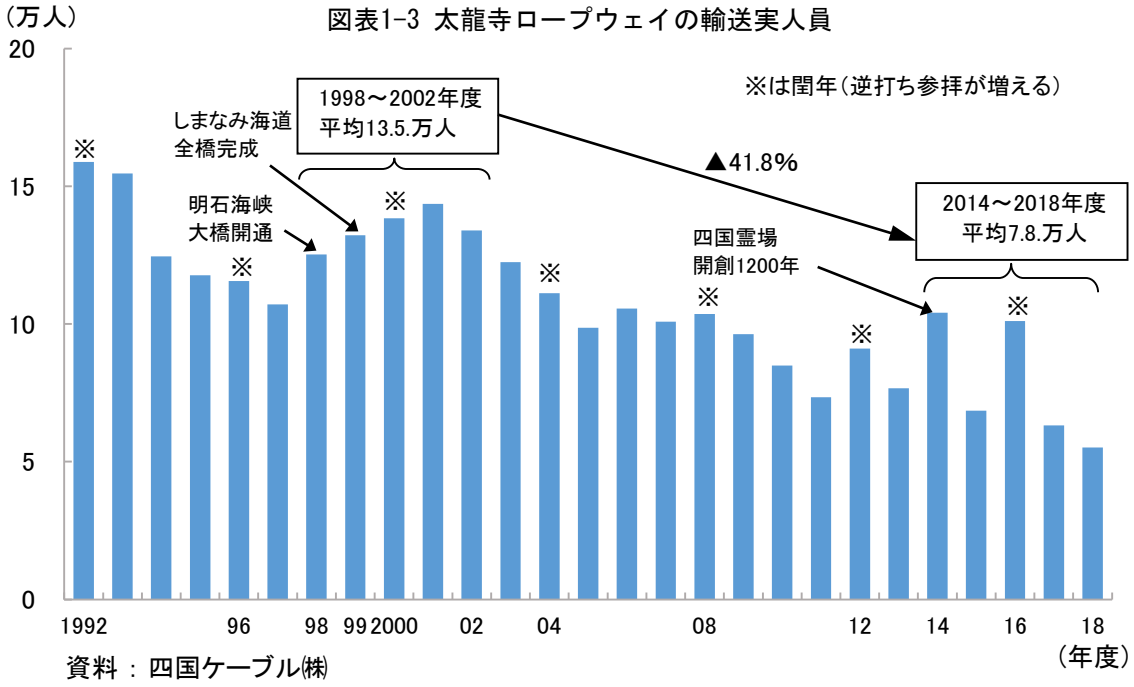
なお、四国の住民は、歩き遍路を日常的に見かけるため、遍路人数が大幅に減少していることに違和感を持つかもしれない。その要因は次頁以降で取り上げるが、遍路人数の大半を占める団体バス遍路とマイカー遍路が落ち込んでいるのである。

[3)] 太龍寺ロープウェイは全長 2,775ｍで、海抜 600ｍの太竜寺山山頂近くにある太龍寺と麓との間を山越え・川越えで結ぶ。太龍寺に行く自動車用の道は、国道を外れて数キロにわたる細い道が続くため、車で行くお遍路さんは少ない。太龍寺に参拝するお遍路さんのうちロープウェイを利用しない人（自動車もしくは徒歩）は 10～15％とみられる。一方、ロープウェイ利用者のうち、同じく 10～15％はお遍路さん以外（観光客など）とみられる。このため、太龍寺を訪れるお遍路さんの人数とロープウェイの利用者数は、正確には一致しないものの、ほぼ近似していると考えられる。

図表 1-2 四国遍路の巡り方

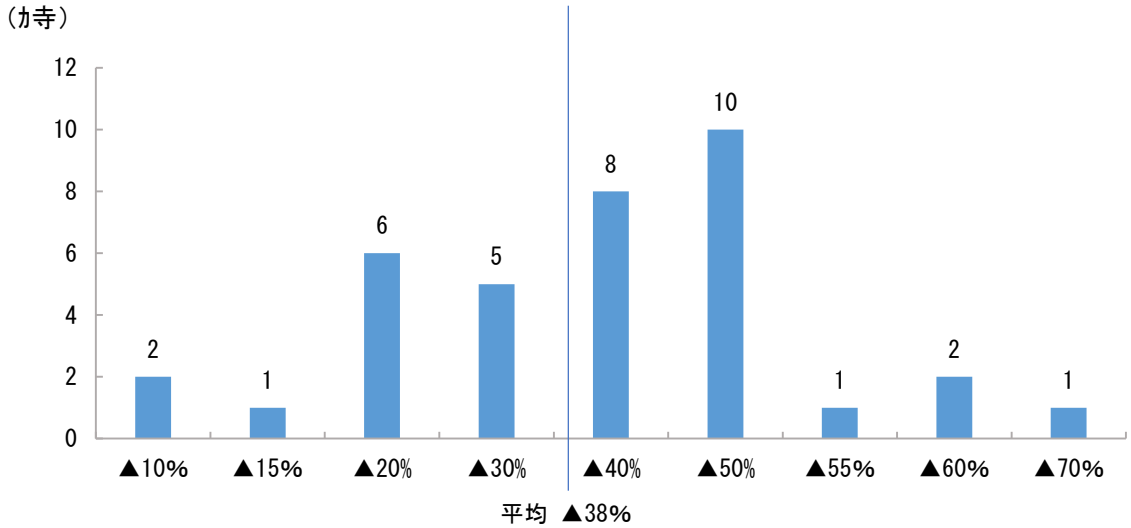
巡り方	意　味　・　内　容
順打ち	１番札所から番号順に巡ること。
逆打ち	88 番札所から番号をさかのぼって巡ること。閏年に逆打ちをすると御利益（ごりやく）が大きいとされている。
通し打ち	すべての札所を１度に巡ること。通し打ちを始めた歩き遍路のうち、最後まで一気に歩ききれるのは３割程度ともいわれている。
区切り打ち	区間を決め、複数回に分けて巡ること。

図表1-3 太龍寺ロープウェイの輸送実人員



資料：四国ケーブル㈱

図表1-4 概ね10年前と比較した巡礼者総数の減少率別の札所数（n=36）



資料：「遍路の受入態勢等に関するアンケート調査」（対象：四国八十八ヶ所霊場）

資料編P. 54

1.3　日本人遍路の大幅な減少の背景

(1) 類型別のお遍路さんの増減

お遍路さんの大幅な減少の背景を探るため、前述の札所対象のアンケートで、主な類型別（交通手段別等）の遍路人数について、概ね 10 年前と比べた増減を尋ねた（図表 1-5)。

これによると、「団体（巡拝バス)」は、「大幅に減っている」だけで 81.8%と大半を占めた。「マイカー」については、「大幅に減っている」と「少し減っている」がともに 36.4%で、両方を合わせて「減少」が７割強となった。

一方、歩き遍路は、「大幅に増えている」が 11.4%、「少し増えている」が 47.7%で、合わせて「増加」が６割弱となった。また、外国人については、「大幅に増えている」が 61.4%、「少し増えている」が 31.8%で、合わせて「増加」が９割強を占めた。

このアンケート結果から、近年の傾向としては、団体バス遍路が大きく減少するとともに、マイカー遍路も減少傾向にある一方、歩き遍路は漸増しており、外国人遍路は顕著に増加している様子がうかがえる。

これに関連して、太龍寺ロープウェイの輸送実人員の内訳を、「団体」と「一般」の別でみると、輸送実人員で第 2 のピークだった 2001 年度は団体が 6.7 万人、一般が 7.7 万人であった。これに対して、最近の５年間（2014～2018 年度）の年度平均では団体が 2.3 万人、一般が 5.6 万人となっており、2001 年度比で団体が▲66.2%、一般が▲27.3%となっている。太龍寺ロープウェイの輸送実人員でも団体が激減し、団体以外の一般客も減少しており、アンケートで示された各札所の認識が概ね裏付けられる結果となった（図表 1-6)。

(2) マイカー遍路、団体バス遍路減少の背景

マイカーでの四国遍路は、道路整備の進展に加え、道路標識の設置やカーナビの普及により以前に比べ格段に巡り易くなっている。それにもかかわらず、マイカー遍路が減少しているのは何故か。この背景には、日本人の宗教離れやレジャーの多様化、国内外の観光地との競合激化などによって、自動車を使って巡る四国遍路の“集客力”が落ちているという事情があると考えられる。

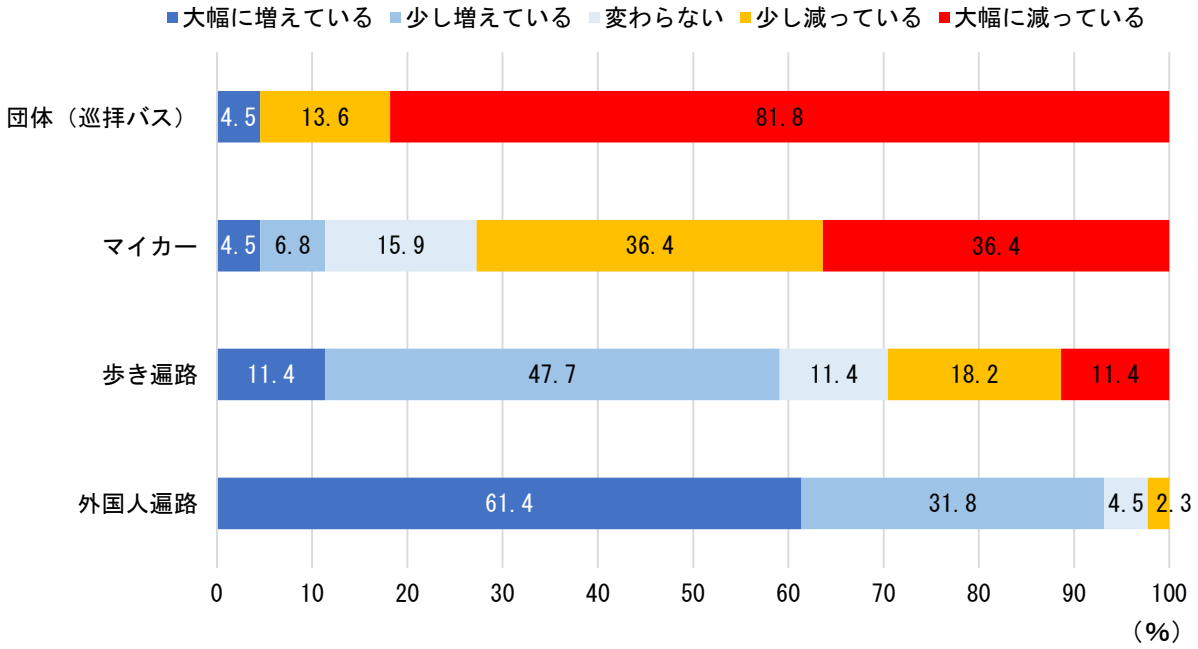
団体バス遍路については、団体旅行から個人旅行へのシフトという観光ニーズの構造的変化も加わることで、マイカー遍路以上に大きく落ち込んでいるものとみられる。

ちなみに、太龍寺ロープウェイの輸送実人員と徳島県の代表的観光施設である祖谷のかずら橋の利用者数を比べると、太龍寺ロープウェイは減少傾向をたどっているのに対し、祖谷のかずら橋は総じて堅調に推移しており、徳島県の山間部に位置する二つの施設の間で大きく明暗が分かれている（図表１-6)。

祖谷のかずら橋では、近年、外国人の来訪が増えており、2018 年度では約 5.4 万人に達している。これは、太龍寺ロープウェイの同年度の輸送実人員（約 5.5 万人）とほぼ同数である。

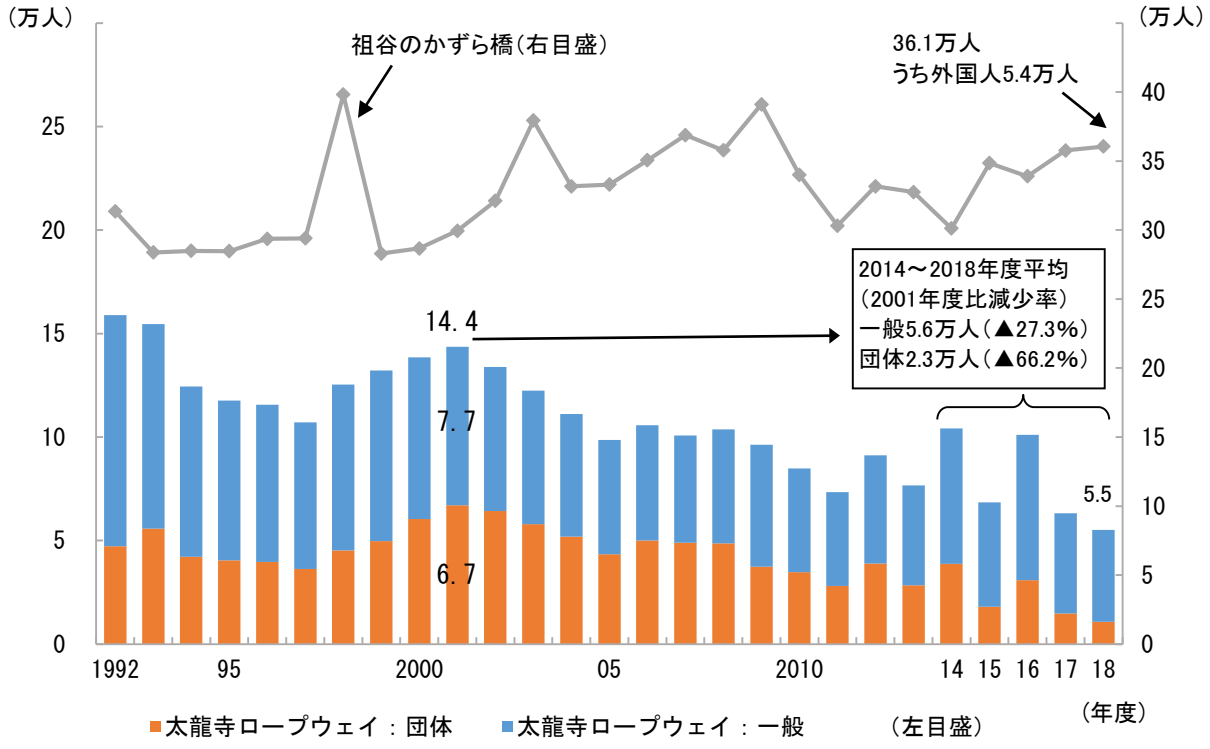
四国でも外国人の動向が観光地の入込客数を大きく左右する時代を迎えている。

図表1-5 交通機関別の近年の巡礼者数の動向
［概ね10年前との比較］



注）「大幅に」とは、概ね１割以上増減した場合とした
資料：「遍路の受入態勢等に関するアンケート調査」（対象：四国八十八ヶ所霊場）資料編P. 55

図表1-6 太龍寺ロープウェイの輸送実人員と祖谷のかずら橋の入込客数の推移



資料：四国ケーブル㈱、四国運輸局「主要観光地入込状況」、（一社）三好市観光協会

1.4　歩き遍路と外国人遍路の動向

(1) 歩き遍路の動向

歩き遍路については、前述のアンケートのとおり、回答のあった札所の 6 割弱が概ね 10 年前に比べ「増加」しているとみていた。

また、歩き遍路の統計としては、NPO 法人遍路とおもてなしのネットワークによる「遍路大使任命数」がある。同 NPO 法人は 87 番長尾寺と 88 番大窪寺の間にある「前山おへんろサロン」（香川県さぬき市）で、歩き遍路で結願[4]した方を「遍路大使」に任命し、「遍路大使任命書」を発行している。それによると、遍路大使任命数は、この数年間は概ね 2,500 人程度の横ばいとなっている（図表 1-7）。

こうしたデータから、遍路の全体数が大きく減少する中で、歩き遍路は近年も底堅く推移していることがわかる。その要因としては、山・川・海の豊かな自然、道中や宿での人との出会いや交流、地域の方々からのお接待、さらには何日も歩き続けて結願した際の大きな達成感など、歩き遍路ならではの魅力があるためと考えられる。

(2) 外国人歩き遍路の顕著な増加

外国人遍路については、札所へのアンケートで「増加」しているとの回答が 9 割強を占めた。

前述の遍路大使任命数のうち外国人歩き遍路の推移をみても、2007 年に 44 人だったものが、2017 年には 416 人へと 10 倍に増えており、歩き遍路に占める外国人の比率は直近で 16.6%にまで上昇している（図表 1-7）。

国・地域別には、フランスやアメリカ・オーストラリアなど欧米豪や台湾・韓国・中国などのアジア諸国が多くを占めている。ただ、国籍は非常に多岐にわたっており、四国遍路の魅力が世界的な普遍性を持つことを示している。

この間、例えば、英語による歩き遍路用ガイドブック[5]やフランス人女性による歩き遍路体験記の出版[6]、その他海外でのテレビ放映などが、外国人遍路の増加に寄与している。

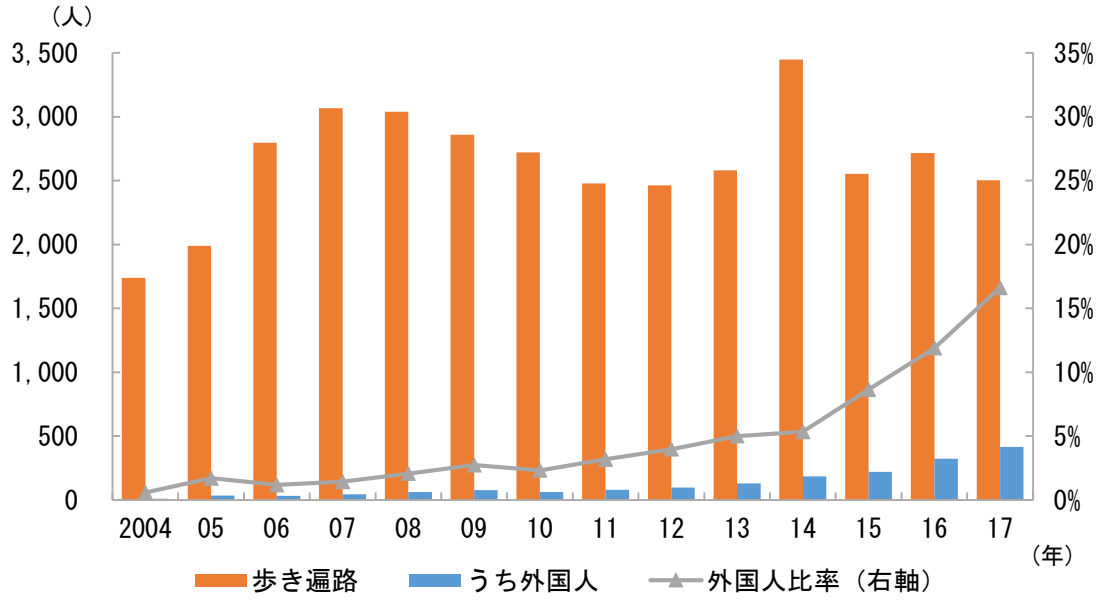
また、スペイン・サンティアゴ巡礼路への巡礼者が 30 万人以上にまで急増する中で、現地で出会った巡礼者から遍路の存在を知り、四国を訪れるという外国人も少なくない。

ただ、歩き遍路や外国人遍路の数は、遍路人数全体からみればごく少数である。仮に、太龍寺ロープウェイ輸送実人員の最近５年間の平均 7.8 万人を年間遍路人数とし、最近の遍路大使任命数を歩き遍路（約 2,500 人、うち外国人歩き遍路約 400 人）とすると、遍路人数に占める割合は歩き遍路が約３％、外国人歩き遍路は約 0.5%に過ぎない。外国人の受入が進んでいないことが、遍路人数が大幅に減少する一因になっているとも言える。

---

[4] 88 ヶ寺を全て廻り終えることを「結願」（けちがん）という。
[5] モートン常慈監修・翻訳『Shikoku Japan 88 Route Guide』（(株)ぶよお堂、2007 年初版、2018 年第 6 版）
[6] ﾏﾘｰ=ｴﾃﾞｨｯﾄ・ﾗｳﾞｪﾙ著『Comme une feuille de thé à Shikoku』（「四国の木の葉のように」、2015 年）。日本語訳では『フランスからお遍路に来ました。』（(株)ｲｰｽﾄ・ﾌﾟﾚｽ、2016 年）の書名で発刊されている。

図表1-7 遍路大使任命数（対象：結願した歩き遍路）



注１）各年の７月１日～翌年６月30日までのデータ
　　例えば、2004年は2004年７月１日～2005年６月30日の合計
注２）１年間のデータがとれる2004年７月１日以降のデータにより、グラフ化した
資料：NPO法人遍路とおもてなしのネットワーク HP

図表 1-8 外国人歩き遍路の国籍別人数（計 36 ヵ国）

大陸	国名（人数）
ヨーロッパ［17 ヵ国］	①フランス(66)、④オランダ(35)、⑤ドイツ(31)、デンマーク(29)、スイス(14)、イタリア(12)、ベルギー(9)、イギリス(5)、フィンランド(5)、スペイン(3)、ポーランド(3)、クロアチア(3)、オーストリア(2)、リトアニア(2)、ノルウェー(2)、スウェーデン(1)、エストニア(1)
アジア［10 ヵ国］	②台湾(46)、韓国(21)、中国(9)、香港(8)、シンガポール(6)、イスラエル(3)、マレーシア(1)、タイ(1)、マカオ(1)、バングラデシュ(1)
北アメリカ［3 ヵ国］	③アメリカ(40)、カナダ(22)、メキシコ(1)
南アメリカ［2 ヵ国］	ブラジル(3)、チリ(1)
オセアニア［3 ヵ国］	オーストラリア(22)、ニューカレドニア(5)、ニュージーランド(1)
アフリカ［1 ヵ国］	南アフリカ(1)

注１）2017 年（同年 7 月 1 日～翌年 6 月 30 日）に遍路大使に任命した外国人遍路の国籍別内訳
注２）国名左の丸数字は順位を示す（上位 5 ヵ国）
資料：NPO 法人遍路とおもてなしのネットワーク

1.5 遍路人数の今後の見通しと四国遍路新時代の幕開け

(1) 今後の見通し

今後については、日本人自体の人口減少が加速するうえ、定年延長などを背景とした働く高齢者の増加で「定年退職したら遍路に行こう」という高齢者も減る可能性がある。また、日本人の宗教離れやレジャーの多様化、国内外の観光地との競合激化等はさらに進むことが予想される。

これらの要因に加え、個人旅行志向の高まりや自動車の保有・運転を敬遠する人の増加とも相まって、団体バス遍路やマイカー遍路が増勢を回復するのは非常に難しいと考えられる。

こうしたことから、日本人遍路は引き続き減少傾向をたどる可能性が高い。

なお、太龍寺ロープウェイの輸送実人員について、前回のピーク時期だった 2000 年頃から最近までの年平均増減率は、約▲3.3%と試算される。仮に、太龍寺ロープウェイの輸送実人員を遍路人数の近似値とし、上記の年平均減少率▲3.3%が今後も続くと仮定すると、将来の遍路人数は現行の水準に比べ、20 年後には半減し、30 年後にはほぼ３分の１まで減少すると試算される（右頁の【参考１】を参照)。

お遍路さんの減少は遍路文化の維持・継承の観点からも深刻な問題であり、今から将来に向けた布石を打つことが重要となる。

(2) 四国遍路新時代の幕開け

昭和の時代に始まった団体バス遍路、その後、本四連絡橋開通とともに平成の時代に本格化したマイカー遍路によって、お遍路さんのあり様が大きく変わり、その裾野も飛躍的に広がった。

そして近年、団体バス遍路とマイカー遍路が減少傾向をたどる中で、歩き遍路、取り分け外国人の歩き遍路が大きく伸びるという、新たな動きが生まれている。

外国人歩き遍路は現時点で年間 400 人程度に過ぎない。しかし、サンティアゴ巡礼路にみられるように（第３章参照)、歩きの巡礼旅は世界的なブームとなっている。このため、外国人歩き遍路は受入態勢を整備していけば、今後大幅に増えることが期待される。

昭和の団体バス遍路「四国遍路 1.0」、平成のマイカー遍路「四国遍路 2.0」に続く、令和の四国遍路は外国人歩き遍路の存在感が大きく高まり、「四国遍路 3.0」とも言うべき戦後３回目の大変革となる可能性がある。

外国人歩き遍路によって特徴づけられる「四国遍路新時代」が到来するかどうかは、四国側の受入態勢づくりにかかっている。

【参考１】遍路人数の予測（試算）

太龍寺ロープウェイ輸送実人員を遍路人数と見なして、仮に近年の減少傾向が今後も続いた場合、今から 20 年後および 30 年後に遍路人数がどの程度になるかを、以下の条件のもとで試算した。

＜試算の前提条件＞

○太龍寺ロープウェイの実輸送人員が遍路人数と一致すると仮定。

○太龍寺ロープウェイの輸送実人員は各年のバラツキが大きいため、前回のピーク時期にあたる 1998～2002 年度の５年間の平均値と、最近の５年間（2014～2018 年度）の平均値を比較する。

○上記５年間の平均値を、それぞれ 2000 年度と 2016 年度の仮値とし、この 16 年間での年平均減少率を求める。

○この年平均減少率が続くと仮定した場合、20 年後および 30 年後がどの程度の水準になるかをべき乗計算により試算する。

＜試算結果＞

太龍寺ロープウェイの輸送実人員をもとに、2000 年度と 2016 年度の仮値を計算

①1998～2002 年度の平均 134,707 人＝2000 年度の仮値

②2014～2018 年度の平均 78,417 人＝2016 年度の仮値

この仮値を使って、2000～2016 年度までの 16 年間の年平均減少率を試算すると、

▲3.3251％

この年平均減少率が将来にわたって続くと仮定して、べき乗計算を行うと、

○今から 20 年後の水準：$(1-0.033251)^{20}=0.5085$

○今から 30 年後の水準：$(1-0.033251)^{30}=0.3626$

つまり、これまでの年平均減少率が今後も続く場合、遍路人数は現行に比べ、20 年後には半減し、30 年後には３分の１にまで減少すると試算される。

２．遍路宿泊施設の現状と課題

2.1 遍路宿泊施設の構造的変化とその背景

(1) 遍路宿泊施設の類型とその特徴

お遍路さんに限らず、個人旅行者が最も頭を悩ませ、また、旅の満足度を大きく左右するのが宿泊施設である。そこで本章では、お遍路さんが札所巡りの道中で利用する宿泊施設を「遍路宿泊施設」と総称し、以下、その動向を分析した。

遍路宿泊施設としては主に、和室中心の旅館・民宿・宿坊と、洋室中心のビジネスホテル・ゲストハウスがある。和室中心の宿泊施設では風呂・洗面所・トイレが共用で、１泊２食の料金設定にしているところが多い。一方、洋室中心の宿泊施設は素泊りが一般的で、ビジネスホテルは個室、ゲストハウスは相部屋が多い。このほか、地元の人や札所が善意で宿泊場所を提供する善根宿や通夜堂などがある（図表 2-1)。

(2) 遍路宿泊施設数の推移

本調査では、へんろみち保存協力会編『四国遍路ひとり歩き同行二人』に掲載の「宿泊施設一覧表」をもとに、遍路宿泊施設の経年推移をみた。同書は 1990 年の初版以降、2019 年３月時点で第 11 版まで版を重ねており、お遍路さんに定評のあるガイドブックである。

同書に掲載された遍路宿泊施設は、1997 年（第５版）に 712 軒だったのに対し、2016 年（第 11 版）には 688 軒となっており、この 19 年間で総数はほとんど変わっていない。

ただ、その内訳をみると、次の通り、それぞれに特徴的な動きがみられた（図表 2-2)。

○旅館が 332 軒から 219 軒へ大幅に減少（▲113 軒、▲34.0％）

○寺院が運営する宿坊も 45 軒から 24 軒へほぼ半減（▲21 件、▲46.7％）

○ビジネスホテルが 141 軒から 225 軒へ大幅に増加（＋84 軒、59.6％増）

○民宿とゲストハウスはそれぞれ７軒増加

このように、遍路宿泊施設にも構造的な変化が起きている。

(3) 遍路宿泊施設の種類別増減の背景

札所へのアンケートの中で、宿坊を休廃業した札所に、その理由を尋ねたところ、「宿泊客の減少」、「個室志向などお遍路さんのニーズに応えられない」、「施設の老朽化」、「人手不足」といった要因が挙げられた（図表 2-3)。

このことから、宿坊や旅館が減少する背景には、遍路人数の減少に加え、団体旅行から個人旅行へのシフトが進む中で、ビジネスホテル等に利用者が流れたこと、また、宿主の高齢化・後継者難、人手不足の深刻化などがあると推察される。

一方で、個室中心のビジネスホテルは、マイカー遍路など個人の遍路客以外に、観光客やビジネス客も取り込むことで増加しているものとみられる。また、民宿やゲストハウスは家族経営主体のため、人手確保や人件費負担が経営上の制約とはならず、また、ＵＩＪターン者による新規開業もあって、少しずつ増えているものと考えられる。

図表 2-1 遍路宿泊施設の類型別特徴

種類別	料金(一般的な目安)	一般的な特徴
旅館	1泊2食 8,000～16,000円	和室、共同の風呂
民宿	1泊2食 7,000～ 8,000円	和室、共同の風呂・洗面所・トイレ
宿坊	1泊2食 6,000～ 7,000円	
ビジネスホテル	素泊り 5,000～8,000円	洋室、個室に浴槽・洗面所・トイレあり
ゲストハウス	素泊り 2,000～4,000円	2段ベッドで相部屋、共同の風呂・洗面所・トイレ
善根宿	無料：地元の人が善意で泊まる場所を提供（食事を出すところもある）	
通夜堂	無料：札所が善意で寝る場所を提供	

注)上記以外にも料金が高目に設定されているシティホテルやリゾートホテルがある

図表 2-2 遍路宿泊施設の類型別推移

（単位：軒）

種類別	1997年(①)	2016年(②)	増減率(②－①)
旅館	332	219	▲34.0% （▲113）
民宿	165	172	4.2% （＋7）
宿坊	45	24	▲46.7% （▲21）
ビジネスホテル	141	225	59.6% （＋84）
ゲストハウス	9	16	77.8% （＋7）
善根宿・通夜堂	20	32	60.0% （＋12）
計	712	688	▲3.4% （▲24）

資料：へんろみち保存協力会編『四国遍路ひとり歩き同行二人』をもとに作成

図表 2-3 宿坊を休廃業した理由

・人手不足、常連客の減少、近隣に宿泊施設があるため
・泊り客の減少、人手不足
・人手不足、お遍路さんの個室志向に対応できない
・「個室が良い」、「テレビが欲しい」といったお遍路さんの要求に応えられなくなった
・施設の老朽化

資料：「遍路の受入態勢等に関するアンケート調査」（対象：四国八十八ヶ所霊場）の自由記入回答から抜粋して作成

2.2 過疎地域を中心とした遍路宿泊施設不足の顕在化

(1) 宿泊施設の地域間格差

旅館・宿坊の減少とビジネスホテルなどの増加は、宿泊者ニーズの変化に沿った動きとも言え、一見すると問題がないように見える。ただ、遍路宿泊施設を地図上にプロットすると、地域間で大きな格差があることが分かる（図表 2-4)。

総じて言えば、宿泊施設は一定規模の都市や有名観光地の周辺に多く立地する一方、人家の少ない山間部や太平洋沿岸では少なくなっており、空白地域も散見される。

なお、遍路宿泊施設の集まっている地域でも、一般の観光シーズンと遍路シーズンが重なる春・秋の土日祝日には、宿が取りにくくなっている。

(2) お遍路さんの種別ごとにみた宿泊施設の課題

団体バス遍路については、旅行会社が事前にホテル・旅館の客室を確保した上でツアーを募集しているため、宿泊施設の不足は大きな問題とはならない。また、マイカー遍路についても、ネット情報やカーナビを駆使して車で広域的に宿を探すことができるため、宿不足は余り深刻な問題とはなっていないと考えられる。

お遍路さんの中で、宿不足が大きな問題になるのが、歩き遍路である。歩き遍路は、その日の体調や天候、遍路道の地形の厳しさなどによって毎日の歩く距離が変わるため、当日もしくはせいぜい翌日の宿しか予約しない。長距離を歩いた後に、疲れて飛び込みで宿を探すケースも少なくない。このため、泊まりたいと思った場所で宿が確保できないと、予定以上の長距離歩行を余儀なくされたり、最悪の場合、野宿するケースも出てくる。また、緊急避難措置として、離れた市街地にあるビジネスホテルなどにタクシーで行って泊まり、翌日再びタクシーで前日の地点まで戻り、そこから歩き遍路を続ける人もいる。

このため、歩き遍路は宿不足の解消を切望している。

(3)歩き遍路からみた宿泊施設の不足地域

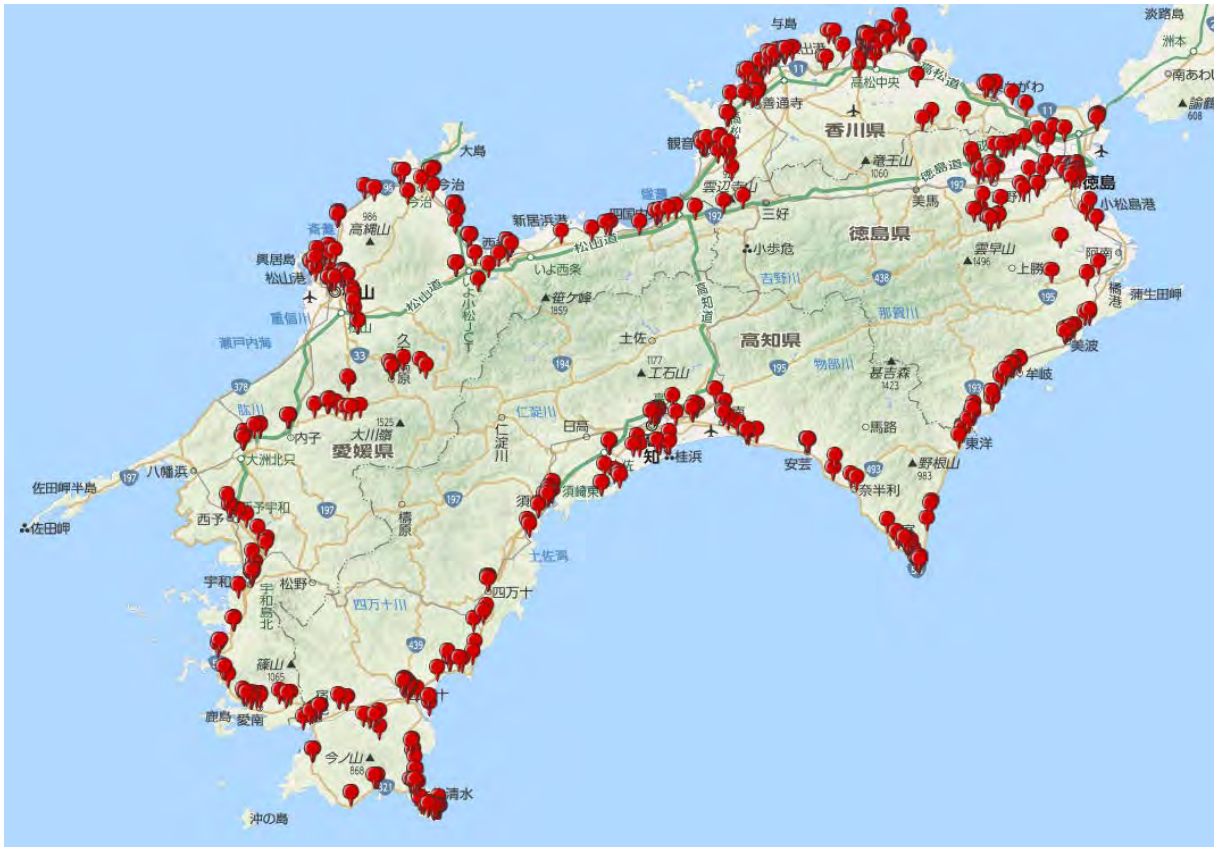
歩き遍路経験者に聴取したところ、宿泊施設が特に足りない地域としては、徳島県の 19 番立江寺（小松島市）～21 番太龍寺（阿南市)、高知県の 27 番神峯寺（安田町）周辺、35 番清瀧寺（土佐市）～38 番金剛福寺（土佐清水市)、愛媛県の 41 番龍光寺（宇和島市)・42 番仏木寺（同）周辺などが挙がった（図表 2-5)。

ただ、歩き遍路が 1 日に歩く距離は、同じ場所から出発したとしても、年齢や体力、経験、その日の体調などによって、お遍路さんごとに大きく異なる（概ね 20～40km 程度)。そのため、宿が足りないと感じる地域も、歩き遍路によって個人差がある。

また、宿は遍路道沿いが望ましく、遍路道から 1 km 以上離れると、「宿が遠い」、「宿がない」と感じてしまう。

このため、特に遍路道沿いで宿泊施設が不足している地域では、宿の整備が急がれる。

図表 2-4 遍路用ガイドブックに記載されている宿泊施設の位置



資料：へんろみち保存協力会編『四国遍路ひとり歩き同行二人』をもとに作成

図表 2-5 遍路宿泊施設が不足気味の主な地域

	宿が不足気味の地域	札所間の距離
徳島県	19番立江寺（小松島市）～20番鶴林寺（勝浦町）	13.1km
	20番鶴林寺（勝浦町）～21番太龍寺（阿南市）	6.7km
	23番薬王寺（美波町）～24番最御崎寺（室戸市）	75.4km
高知県	27番神峯寺（安田町）周辺	―
	35番清瀧寺（土佐市）～36番青龍寺（土佐市）	13.9km
	36番青龍寺（土佐市）～37番岩本寺（四万十町）	58.5km
	37番岩本寺（四万十町）～38番金剛福寺（土佐清水市）	80.7km
愛媛県	41番龍光寺（宇和島市）・42番仏木寺（宇和島市）周辺	―
	43番明石寺～44番大寶寺のうち、大洲市から内子町にかけて	67.2km
	53番円明寺～54番延命寺のうち、松山市北条、今治市菊間、大西	34.4km
	59番国分寺～60番横峰寺のうち、横峰寺に上がる手前（西条市）	27.0km
	65番三角寺～66番雲辺寺のうち、雲辺寺に上がる手前（三好市）	18.1km

資料：歩き遍路経験者への聴取をもとに作成

2.3 遍路文化の維持・継承の観点からみた宿泊施設の課題

(1) おもてなしを実感できる「遍路宿」

遍路文化の維持・継承という観点からは、宿泊施設の中身にも目を向ける必要がある。

例えば、四国らしい遍路文化を体験できる宿泊施設として、「遍路宿」と呼ばれる小規模な旅館や民宿がある。典型的な遍路宿では、「入り口に杖を洗う水瓶や杖拭きの清潔なタオルがある」といった配慮があり[7]、それが信心深いお遍路さんの琴線に触れる。また、宿泊者同士が情報交換しながら食事をすることができたり、遍路道情報や足のマメ治療など歩き遍路に関する相談に的確に対応してもらえると、四国遍路が印象深い旅になる。

こうしたお遍路さんに十分な気配りができる「遍路宿」（図表 2-6）は大変貴重であるものの、宿主の高齢化や後継者難で徐々に減ってきている。

(2) 遍路ならではの体験ができる宿坊

宿坊は、札所の敷地内という特別な場所で寝起きし、また、早朝や夕方には本堂でお勤め（読経・礼拝）に参加できるなど、四国遍路ならではの体験ができる宿である。

宿坊は、団体バス遍路などの大人数が泊まれるように、相部屋を前提にトイレ・洗面所等の設備が共用になっている所が多い（図表 2-7）。そのため、プライバシーを重視する最近の利用者ニーズとミスマッチが起きている面もある。また、食事づくりや客室清掃等で檀家の主婦や近所のパートに頼りがちなため、地域で人口減が進む中、人手の確保が運営上の課題となっている。

図表 2-7 四国八十八ヶ所霊場にある宿坊

札所番号	札所名（所在地）	定員	宿泊料金(税込)
2	極楽寺（鳴門市）	100名程度	1泊2食6,480円
6	安楽寺（上坂町）	350名程度	1泊2食7,200円
7	十楽寺（阿波市）	70名程度	1泊2食7,700円
12	焼山寺（神山町）	50名程度	1泊2食6,000円
13	大日寺（徳島市）	150名程度	1泊2食6,000円
19	立江寺（小松島市）	200名程度	1泊2食6,500円
23	薬王寺（美波町）	10名程度	（宿泊時に問い合わせ）
24	最御崎寺（室戸市）	150名程度	1泊2食7,000円～
26	金剛頂寺（室戸市）	100名程度	1泊2食6,000円
37	岩本寺（四万十町）	80名程度	1泊2食6,000円
38	金剛福寺（土佐清水市）	120名程度	1泊2食5,775円
40	観自在寺（愛南町）	150名程度	素泊り4,000円
44	大寶寺（久万高原町）	150名程度	（宿泊時に問い合わせ）
58	仙遊寺（今治市）	50名程度	1泊2食6,500円
75	善通寺（善通寺市）	250名程度	1泊2食6,100円
81	白峯寺（坂出市）	10名より受付	（宿泊時に問い合わせ）

資料：へんろみち保存協力会『四国遍路ひとり歩き同行二人』などをもとに作成

[7]杖は弘法大師の化身とされており、お遍路さんは非常に大切に扱う。

図表 2-6 遍路宿におけるお遍路さんへの気配りの例

項目	重要度	内容
建物	◎◎	入り口にお杖を洗う水瓶があり、杖拭きの清潔なタオルがある
	◎◎	お杖は、部屋に持参し、床の間にお杖立てがある
	○	玄関には靴脱ぎ、靴紐を結ぶ時に姿勢を楽にできる
	○	玄関は少し広め
	◎◎	室内でインターネットが使える。Wi-Fi環境が望ましい
	○	雨天時は、雨合羽を乾かしてくれる
	◎	靴を乾かしてくれる気遣いがある（新聞紙、靴乾燥機など）
	◎	建物が古くても掃除が行き届いている
	○	玄関に季節の草花・生け花
	○	宿の看板や屋内の各案内板には、英語が併記されている。
トイレ	◎◎	トイレは洋式が好ましい
風呂	○	風呂は広めで清潔、足を伸ばしてゆったり入れる広さ(シャワー必要)
		タオルとバスタオルがあればベター
部屋		部屋に季節の花一輪
		歯磨きセットがある（ｵﾌﾟｼｮﾝ）
寝具	◎	布団はお遍路さんが敷くほうがよい。宿の人が勝手に部屋に入らない
	◎	敷布、布団は清潔・キレイ
		寝具には洗いたてのカバーが準備されていること
		枕カバー、毛布カバー、布団カバーなどをあれば、ありがたい
洗濯	○	宿泊客数に対応できる洗濯機、乾燥機がある
	○	洗濯ネットがあれば、ベター
食事	◎	食事の持ち込みOKで、電子レンジで加熱ができる
	○	宿泊者みんなが情報交換しながら食事ができる雰囲気作りが大事
	○	お互いに簡単な自己紹介ができる雰囲気がある
庭	○	いつも花壇に季節の花がある
	○	雑草が少なく手入れがされている
	○	花木に実が実り花が咲く
宿の対応	◎	お遍路さんが、なんでも相談できる雰囲気がある
	○	マメ治療、筋肉痛等の知識があり、薬完備で優しく対応してくれる
	◎◎	お遍路さんを大事にしてくれる
	◎◎	お遍路に精通していること。 特に歩き遍路経験者が望ましい
	○	遍路道情報に詳しい
	○	宿情報に詳しい。信頼できる宿を紹介してくれる
	○	遍路道の食堂や休憩所、トイレ情報に詳しい
	○	天気情報の的確なアドバイス
	◎	お遍路さんの相談に、臨機応変な対応ができる
	○	お遍路に関する書籍や資料が揃えてある
	○	食後、お遍路相談コーナータイムがあり、いろいろと相談にのってくれる
		菅笠の補修、荷物の作り方、地図の見方、歩き方、雨天対策等
	◎◎	遍路道や遍路情報を知らせてくれる方はありがたい
	○	緊急時には車の送迎してもらえる
	○	宿の場所・位置が分かる看板や地図があればよい
お接待	○	宿に家屋的な雰囲気があり、気が休まる宿
		アメとか饅頭などがあれば、お茶を飲みながら、親交を深める
	○	物より気遣いが嬉しい
料金	◎	料金に見合ったサービス内容が必要
	◎	旅館・遍路宿は食事有で6,500円くらいが多いが素泊りは3000円以下が望ましい

資料：（一社）へんろみち保存協力会 木下昭三氏提供資料を一部改変

(3) 善意に支えられる善根宿・通夜堂

地域住民がお遍路さんを無料で泊める「善根宿」や、札所が無料で寝場所を提供する「通夜堂」は、四国のお接待文化を象徴する宿と言える。

善根宿や通夜堂は、寝る場所が無くて困っているお遍路さんへの特別な配慮で提供されるものである。このため、地域住民や札所の善意と、泊めさせて頂いたお遍路さんの感謝の気持ちが合わさってこそ、円滑に成り立つ宿である。

善根宿や通夜堂の存在は、以前はお遍路さん同士の口伝えや、ご近所や札所からの紹介で知られていた。しかし、最近はテレビで紹介されたり、善根宿と通夜堂の一覧表やお遍路さんの体験談がネットを介して広く拡散されている。その結果、多様な価値観を持った人が泊まるようになり、それに応じて様々なトラブルが増えている。

例えば、宿を運営する側からは、「持ち込んだ弁当ガラなどのゴミを片付けずに出ていった」、「いきなり夜中に来て泊まらせて欲しいと言い、翌朝にはお礼や挨拶もなく、姿がいなくなった」、さらには「火の不始末で危うく火事になりかけた」といったマナー違反や不注意の事故が起きている。さらに、「参拝もせずに通夜堂に泊まらせて欲しいと言う」、「歩き遍路を装って善根宿に泊まり、隙をみて同宿者の財布からお金を盗んだ」など、およそお遍路さんとは思えない人や犯罪者が利用する例も報告されている。

このため、関係者からは「善根宿の情報をネットなどで不特定多数に知らせるべきでない」、「間違いのないお遍路さんだけに宿を紹介すべきだ」といった声も出ており、マナー違反やトラブルなどに嫌気が差して、閉鎖する善根宿もあると聞く。

一方で、善根宿等の成り立ちや運営の実情を知らない巡礼者からは、「四国にはタダで泊まれるところがたくさんあると聞いて来たのに、あまり泊まれなかった」、「善根宿に泊めさせてもらえず、差別された」といった不満も寄せられている。

人の善意を当然視して感謝の気持ちのないような来訪者を呼び寄せることは、四国の「お接待文化」の存続を危うくすることになりかねない。善根宿や通夜堂は、あくまで寝場所に困ったお遍路さんのための緊急避難的な宿と位置づけるべきであろう。

(4) 野宿について

歩き遍路の中には、テントを携行するなどして野宿をする巡礼者がいる。「弘法大師は橋の下で寝たという伝説があり、野宿も良いのではないか」という見方がある。

しかし、四国遍路に詳しい関係者は、一般の方に野宿を勧めない。野宿には強盗や暴行などの重大な犯罪に巻き込まれたり、猪などの危険な動物に出会うリスクがある。また、お遍路さんにとっても寝袋などで荷物が重くなり、ゆっくり安眠もできないなど、体への負荷が大きくなる。本人が気づかないまま着衣や体が汗臭くなり、周囲の人に不快感を与えることもある。さらに、住民も近所で見知らぬ人が野宿していると不安を覚える。

こうした点を承知の上で、どうしても野宿を希望する巡礼者には、キャンプ場など危険が少なく、住民にも不安を与えないような場所に誘導することが望ましい。

2.4 遍路宿泊施設を巡る動き

(1) 空家を活用した宿経営

最近の動きとして、民泊新法の施行も追い風となって、四国各地で空家を活用した宿泊施設が増えつつある。

例えば、新居浜市にある「遍路宿 横屋」は、実家が空家となっていた松山市在住者と、遍路宿の経営を希望する長野県出身の女性がうまく出会ったことで生まれた民泊の宿である（写真 2-1 左)。実は、四国遍路を経験すると、遍路宿を営んで「お遍路さんのお世話をしたい」と思う人が少なくないようである。

民泊は、旅館業法が適用される宿泊施設に比べ、開業に当たっての初期投資が少なくて済むものの、民泊新法により営業日数が年間 180 日以内に制限される。ただ、冬や夏のオフシーズンにはお遍路さんが大きく減少するため、お遍路さん中心の宿の場合、営業日数の制限は余り問題とならないようである。

これ以外にも、ＵＩＪターン者などが空家を改装するなどして、旅館業法が適用される民間の宿を新たに経営する事例も増えている（写真 2-1 右)。

こうした動きを宿不足解消に役立てていくことが求められる。

写真 2-1 空家を活用した「遍路宿」と保養所跡を活用した民宿

資料（左）:「遍路宿 横屋」（愛媛県新居浜市、横屋 HP より）
（右）: 民宿「ＯＮＩＷＡ」（高知県芸西村、（株）四銀地域経済研究所撮影）

(2) 地域住民の力を活かした公設民営の宿

行政が整備を担い、運営は地域住民が行う公設民営の宿泊施設の中に、遍路宿として利用されているところがある（図表 2-8)。

○「ふれあいの里さかもと」（徳島県勝浦町）

徳島県勝浦町には、廃校（旧坂本小学校）を活用した農村体験宿泊施設「ふれあいの里さかもと」がある（写真 2-2)。

ここは、勝浦町が事業主体となり、国の補助事業を活用して建物の改装が行われ、2002 年に開業した。住民有志が中心となって設立した「坂本グリーンツーリズム運営委員会」が勝浦町からの指定管理により運営を行っている。

この施設は 88 ヶ寺を巡る通常のルートからは約７km も離れているものの、年間の利用者数のうちお遍路さんが半数弱を占める。近辺の遍路道沿いで宿が不足気味であるのに加え、要望があれば約 7.5km 離れた道の駅まで住民が車で無料送迎していること、また、番外霊場へ行く途中に位置することが、お遍路さんが利用する要因となっている。

住民は交代で食事づくりや配膳、清掃、フロント受付などに従事しており、特に地元産の食材を活かした料理は宿泊者に好評である。

○「川登筏の里交流センターいかだや」（愛媛県内子町）

愛媛県内子町には、旧川登（かわのぼり）小学校の跡地を活用した「川登筏の里交流センターいかだや」がある（写真 2-3)。

ここは、かつてあった遍路宿を新たに復元した宿泊兼交流施設であり、国の農業構造改善事業を利用して内子町が整備し、2004 年に開業した。地元の自治会長が指定管理者となって、住民有志による地域づくりグループ「おむすび会」が運営している。メンバーは全員、宿経営の素人であり、湯布院等へ視察に行って料理のメニューを考えるなど、開業準備に精力的に取り組んだとのことである。

この施設は遍路道沿いに位置しているほか、建物内には浴室が２つあり、洗濯機や乾燥機も２台備え付けているなど、歩き遍路にとって使いやすい宿となっている。

利用者から予約が入ると、メンバーが集まり、客室清掃や食事の準備などを行い、地元食材を活かした食事を提供している。なお、夜間には管理人が不在となる。

どちらの施設も、スタッフとして働いた人に相応の時給を支払うほか、料理に使う食材を地元から購入している。このため、住民にとっては現金収入を得る場になっており、宿の利用者との楽しい交流もやり甲斐に繋がっている。

また、遍路道沿いにある前後の宿との間で宿泊希望のお遍路さんを相互に紹介し合っており、こうした宿泊手配の代行が日本語を話せない外国人遍路などに喜ばれている。

図表 2-8 「ふれあいの里さかもと」と「川登筏の里交流センターいかだや」の概要

	宿泊料金	客室数	2017 年の宿泊者数
ふれあいの里さかもと	１泊２食 7,020 円 素泊り 4,320 円	和室７室	2,765 人 うち遍路 1,258 人
川登筏の里交流センター いかだや	１泊２食 8,700 円 （２名の場合 7,700 円） 素泊り 4,500 円	和室３室 など	717 人 うち遍路は 5～6 割

資料：両施設への聞き取りなどをもとに作成

写真 2-2 廃校を活用した公設民営の宿「ふれあいの里さかもと」
（徳島県勝浦町）

注）旧坂本小学校を宿に改装（左）。手作りの夕食を楽しむ欧州から訪れた外国人遍路（右）
撮影：四国経済連合会

写真 2-3 遍路宿を復元した公設民営の宿「川登筏の里交流センターいかだや」
（愛媛県内子町）

注）廃校になった旧川登小学校の敷地に建つ建物（左）。遍路宿を復元した宿だが、食事をする「囲炉裏の間」は地元住民の会合などにも使われている（右）
撮影（左）：（株）いよぎん地域経済研究センター
写真提供（右）：森本 純一氏

【参考２】スペイン・サンティアゴ巡礼路の巡礼宿「アルベルゲ」

スペインにある世界遺産「サンティアゴ巡礼路」では、簡易な巡礼宿「アルベルゲ」が多数整備されており、多くの巡礼者を迎え入れている。

そこで、遍路宿泊施設不足を解決する糸口を探るため、スペインの巡礼宿「アルベルゲ」について調査した（詳しくは資料編の資料Ⅳ参照）。以下はその概要である。

(1) 行政主導による巡礼宿「アルベルゲ」の整備

サンティアゴ巡礼路では、ガリシア州政府内にあるシャコベオが中心となって、過疎地で使われなくなった建物を公費で買い取って宿泊施設に改装し、素泊りの簡易な巡礼宿「アルベルゲ」を整備している（写真 2-4）。また、最近は民間のアルベルゲも多くなっている。

アルベルゲは巡礼ルート上の各地にあり、客室は２段ベッドが並んだドミトリー形式である（写真 2-5）。素泊りで食事を提供しないため、周辺に飲食店や商店などが自然発生的に出店している。また、予約は受け付けておらず、巡礼者が宿に着き次第、先着順で受け入れている。このため満室で宿泊できない巡礼者や、たまには個室でゆっくり休みたいという巡礼者が泊まれるよう、その周辺には民間のアルベルゲやホテル・ペンションなども新たに開業するようになる。いわば格安の巡礼宿を起点に宿場町が形成され、巡礼者の利便性を高めると同時に、地域活性化にも繋がっているのである。

(2) 公的機関による宿泊施設整備の背景

わが国では、行政主導で宿泊施設を整備することについて、「財政上の負担」、「不透明な事業採算」、「運営スタッフの確保難」、「民業圧迫」など様々な観点から疑問が呈されることが少なくない。また、特定の宗教の巡礼者に便宜を図る宿泊施設の整備に行政が関与することに対して、「政教分離の原則に抵触するのではないか」との意見が出る可能性もある。

現地でも、当初はこれと似た反対論があったようだが、ガリシア州政府当局は、

・巡礼宿の整備は特定の宗教を支援するためではなく、あくまで地域振興を目的とする
・使われていない建物を宿泊施設として再利用することで、初期投資を抑える
・宿のサービスを必要最低限にとどめることで、運営経費を極力切り詰める
・国内外からボランティアの世話人を受け入れ、人材確保と人件費抑制の両立を図る
・寝泊まりするだけの山小屋のような簡素な施設・サービスとし、利用は巡礼者に限り連泊も認めないといった制約を課すことで、民間の宿泊施設との競合を回避する

などの方針のもと、アルベルゲを整備していった。

こうして予算や経営面での課題を克服するとともに、民間宿泊施設との棲み分けを図りつつ、安価な料金設定の実現に成功している。

ちなみに、一般的なアルベルゲの宿泊料金は、公営で５～10 ユーロ（１ユーロ＝125 円として、625～1,250 円）、民営で 10～15 ユーロ（同 1,250～1,875 円）と格安である。

写真 2-4 スペイン・サンティアゴ巡礼路の巡礼宿「アルベルゲ」

注）左は空家となっていた農家、右は以前は病院だった建物をアルベルゲに転用したもの
写真提供：北山 健一郎氏

写真 2-5 巡礼宿「アルベルゲ」の客室（ドミトリー形式）の様子

注）左は小さめのアルベルゲの室内。右は大部屋のアルベルゲの室内
　　なお、利用者はチェックイン時に使い捨てのシーツと枕カバーを受け取る
写真提供（左）：北山 健一郎氏
撮影（右）：四国経済連合会

(3) 運営コストを削減するための工夫

アルベルゲでは、「相部屋（男女同室も多い）、素泊りのみ、宿泊申込は予約を受け付けず先着順、寝具は宿泊者が寝袋を持参、シーツは使い捨ての不織布製を受付で利用者に渡す」など、徹底した経費削減の工夫がなされている。

また、世界各地からサンティアゴ巡礼路に魅せられたリピーターが来るので、彼らに一定期間ボランティアで世話人として働いてもらっている。豊富な巡礼経験を持つ彼らは、巡礼者の気持ちに寄り添って相談に乗り、的確なアドバイスをすることもできる。

彼らはボランティアの期間を務め終えると、巡礼路など各地を巡る旅を楽しんでいる。つまり、歩き旅の愛好家を宿のボランティアスタッフに採用して、人件費をかけないようにしているのである。

(4) アルベルゲによる四国への示唆

アルベルゲは、サンティアゴ巡礼路における巡礼者の増加や地域の活性化に大きく貢献している。このため、四国において遍路宿泊施設のあり方を検討する際には、アルベルゲの手法が非常に参考になると考えられる（図表 2-9)。

例えば、

○　四国では、利用者の個室志向が和室中心の遍路宿の定員稼働率低下に繋がるとともに、各地での宿不足に拍車をかけている。一方で、アルベルゲでは宿泊料金を下げる代わりに大人数の相部屋とすることで、客室スペースを有効利用し、より多くの巡礼者に宿を提供している。

○　日本で一般的な１泊２食を基本とする宿では、調理の設備やスタッフを抱える分、コスト高になる。また、歩き遍路は体力や天候などの関係で、急なキャンセルや事前連絡なしのキャンセルが発生しがちで、その場合、準備した食事が無駄になる[8)]。一方､アルベルゲでは素泊りのみとすることで､厨房関係の経費やスタッフを皆無とし、キャンセルによる余計な経費負担も一切なくしている。また、アルベルゲの周辺には食堂等が開業し、地域でのビジネス機会、雇用の場づくりにも繋がっている。

○　四国の遍路宿では、予約受付のため常時留守にできない。また、布団の整理やシーツ敷きなどにも人手がかかる。一方、アルベルゲでは、予約を受け付けず寝具もないため、スタッフは適宜外出できるほか、勤務時間中は施設清掃や巡礼者への相談対応に専念できる。

[8)]宿での食事については、歩き遍路によっては、レトルト食品やカップ麺などの自販機、および温めるための電子レンジやお湯さえあれば差しつかえないという意見もある。

図表 2-9 一般的な遍路宿とサンティアゴ巡礼路の巡礼宿「アルベルゲ」との運営面等の相違点

	一般的な遍路宿 〔→課題〕	公営のアルベルゲ 〔→運営面等の利点〕
設置主体	民間	自治体・教会など
利用形態	１泊２食 （→調理の設備やスタッフが必要になる。また、キャンセル時に食材が無駄になる）	素泊り （→調理設備や料理人が不要。近所に食堂や商店が集積するようになる）
宿泊料金	７千円程度 （→全行程 50 日程度を要する歩き遍路には負担が大きい）	５～10 ユーロ(625～1,250 円※) 民営では 10～15 ユーロ（1,250～1,875 円）
客室	和室 （→最近は相部屋拒否の利用者が増え、定員稼働率や収益性の低下につながっている）	相部屋・２段ベッド （→客室スペースをフルに有効活用できる）
寝具・シーツ	宿が布団・シーツを準備 （→人件費を含め、コスト高の要因になりがち）	利用者が寝袋を持参、シーツは不織布製で使い捨て （→シーツ代は利用料金に含まれているため、宿側の費用負担はない）
スタッフ	宿主の家族やパートなど （→従業員確保が大きな課題）	巡礼を経験したボランティア （→宿側の人件費負担なし）
予約の有無	予約優先 （→急なキャンセルや無断キャンセルで機会損失が発生しがち）	予約不可・先着順 （→キャンセルによる損失なし。日中の予約受付スタッフも不要）
連泊	連泊可 （→連泊者向けに、別メニューの食事を提供する手間やコストが必要となる）	連泊不可 （→連泊希望者は近くに宿を求めるため、近隣の民間ホテルにもメリットあり）

※１ユーロ＝125 円とした場合

３．外国人歩き遍路受入の意義と課題

3.1 遍路文化の維持・継承を揺るがす“４つの問題”

(1) 札所が挙げる遍路文化を継承する上での問題

これまで、お遍路さんの大幅な減少と遍路宿泊施設の不足の実態を概観してきた。これらを含め、本調査では「四国の遍路文化を将来にわたり継承していく上で、何が問題か」について、札所にアンケート調査を行った（図表 3-1)。

これによると、「巡礼者の減少」が 84.1%で大半を占めた。次いで「遍路宿泊施設の減少」が 36.4%となった。さらに、「寺院を支える檀家の減少」34.1%、「お接待の風習の薄れ」31.8%、「納経などを行う寺院職員の確保難」29.5%、「遍路道の補修をする地元ボランティアの減少」25.0%の順となった。

この結果から、多くの札所が巡礼者の減少に危機感を持っていることが分かる。また、遍路宿泊施設の減少のほか、檀家や寺院職員、地元ボランティアの減少といった地域の人口減少に起因する問題についても懸念している様子がうかがえる。

(2) 遍路文化の４つの主要構成要素が抱える問題

八十八ヶ所霊場（札所）を巡る四国の遍路文化は、巡礼する「お遍路さん」や、お遍路さんが歩く「遍路道」、お遍路さんを接待する「地域住民」、お遍路さんが泊まる「遍路宿泊施設」によって支えられているとも言える。

これら遍路文化の主要構成要素のうち、「お遍路さん」については、前述の通り、団体バス遍路とマイカー遍路を中心に大幅に減少している。また、「遍路宿泊施設」についても過疎地域などで宿不足が顕在化している。さらに、「地域住民」も人口流出と少子化で減り続けている。「遍路道」についても、地域住民の減少や高齢化により、生活道路でもあった昔ながらの遍路道が次第に荒れたり、豪雨等で被害を受けても早期の修復が難しくなったりする例が出ている。

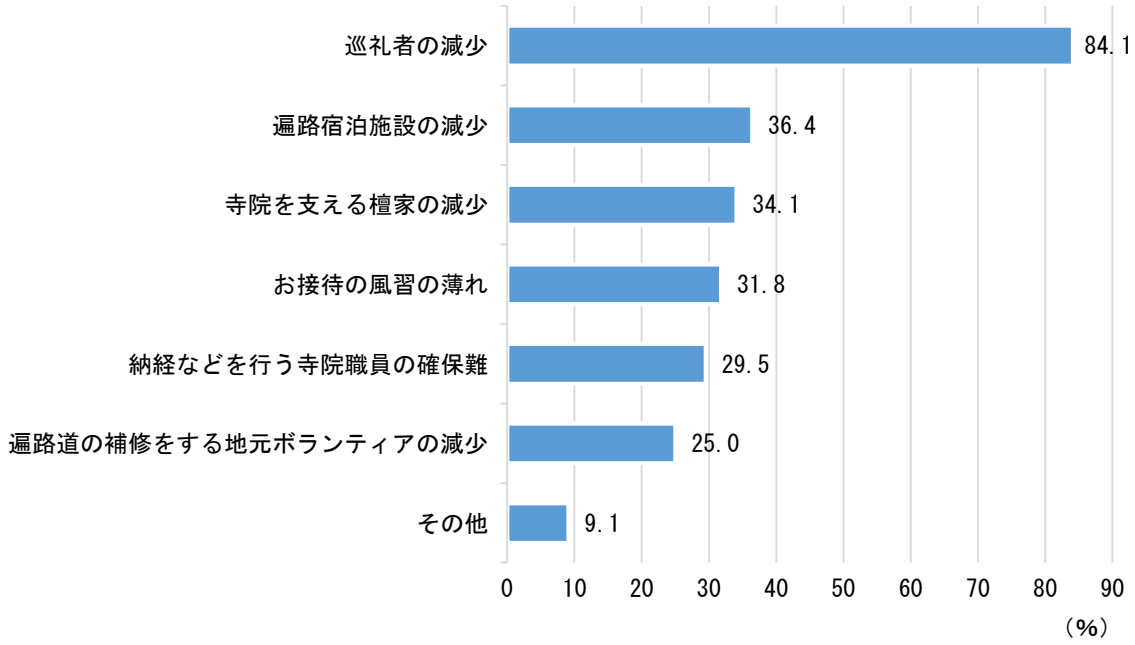
こうした「お遍路さんの減少」、「遍路宿泊施設の不足」、「地域住民の減少」、「遍路道の維持修復難」という“４つの問題”が、今後、遍路文化の維持・継承を揺るがしかねない（図表 3-2)。

これら４つの問題の根源には、わが国に押し寄せる「人口減少」という荒波があり、従来の延長線上の対応では縮小均衡に陥ることが避けられない。

この構造的とも言える問題を解決するための糸口になると期待されるのが、歩き遍路、なかんずく外国人の歩き遍路である。これが本調査を通じて、我々が最も実感したことである。

そこで本章では、外国人を中心に、歩き遍路の意義や受入態勢づくりについて取り上げる。

図表3-1 札所からみた「遍路文化を継承していく上での問題点」（n=44、複数回答）



資料：遍路の受入態勢に関するアンケート調査（対象：八十八ヶ所霊場）資料編 P.57

図表 3-2 遍路文化の維持・継承を揺るがす「４つの問題」

画像出所：遍路休憩所「坂本屋」、「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会の HP などをもとに作成

3.2 歩き遍路の意義

現状では、お遍路さん全体の約３％とみられる歩き遍路や、同じく１％にも満たない外国人歩き遍路が、何故、遍路文化の危機を打開する糸口となり得るのか。

(1) 歩き遍路は遍路文化の象徴

「白装束に菅笠、金剛杖のお遍路さんが自然の中を歩く」、これこそ遍路文化を象徴する風景である（写真 3-1 左)。歩く人がいなくなれば、もはや巡礼路とは言えない。

団体バスやマイカーで巡るお遍路さんは、誰しも「本来、四国遍路とは歩いて回るもの」との意識がある。しかし、体力的・時間的な制約があるため、バスツアーやマイカーで遍路をしている人が大半である。多くの人にとって、歩き遍路は憧れであり、歩きで結願したお遍路さんには尊敬の念を抱く。

歩き遍路がいなくなれば、巡礼路としての四国遍路の伝統が失われ、その魅力も損なわれかねない。歩き遍路は遍路文化の象徴として、最も大切にすべきである。

ただ、わが国でのさらなる人口減少や宗教心の薄れ、国内外の観光地との競争激化、さらには長期休暇を取得しにくい職場環境などを考慮すると、今後、日本人の歩き遍路を増やすことは容易ではない。つまるところ、歩き遍路を増やすには、まずは外国人に期待するしかないとも言える。

外国人遍路は白装束姿で巡礼する人が少なくない（写真 3-1 右)。これは、彼らが遍路文化に敬意を払い、その伝統を尊重していることの表れとみられる。

外国人遍路は日本人以上に四国遍路を理解し、その魅力に傾倒する人が少なくない。

(2) 遍路道の維持・保存にも寄与

遍路道は、かつて農道や林道などとして使われていた道幅の狭い公有道が多い。こうした遍路道は地域住民の日常生活の必要性から維持・修復が図られてきた。

しかし、道幅の広い舗装された新道が整備され、自動車が広く普及する中で、地域住民にとって遍路道は生活道路としての重要性が低下し、主としてお遍路さんのためにボランティアで維持補修する道になりつつある。

一方で、最近は豪雨などで遍路道が大きな被害を受けるケースも増えている（写真 3-2)。こうした中で、人口減少や高齢化で人手が足りず、遍路道の維持修復に苦労している地域も出てきている。

また、山間部の道は、歩く人が少なくなると雑木などで覆われ、道として機能しなくなる。このため遍路道を維持するには、歩く人を一定数確保することが大前提になる。

外国人を含め歩き遍路が増えること自体が遍路道の維持に繋がる。また、歩き遍路が増えて地域に経済効果がもたらされると、それが地域住民の遍路道維持への意欲を高めることにもなる。

写真 3-1 遍路文化を象徴する白装束姿の歩き遍路と外国人遍路

撮影（左）:（株）四銀地域経済研究所
撮影（右）: 四国経済連合会（男性はポーランド人、女性は香港人）

写真 3-2 2018 年夏の豪雨で土砂崩れが起きた遍路道

（左：宿毛市・観自在寺道、右：宇和島市・明石道）

資料：「四国八十八箇所霊場と遍路道」世界遺産登録推進協議会 HP

(3) 歩き遍路は地域への波及効果が大きい“贅沢遍路”

意外に思われるかもしれないが、実は、歩き遍路は団体バス遍路やマイカー遍路に比べ、格段に費用がかかる。このため、歩き遍路は別名、“贅沢遍路”とも言われている。

札所の１番から 88 番までは約 1,200km の道のりである。お遍路さんが歩く距離は１日平均 20～30km 程度である。その間、筋肉痛や足のマメといった身体の不調や悪天候などで予定通りの距離を歩けないことがある。このため、88 ヶ寺全てを一気に歩き終える「通し打ち」には、早い人で 40～45 日程度、遅い人だと約 60 日かかる。

歩き遍路の費用は、善根宿等を利用する場合を除くと、宿代が１泊６～７千円程度で、道中での飲食代や納経代金、その他諸経費を加えると、１日当たり８千～１万円が目安となっている[9]。仮に 50 日で回り終えると、40～50 万円もかかることになる（図表 3-3)。

ちなみに、四国・松山発着の遍路バスツアー（昼食・交通費込み）では、日帰りで計 16 日かけて 88 ヶ寺全て回ると、費用の合計は 175,000 円前後である（図表 3-4)。つまり、歩き遍路は遍路バスツアーに比べ、費用と所要日数がどちらも２～３倍かかることになる。

歩き遍路が遍路バスツアーに比べて２～３倍の費用がかかるということは、見方を変えれば、一人当たりの経済効果が２～３倍も大きいということである。遍路人数の減少が見込まれる中で、一人当たり消費額が大きい歩き遍路は地域経済にとって大切な存在となる。

(4) 歩き遍路は過疎地域活性化の原動力にできる

歩き遍路については、その経済効果が四国各地に広域的に広く行き渡ることも重要なポイントである。

特に遍路旅の費用でウェイトの大きい宿泊費は、団体バス遍路やマイカー遍路では主として観光地や市街地に立地する大型のホテル・旅館やビジネスホテルで支出される。これに対し、歩き遍路は札所近くや遍路道沿いに宿をとるので、過疎地域で支出するケースが多くなる。

また、仮に宿が素泊りの場合は、お遍路さんは宿の周辺で食事をしたり、弁当やおにぎりなどを地元のスーパーやコンビニ・食料品店等で購入するため、より幅広い事業者に経済効果が及ぶ。過疎地域ではビジネスや観光面での宿泊ニーズが乏しいところも多く、こうした歩き遍路による経済効果は貴重である。

前述の通り、スペイン・サンティアゴ巡礼路では、公的機関がアルベルゲと呼ばれる素泊りの巡礼宿を整備したことで宿泊客が増加し、それにつれて周囲に民間の宿泊施設や飲食店が新たに開業するなど地域に経済効果がもたらされている。

四国でも、こうした巡礼宿を拠点とした新たな地域活性化モデルを構築していくことが考えられる。

---

[9]へんろみち保存協力会編『四国遍路ひとり歩き同行二人（解説編 P.6)』では、「区切り打ち 43 日間を基準にした巡拝に要する経費は・・・（中略）装備品の購入費用を含めると約 50 万円となる。中高年齢者は１日平均１万円余の胸算用で支度している」とある。

図表 3-3 歩き遍路に要した費用の例（外国人、通し打ち）

国　籍	性別	年齢	四国滞在日数(①)	四国遍路の予算(②)	１日平均(②÷①)	うち宿泊費＋食費
カナダ	男性	60 代	42 日	40 万円	9,523 円	8,000 円
オーストラリア	女性	20 代	50 日	40 万円	8,000 円	7,000 円
オーストリア	男性	30 代	55 日	45 万円	8,181 円	7,000 円
（宿泊費を切り詰めるため、善根宿・通夜堂・野宿等を利用したと考えられるケース）						
アメリカ	男性	30 代	40 日	10 万円	2,500 円	2,000 円
ドイツ	男性	30 代	33 日	15 万円	4,545 円	2,100 円

注）上記は四国での滞在に要した費用で、四国までの交通費は含まれない
資料：「歩き遍路を対象としたアンケート調査」をもとに作成

図表 3-4 松山発着の日帰り遍路バスツアーの予算と行程

■旅行代金　食事（昼食1回）・交通費含む

回数	札所	旅行代金	巡拝コース（いずれも松山発着）
第1回	阿波8ヵ寺	8,800円	1番 霊山寺 （鳴門市） ～ 8番 熊谷寺 （阿波市）
第2回	阿波4ヵ寺	13,000円	9番 法輪寺 （阿波市） ～ 12番 焼山寺 （神山町）
第3回	阿波7ヵ寺	11,000円	13番 大日寺 （徳島市） ～ 19番 立江寺 （小松島市）
第4回	阿波4ヵ寺	15,500円	20番 鶴林寺 （勝浦町） ～ 23番 薬王寺 （美波町）
第5回	土佐4ヵ寺	12,500円	24番 最御崎寺(室戸市） ～ 27番 神峯寺 （安田町）
第6回	土佐6ヵ寺	10,500円	28番 大日寺 （香南市） ～ 33番 雪蹊寺 （高知市）
第7回	土佐4ヵ寺	12,000円	34番 種間寺 （高知市） ～ 37番 岩本寺 （四万十町）
第8回	土佐・伊予3ヵ寺	12,500円	38番 金剛福寺(土佐清水市)～ 40番 観自在寺(愛南町）
第9回	伊予5ヵ寺	9,000円	41番 龍光寺 （宇和島市） ～ 45番 岩屋寺 （久万高原町）
第10回	伊予8ヵ寺	7,500円	46番 浄瑠璃寺(松山市） ～ 53番 円明寺 （松山市）
第11回	伊予7ヵ寺	10,000円	54番 延命寺 （今治市） ～ 60番 横峰寺 （西条市）
第12回	伊予・讃岐6ヵ寺	12,000円	61番 香園寺 （西条市） ～ 66番 雲辺寺 （三好市）
第13回	讃岐5ヵ寺	10,000円	67番 大興寺 （三豊市） ～ 71番 弥谷寺 （三豊市）
第14回	讃岐7ヵ寺	10,000円	72番 曼荼羅寺(善通寺市） ～ 78番 郷照寺 （宇多津町）
第15回	讃岐5ヵ寺	10,000円	79番 天皇寺 （坂出市） ～ 83番 一宮寺 （高松市）
第16回	讃岐5ヵ寺	11,500円	84番 屋島寺 （高松市） ～ 88番 大窪寺 （さぬき市）
計16回	——	175,000円	———

注)この他、第17回は高野山へ１泊2日29,000円のツアーが設定されている
資料：（株）伊予鉄トラベル HP

3.3 外国人遍路受入の賛否とその意義

(1) 外国人による四国遍路の捉え方

外国人遍路は、団体バスやマイカー中心の日本人遍路と異なり、大半が歩きであり、その道中で旅行日程や体力等に応じて、適宜、バス・鉄道等の交通機関を利用している。

最近は外国人向けの遍路ツアーが実施されているが､その多くもトレッキング(山歩き)を前面に押し出して参加者を募集している。例えば、あるツアーでは四国遍路について、「この道は日本のサンティアゴ巡礼路である。弘法大師の足跡をたどって、古の巡礼ルートを徒歩で探索しましょう。建築や食べ物、村の生活も楽しみながらハイキングすれば、悟りの境地が開けるかもしれません」などと紹介されている（図表 3-5)。

また､日本を紹介する観光ガイドブックとして世界的に定評ある『lonely planet Japan』は、四国遍路について「WALKING THE 88 TEMPLE PILGRIMAGE（歩く 88 ヶ寺巡礼旅)」のタイトルで、文字通り、歩くことを前提に紹介している（写真 3-3)。

外国人には四国遍路＝巡礼路の歩き旅とイメージされているのである。

(2) 日本人と外国人の歩き遍路の目的

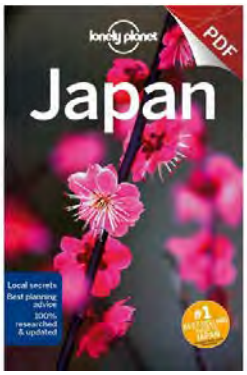
本調査では、外国人が四国遍路をどう捉えているか、また、日本人との違いは何かを探るため､歩き遍路を対象に四国遍路を巡礼する目的についてアンケートを行った（図表 3-6)。なお､外国人遍路については、サンプルが 17 名にとどまるため、データの有意性に欠けるものの、大まかな方向は把握できるとみられる。

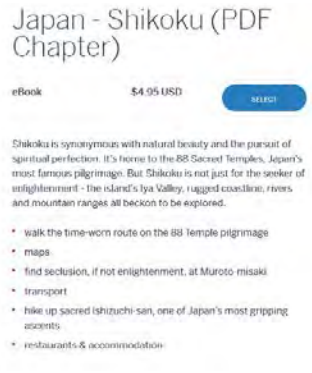
これによると、歩き遍路の目的としては、日本人・外国人いずれも「精神修養」や「歴史・文化への興味」が大きな割合を占めた。また、日本人は「故人の供養」が多い一方、外国人は「観光・トレッキング」や「地域住民との交流」を目的とする人が多かった。

外国人歩き遍路は四国遍路について、精神修養に加え、観光やトレッキング、地域住民との交流の機会として捉えている様子がうかがえる。

このため、外国人歩き遍路を増やすには、四国遍路の道中で、観光やトレッキングとしての魅力を高めること､また､住民との交流機会を増やすことが重要であると考えられる。

写真 3-3 英語の旅行ガイドブック『lonely planet Japan』の四国遍路紹介編



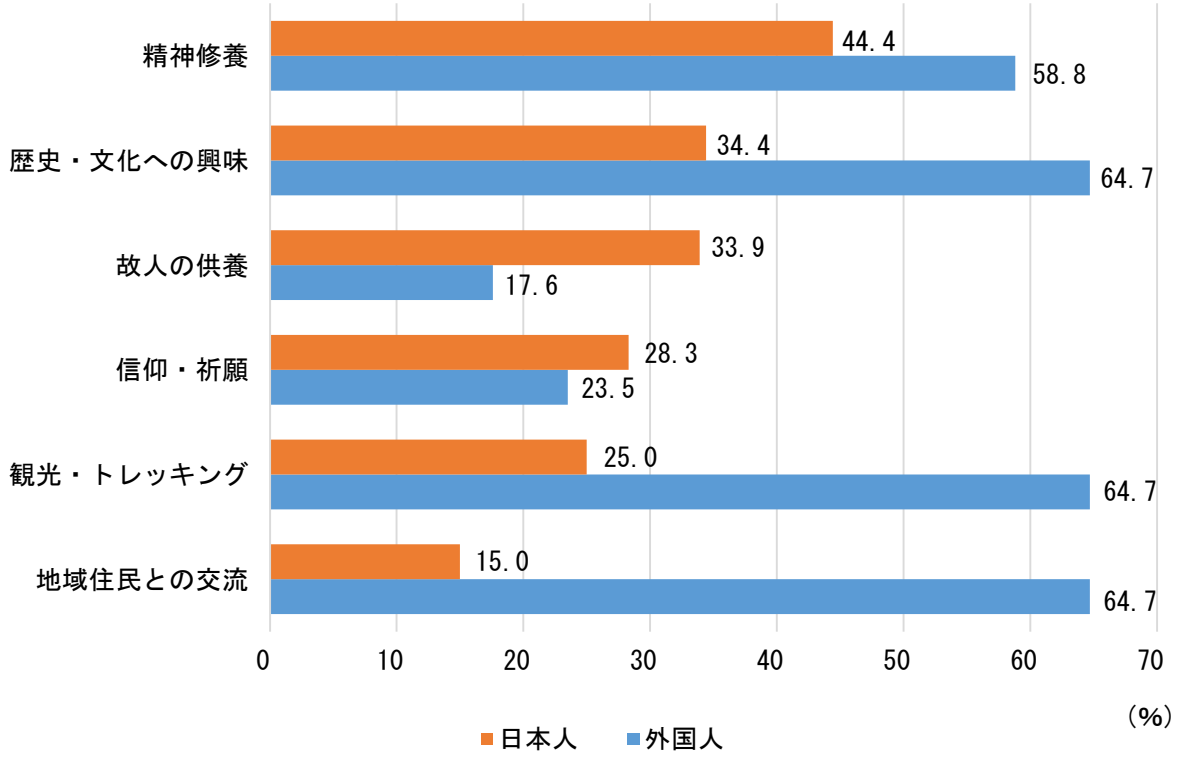


資料：lonely planet HP

図表 3-5 外国人向けの遍路ツアーの紹介例

資料：Mountain Hiking Holidays HP

図表3-6 歩き遍路をする目的
（複数回答）



注）対象：日本人 180 名、外国人 17 名
資料：「歩き遍路を対象としたアンケート調査」資料編 P. 66

(3) 外国人遍路受入に対する札所の意見

本調査では、札所に対するアンケートで、「弘法大師信仰や仏教に馴染みのない外国人遍路が増えることについて、どのように思うか」を尋ねた。それによると、「自然体に任せるべき」が 68.2%で多数を占め、次いで「積極的に受け入れるべき」が 27.3%となった。一方、「余り増やすべきでない」が 4.5%と、僅かながら外国人遍路の受け入れに慎重な札所もあった（図表 3-7)。

上記３つの選択肢の回答者を順に「自然体派」、「積極派」、「慎重派」と呼ぶとすると、札所では自然体派が多数を占めており、慎重派はごく少数ということになった。

(4) 外国人遍路受入に対する賛否の理由

札所へのアンケートで、上記（外国人遍路受入の賛否）の理由を自由回答で尋ねたところ、積極派・自然体派と慎重派との間で対照的な意見がみられた（図表 3-8)。

例えば、慎重派が「まずは日本人のお遍路を増やすべき」と考えるのに対し、積極派は「日本人の増加に期待できない以上、外国人に来てもらうしかない」と考える。これについては、日本人遍路が減り続けている状況を踏まえると、積極派の意見が現実的であろう。

また、慎重派が「(外国人は) 信仰しようとしない」と考えるのに対して、自然体派は「日本人でも、ただスタンプラリー的に回っているだけの人も多い」と考える。これについても、日本人は観光目的の人も多く、慎重派の意見は外国人を排除する理由とはなりにくい。

さらに慎重派は、「騒がしく、写真を撮るばかりしてマナーの悪い人が多い」とするのに対し、自然体派は「ネットやＳＮＳで（情報が）広がるので、(外国人の増加は）止まらない」と考える。国内外を問わず寺院や教会等の宗教施設の中では、写真撮影が禁止されたり、静粛を求められたりすることが多い。規則やマナーに反する行為は注意して制止する必要がある。ただ、外国人が写真を撮る目的は、ＳＮＳなどネットに掲載するか、帰国後に親族や友人等に見せるためと考えられる。彼らは四国遍路を世界中に無料で情報発信してくれる有難い存在である。

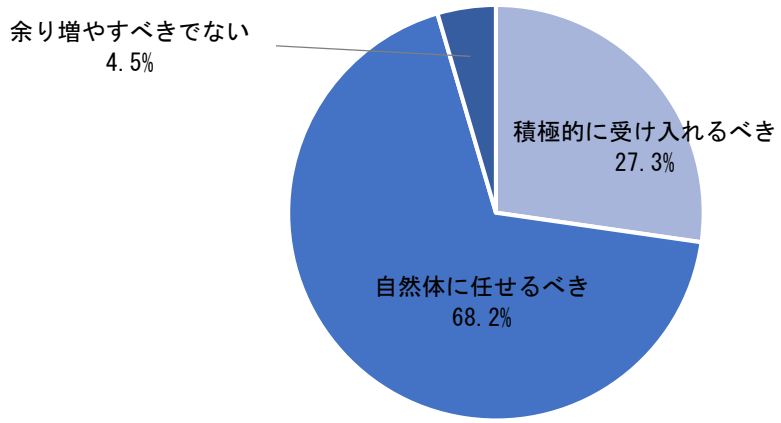
以上を総括すると、積極派や自然体派の意見が合理的だと考えられる。

なお、慎重派の中に、「遍路道周辺の住民に迷惑をかけている」との意見があった。これは、歩き遍路の野宿を問題視した意見とみられる。野宿を減らすためには、スペインの格安の巡礼宿「アルベルゲ」のような低料金の宿を整備することが有力な方策であろう。

この他、外国人遍路が増えることへの懸念として、「観光地化が進み、四国遍路の素朴な良さが失われる」という意見がある。ただ、全長 1,200㎞もある遍路道や 88 の札所が大勢のお遍路さんで溢れ、過度に観光地化してしまうとは想定しにくい。こうした心配はまず杞憂に終わるのではないか。

最近は、日本人に余り知られていない場所に外国人が数多く訪れるようになり、それが話題となって日本人の来訪も増えるという事例がみられる。外国人遍路が増えれば、遍路の魅力が国内で再評価され、日本人遍路の増加に繋がる可能性もある。

図表3-7 弘法大師信仰や仏教に馴染みのない外国人遍路の増加について（n=44）



資料：「遍路の受入態勢等に関するアンケート調査」（対象：四国八十八ヶ所霊場）資料編 P.58

図表 3-8 外国人遍路受入に対する意見の主な理由

◆「積極的に受け入れていくべき」と考える理由 ・日本人の増加に期待できない以上、外国人に来てもらうしかない。 ・いかなる理由でも来たいと思ってくれる意思とその行動を尊重してお迎えすべき。 ・世界に通じる四国遍路やお接待文化に触れてもらいたいから。 ・外国人は遍路に興味を持ち、受け入れる気持ちを持って来ている。
◆「自然体に任せるべき」と考える理由 ・多種多様な思想や宗派の人たちを受け入れることが仏教・お遍路の基本。 ・信仰は自由であるべき。 ・信仰心がない外国人が遍路をすることで、何かを感じてもらえれば嬉しい。 ・信仰を押し付けるべきではないが、巡っているうちに信仰に目覚めるのではないか。 ・ネットやＳＮＳで（情報が）広がるので（外国人遍路の増加は）止まらない。 ・日本人でも、ただスタンプラリー的に回っているだけの人も多い。
◆「余り増やすべきでない」と考える理由 ・まずは日本人のお遍路を増やすべき。 ・信仰しようとしない。 ・騒がしく、写真を撮るばかりしてマナーの悪い人が多い。 ・遍路道周辺の住民に迷惑をかけている。

注）カッコは本報告書執筆者が補足
資料：「遍路の受入態勢等に関するアンケート調査」（対象：四国八十八ヶ所霊場）をもとに作成

(5) 日本人遍路にはない外国人歩き遍路の意義

外国人歩き遍路は、日本人遍路とは異なった、次のような意義や効果も期待される。

１点目は、宿泊需要の平準化効果である。

遍路宿泊施設の経営を厳しくさせている要因として、曜日ごとや季節ごとの需要変動が激しいことがある。日本人遍路の宿泊需要は土日祝日が多く、平日は少ない。また、春と秋のハイシーズンに集中し、冬や夏には大きく減少する。ちなみに、月単位でみても、お遍路さんの多い月と少ない月では５倍程度の差があるようである（図表 3-9)。

そのため、お遍路さんを主要顧客とする宿泊施設は、ハイシーズンの休日には満室のため需要を取りこぼす一方、オフシーズンや平日には空室が多くなる。その結果、客室稼働率が下がり、経営が厳しくなりがちとなる。

一方で、外国人歩き遍路は平日と休日の区別なく宿泊する。また、欧州等の人たちは夏に長期休暇を取ることが多く、一方で、寒さへの耐性が強いこともあって、日本人遍路が閑散とする真夏や冬に訪れる人も少なくない。このため、外国人歩き遍路の増加は、宿泊施設の経営安定化に寄与するとともに、宿経営への新規参入を後押しする要因ともなる。

なお、こうした需要平準化効果は、歩き遍路が食料品や飲料等を購入するために立ち寄るコンビニや商店、自動販売機などにも及ぶ。

２点目は、地域住民による郷土愛の醸成に繋がることである。

熊野古道では、2004 年に「紀伊山地の霊場と参詣道」が世界遺産に登録されたこともあって、近年、多くの外国人が訪れるようになっている（図表 3-10)。現地の関係者によると、多数の外国人の来訪は地域住民の熊野古道に対する見方を大きく変えたとのことである。住民の間で「熊野古道は世界的価値を持っている」との自信が生まれ、熊野古道を将来にわたり大切に維持・継承していこうという機運が高まっている。

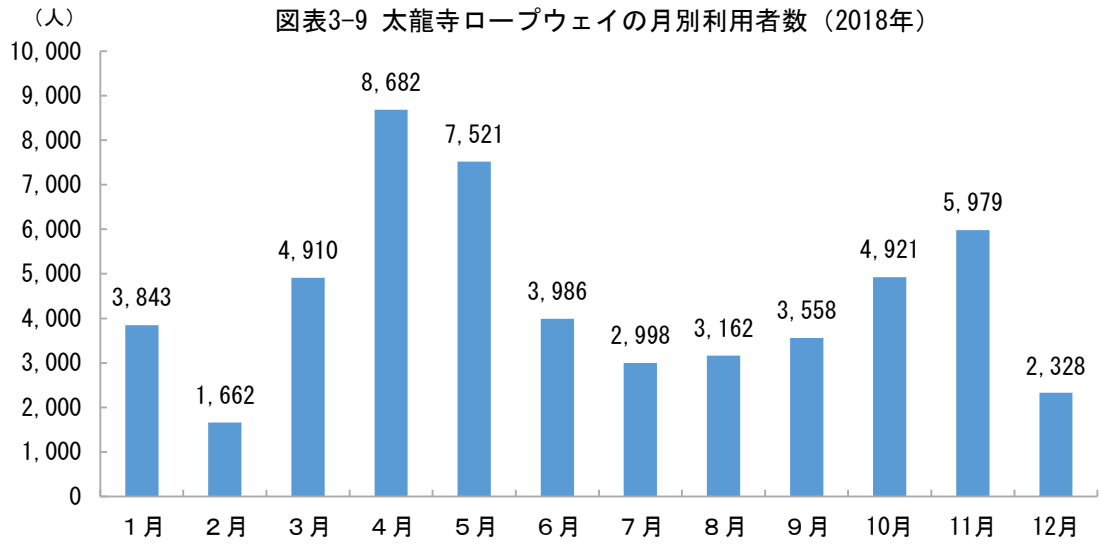
その結果、参詣道整備などに公的資金を投入することへの反対が減り、参詣道整備のボランティア活動も活発になっている（写真 3-4 左)。また、地元の小中学校では、生徒が熊野古道の歴史を学んで巡礼者に紹介する取り組みも行われている（写真 3-4 右)。

四国でも、多くの外国人遍路が訪れるようになれば、住民の間で遍路文化に対する誇りや関心が高まり、遍路文化の維持・継承に大きく寄与するであろう。

３点目は、ユネスコの世界遺産登録実現への貢献である。

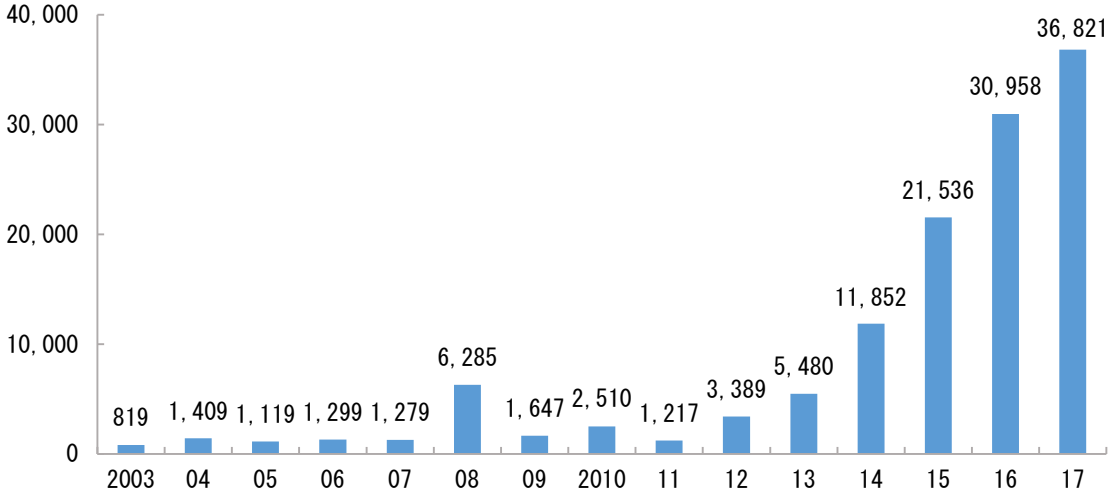
世界遺産登録を実現するには、札所・遍路道など資産の保護措置および周辺の景観保全などが確実に担保されていることや、四国遍路が人類共通の普遍的価値を有することを証明する必要がある。

外国人遍路の増加は、世界遺産登録の実現とは直接的な関係はないものの、上記の通り、住民の間で四国遍路に関わる資源や景観を大切にしようという機運が醸成される。また、多くの外国人が訪れることで、四国遍路には人種や国籍を問わず普遍的な価値があることを間接的に示すことにも繋がる。



図表3-9 太龍寺ロープウェイの月別利用者数（2018年）

資料：四国ケーブル㈱



図表3-10 熊野古道がある和歌山県田辺市の外国人宿泊者数の推移

資料：（一社）田辺市熊野ツーリズムビューロー

写真 3-4 熊野古道での参詣道整備と生徒による魅力紹介のボランティア活動

写真提供：（一社）田辺市熊野ツーリズムビューロー

3.4 外国人遍路の将来性

(1) サンティアゴ巡礼路における巡礼者の急増

スペインのサンティアゴ巡礼路では、1992 年に巡礼者が１万人に満たなかったのが、1993 年の世界遺産登録を経て、右肩上がりで増加し、2018 年には 32 万人を超えた（図表 3-11）。

巡礼者の国籍も、最近では地元スペインが５割を切る一方で、ヨーロッパをはじめ、北米、アジアなど幅広い国々に広がっている（図表 3-12）。

実は、キリスト教徒の多い国々でも宗教離れが進んでいる。このため、サンティアゴ巡礼路を訪れる目的も、信仰のためというよりも、歴史ある巡礼路の「歩き旅」をするためという性格が強い。

サンティアゴ巡礼路の実例は、「歩きの巡礼旅」をしてみたいという人が世界中に相当数存在することを示している。しかも、巡礼者がこの 20 数年間で 30 万人増、つまり年平均１万人以上という驚異的なペースで増えていることも注目される。歩きの巡礼旅は地球規模で静かなブームとなっているのである。

(2) 外国人遍路増加の可能性

サンティアゴ巡礼路では、「世界遺産に登録されて巡礼者が増えたのではなく、受入態勢の整備が多くの巡礼者を招き入れたのである」と説明されているという（資料編の資料Ⅳ参照）。

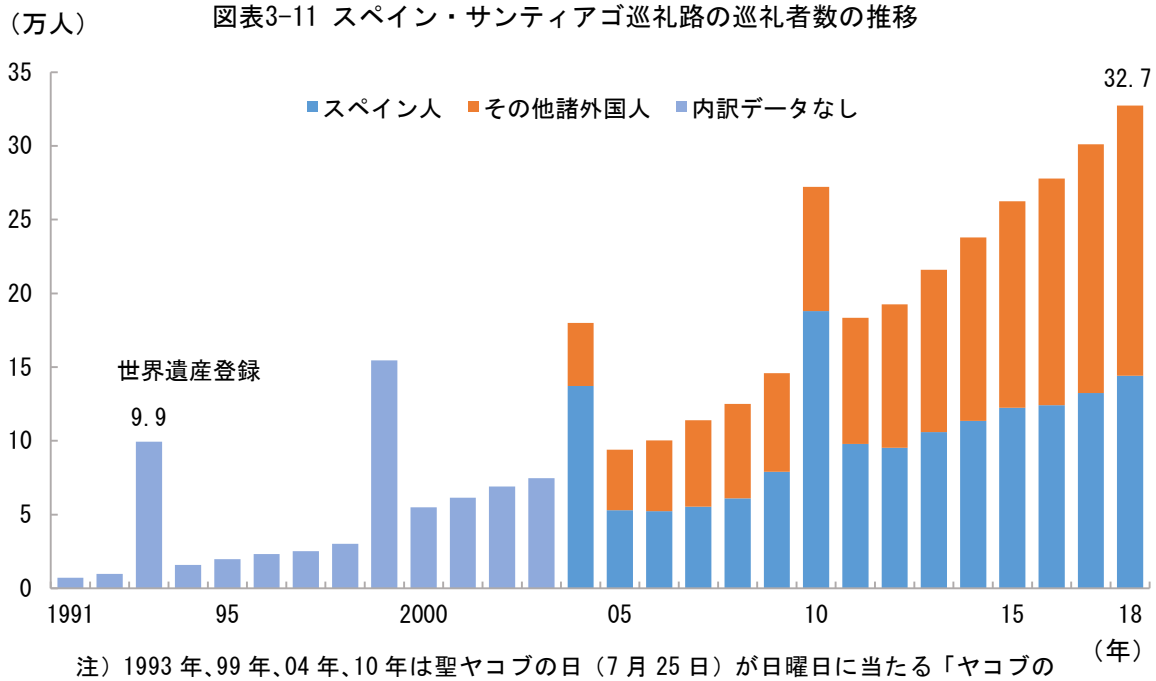
四国でも受入態勢の整備如何では、海外から多くの外国人遍路を呼び寄せることができるであろう。

例えば、四国が一丸となって本格的に受入態勢を整備していけば、サンティアゴ巡礼路の毎年平均１万人増というペースの１割程度、つまり年間１千人増のペースで外国人遍路を増やすことは決して不可能ではないと考えられる。

仮に、現在年間 400 人程度の外国人歩き遍路が毎年平均千人ずつ増加すると、10 年後には１万人になる。その場合、彼らの四国での宿泊日数は一人平均 50 泊と想定されるので、延べ宿泊者数は年間 50 万人泊となる。2018 年の四国における外国人延べ宿泊者数は約 93 万人泊（速報値）である。将来、外国人歩き遍路だけで、2018 年の外国人延べ宿泊者数の半数強という水準になるかもしれない。

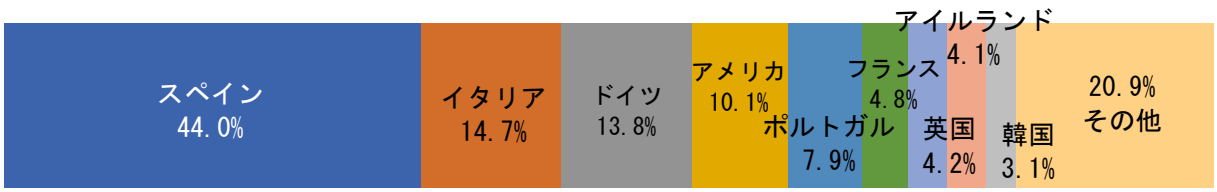
ちなみに、お遍路さんが結願した後に訪れる高野山では、総宿泊者が漸減傾向にあるのに対して、外国人宿泊者は右肩上がりで増加しており、2017 年には 8.4 万人と総宿泊者数約 21 万人の４割を占めている（図表 3-13）。四国遍路を開創した弘法大師とゆかりの深い高野山においても、外国人観光客の存在感が大きく高まっている。四国もこうした時代潮流に積極的に対応していくべきであろう。

図表3-11 スペイン・サンティアゴ巡礼路の巡礼者数の推移



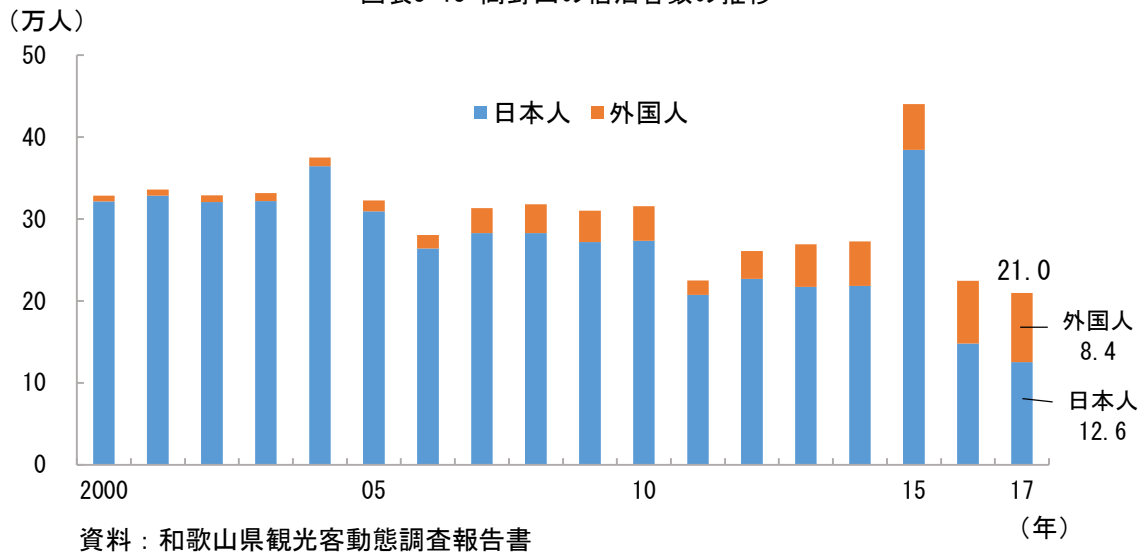
注）1993 年、99 年、04 年、10 年は聖ヤコブの日（7 月 25 日）が日曜日に当たる「ヤコブの年」で、その年に巡礼すると贖罪されるとされるため、巡礼者が大幅に増える。
資料：サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼事務所 HP

図表3-12 スペイン・サンティアゴ巡礼路の巡礼者数の国籍別内訳



資料：サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼事務所 HP

図表3-13 高野山の宿泊客数の推移



資料：和歌山県観光客動態調査報告書

3.5 外国人歩き遍路の困り事

(1) 歩き遍路の困り事や不満

外国人歩き遍路の受入を進めるには、まず彼らの困り事を知る必要がある。

本調査では、日本人を含め歩き遍路を対象に、四国遍路の困り事や不満について、自由記入方式でアンケートを行った（図表 3-14)。

これによると、「宿泊施設が減っており、宿探しで困った」「良い宿と悪い宿との格差が大きい」「宿に関するネット情報が少ない」など、宿泊施設に関する不満が特に目立った。

また、「道案内のシールや標識がなく、道に迷った」「歩き遍路道がネットでは探しきれない」など、遍路道に関する意見も少なくなかった。

このほか、「Wi-Fi を整えて欲しい」といったネット環境に関する要望も寄せられた。

これらは日本人・外国人いずれの歩き遍路にも共通の困り事や不満であると考えられ、その改善が求められる。

(2) 外国人遍路最大の困り事は宿泊施設

外国人歩き遍路は、「言葉が分からない」「土地勘もない」「遍路の作法も知らない」「日本の生活習慣も知らない」といった、「ないないづくし」で四国に来る人が大半である。

ただ近年、スマホの翻訳アプリや地図アプリの精度が向上したことで、言葉や道順に関する不都合は大きく軽減されている。また、遍路の作法や日本の生活習慣に関する情報も、ガイドブックや遍路経験者のブログ等を参照することで、ある程度入手できる。

実は、外国人遍路にとって最も厄介なのが宿泊施設である。そもそもインターネット上に掲載されている英語の宿泊施設情報が少ない。掲載されていても、どのサイトが信頼できるのか分からず、情報も十分ではない。日本語のサイトでさえ、客室・風呂・トイレ、料理といった宿の基本的な情報や写真が掲載されていないところがある。歩き遍路が宿を見つける上で便利な建物の全景写真を掲載していないところも多い。

次に、適当な宿をサイトやガイドブックで見つけても、予約に苦労する。メールでの予約を受け付けていないところが多く、一方で、電話の場合は、宿側に外国語ができるスタッフがいないという問題がある。

さらに、宿に着いて問題となるのが食事である。例えば、１泊２食付きの宿泊施設に不満が出る。外国人は選択の自由がなく、自分の好みでない料理を一方的に出されることに抵抗がある。「この３日間に泊まった宿では夕食に刺身が連続して出た。今晩は刺身以外のものを食べさせて欲しい」と懇願されたという宿主もいる。また、外国人に多いベジタリアン向けのメニューがなくて困ることもある。翌朝、「魚料理や納豆は食べていないので、その分、ディスカウントして欲しい」と宿泊費の値引きを求める外国人もいるという。

この他、外国人は多額の現金を持ち歩く習慣がないため、キャッスレス決済対応を望む声も多い。宿泊施設に付帯するサービスとして、遍路道に関する通行止めなどの情報提供や、次の宿までの荷物配送サービスを望む声もある。

図表 3-14 歩き遍路から寄せられた困り事や不満

類　型	内　容
宿泊施設・食事	・後継者がなく廃業する宿が増えており、宿探しで困ることがある ・安価な宿泊施設を見つけるのが大変だった ・歩きのルート沿い近くに宿がないところがある ・自分の歩ける距離に自信がなく、宿泊地を決めかねることがあった ・宿泊施設や食堂、コンビニの空白地域がある ・冬の閑散期には休業している宿が多く、食事なしの所もある ・不潔な宿、古いままの宿がときどきある ・良い宿と悪い宿との格差が大きい ・トイレや洗面所が寒すぎる宿がある ・宿の食事が作り置きで、冷えていた ・昼食を提供する食堂がない場所がある
遍路道	・道案内のシールや標識がないところがあって、道に迷った ・道案内標識が故意に削り取られているところがあった ・公衆トイレが少なく、特に女性は不便を感じているはず ・ゴミがいっぱいあった。また、草が生い茂った道があった ・2018 年夏の豪雨で流された道があった ・災害で不通になった道の迂回ルートが少ない ・車が多いにもかかわらず、歩道がない道がある ・別格霊場への道案内が不足しており、悪路も多い
情報入手・ネット環境	・廃業している宿の情報が不十分 ・宿に関するネット情報が少ない ・遍路道の不通区間が分からない ・歩き遍路道がネットでは探しきれない ・Wi-Fi を整えて欲しい ・携帯電話の電波が届かないところがある ※英語のサイトがあると良い
札所	・トイレが汚い札所がある ・次の札所への道が分かりにくい札所がある ※霊場会を脱会した札所を参拝すべきかどうか迷った
サンティアゴ巡礼路との比較	※スペイン・サンティアゴ巡礼路は行政が関わっているため、巡礼宿「アルベルゲ」、道案内標識、住民のサポートが良い ※四国遍路はサンティアゴ巡礼路に比べ費用がかかり過ぎる

注）※は、特に外国人にみられた意見
資料：「歩き遍路を対象としたアンケート調査」の自由意見をもとに作成

(3) 外国人歩き遍路と日本人歩き遍路における真逆の宿泊ニーズ

外国人遍路が特に宿泊施設に不満を持つのは、大半の宿泊施設が日本人に合わせた設備・サービスになっているためである。一般的な日本人遍路と外国人歩き遍路では、宿に対するニーズが大きく異なっているのである（図表 3-15）。

一般的な日本人は安さより快適性を優先する。宿泊予約サイトの口コミ欄を読むと、日本人は、料金見合いかどうかに関係なく、客室の快適性に対する不満で溢れている。また、個室は絶対条件で、知らない人との相部屋は拒絶する。身内だけで群れ、食事は１泊２食を当たり前と受け止め、ホテルでの滞在時間は短く、翌朝には先を急いで出発する。

一方、外国人歩き遍路は日本までの航空運賃等に大きな出費をしていることもあり、快適性より宿泊料の安さを重視する。宿は長距離を歩いた後に疲れて寝るだけの場所という感覚である。このため安ければ相部屋を受け入れ、素泊りも歓迎する。他の巡礼者との交流・情報交換を望み、その地が気に入れば、予定を変更して宿泊を延長することもある。

(4) スペイン・サンティアゴ巡礼路と比べた四国遍路の割高感

スペイン・サンティアゴ巡礼路にある巡礼宿「アルベルゲ」では、公営だと千円前後、民営でも概ね２千円以内で泊まることができる。このため、サンティアゴ巡礼路を歩いた巡礼者が四国遍路をすると、宿泊施設の料金に強い割高感を抱くようである。

また、四国遍路の場合、平均すると 50 日程度も滞在するため、高い航空運賃を負担してきた外国人遍路は日本人以上に宿泊費を切り詰めたいと考えている。

このため外国人遍路の誘致を進める上で、安価の宿の整備は避けて通れない課題である。

なお、特に欧米豪系の外国人は、概してお金の使い方にシビアではあるものの、決して節約一辺倒ではなく、使うべきところではお金を使うという傾向がある。

例えば、サンティアゴ巡礼路を歩く旅行者は、宿泊費を節約する代わりに夕食は地元のレストランで郷土料理やワインを楽しむ、あるいは、たまには体を休めるため割高なホテルに泊まる、といったメリハリのあるお金の使い方をしている。

図表 3-15 日本人遍路と外国人歩き遍路の宿に対するニーズの違い

項　　目	日本人遍路	外国人歩き遍路
宿泊料	宿泊料の安さより、客室での快適性を重視	宿泊料の安さを重視
部屋タイプ	相部屋拒絶（個室志向）	相部屋ＯＫ
同宿者との交流	知り合い中心に会話	巡礼者や住民との交流を希望
食事	１泊２食付きを受け入れ	素泊りを歓迎
宿での滞在時間	極力短く（早朝に出発）	その地域が気に入れば、延泊

3.6 外国人遍路に対応した宿泊施設の未整備によるリスク

(1) 野宿増加や悪評拡散の恐れ

宿泊施設の受入態勢が現状のままで、仮に将来、外国人歩き遍路が年間千人単位で増えた場合、どのような状況になるか考えてみたい。

四国の宿泊施設の客室稼働率は、2018 年で 54.8%にとどまっている（図表 3-16）。このため、大型の旅館やビジネスホテルがある観光地や都市部では、外国人遍路が多少増えても、大きなトラブルにはならないと考えられる。

問題は、宿泊施設が不足している過疎地域である。特に、春や秋のハイシーズンの休日を中心に、満室で宿泊を断られるお遍路さんが続出する恐れがある。止む無く、市街地等にあるビジネスホテルまで歩き続けるか、タクシーや公共交通機関を使って泊まれる宿まで行くようになる。最悪の場合、野宿を余儀なくされる可能性もある。

現在でも、遍路道沿いにある道の駅や公園内の東屋（あずまや）（屋根があるだけの壁のない小屋）などで野宿するお遍路さんを見かける。これはまだ少数だから、地元住民も寛容な気持ちで受け入れている。しかし、十数人単位で野宿する人が近所に現れたら、地元住民とお遍路さんとの軋轢は避けられない。

仮に将来、「世界遺産登録が実現して、野宿する遍路が急増した」というのでは、地元住民にとり大迷惑で、世界遺産登録したことを疑問視する声さえ出かねない。

一方で、外国人遍路からは「四国は遍路の魅力を世界に情報発信していながら、宿泊施設が十分に整備されていない」といった不満がたまり、四国遍路に対する不評がネットを通じて世界中に拡散する恐れもある。

(2) 善意に頼り過ぎない持続可能な仕組みが必要

現状では、「宿がない」といった事態が起きると、見兼ねた札所や地元住民、宿泊施設の方々、さらには外国人遍路をサポートしているボランティアの人たちが、あちこちに連絡して宿を探してあげる、といったことが起きている。これも時折であれば良いが、何人ものお遍路さんからのサポート要請が常態化すると、善意だけでは対応できない。

外国人が宿の手配を安心して任せることのできる持続可能な仕組みが必要である。

図表 3-16 宿泊施設の客室稼働率（2018 年速報値）

（単位：%）

	全施設	うち旅館	ﾘｿﾞｰﾄﾎﾃﾙ	ﾋﾞｼﾞﾈｽﾎﾃﾙ	ｼﾃｨﾎﾃﾙ	簡易宿所
全　国	61.1	39.0	58.3	75.3	79.9	28.6
東京都	80.3	57.5	65.8	84.8	84.7	51.5
大阪府	79.8	48.7	90.4	81.0	84.9	61.4
四　国	54.8	40.2	58.2	69.1	68.3	17.0

資料：観光庁「宿泊旅行統計調査」

４．新時代におけるお遍路さん受入態勢の整備に向けて

これまでの分析を踏まえ、四国遍路新時代における受入態勢整備のあり方については、次の方向性が考えられる。

１点目は、「外国人遍路の受入態勢整備に本格着手する」である。

日本人遍路のさらなる減少が見込まれる中、遍路文化を将来にわたり確実に維持・継承していくために、外国人遍路を積極的に受け入れるべきである。また、四国遍路の世界遺産登録が実現すれば、世界中から多くの外国人が来訪すると予想される。その時に備え、外国人遍路を受け入れる際の課題を、今から着実に解決していく必要がある。

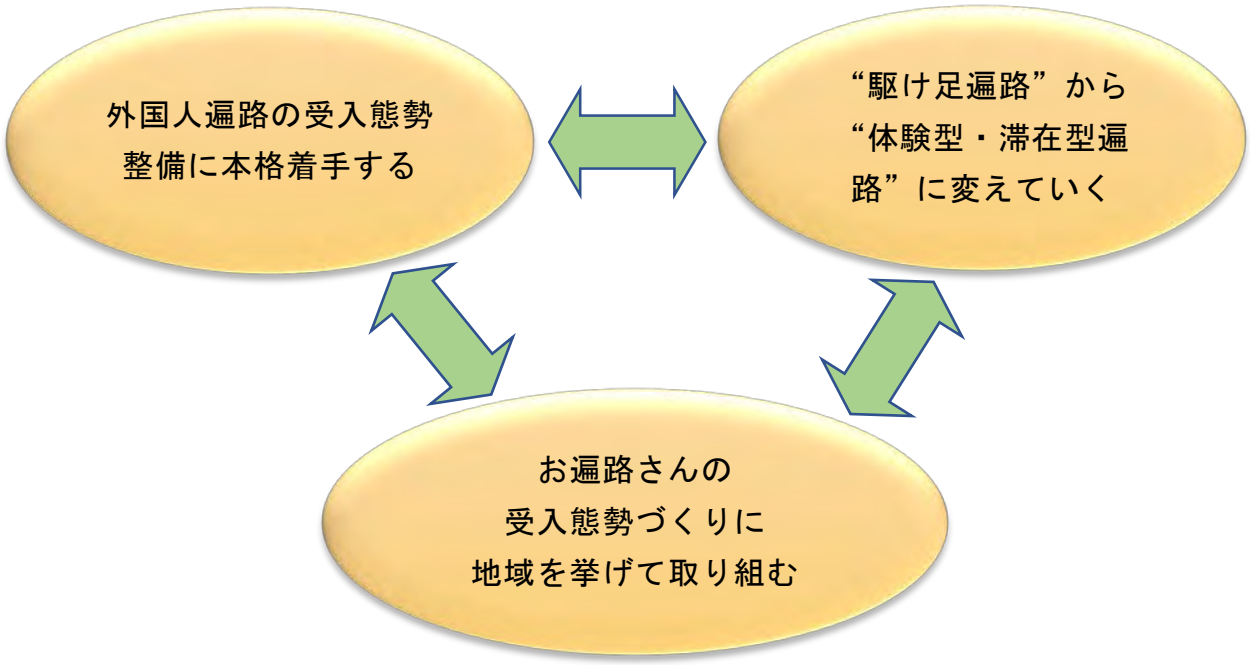
２点目は、「“駆け足遍路”から“体験型・滞在型遍路”に変えていく」である。

外国人遍路とともに、日本人遍路を増やす取り組みも重要である。そのためには、四国遍路の奥深さをはじめ遍路旅の本当の良さを実感してもらう必要がある。

お遍路さんの大半を占めるマイカー遍路では、カーナビの普及・高性能化により、決められたルートを効率的に巡ることを良しとする“スタンプラリー化”に拍車がかかっている。こうした短期間での結願達成を目指した“駆け足遍路”から、遍路文化の体験や周辺地域での滞在などを楽しむ“体験型・滞在型”の遍路に変えていくべきである。

３点目は、「お遍路さんの受入態勢づくりに地域を挙げて取り組む」である。上記２つの方向性を具体化していくためには、住民や民間事業者、札所、自治体など地域の多様な主体を巻き込んでいくことが重要となる（図表 4-1）。

図表 4-1 四国遍路新時代における受入態勢づくりのイメージ図



方向性１　外国人遍路の受入態勢整備に本格着手する

外国人遍路の受入態勢整備で特に重要となるのが、「過疎地などでの宿泊施設不足への対応」と「コンシェルジュ機能の強化」である。

＜過疎地などでの宿泊施設不足への対応＞

(1) 四国版アルベルゲの整備検討

宿泊施設不足を解消するために、スペイン・サンティアゴ巡礼路の成功例に倣い、行政が主導して「四国版アルベルゲ」とも言うべき安価な宿を整備することが考えられる。

四国では、人口減少・少子化に伴い、廃校となった学校をはじめ使われない公共施設などが増えている。そこで、民業圧迫の懸念が低い（宿泊施設が不足している）地域で、使われていない建物を活用した四国版アルベルゲの整備を真剣に検討してはどうか。

四国版アルベルゲの候補となる建物としては、廃校となった小中学校・高校以外にも、閉鎖された保育所・幼稚園、病院・診療所、老人ホーム、経営をやめた旅館や民宿、宿坊、住む人のいない古民家など、あらゆる可能性を模索することが考えられる。

また、宿の設備やサービスは必要最低限にとどめ、例えば、素泊りのみ、浴室はシャワーだけ、デジタル技術の活用[10]といった様々な工夫をすれば、初期投資や運営コストの抑制、民間宿泊施設との棲み分け、さらには低料金の実現に繋げることができる。

(2) 民泊の推進、空家の活用

四国では過疎地域を中心に各地で空家が増加している。一方で、2018 年６月には民泊を本格解禁した住宅宿泊事業法（民泊新法）が施行され、民泊に対する関心が高まっている。

この動きを追い風として、宿泊施設が不足気味の地域を中心に、空家などを活用した民泊を積極的に進めていく必要がある。

空家のオーナーと民泊希望者とのマッチングを促進し、大都市圏などに居住する宿経営希望者の力を引き出すことで、宿不足の解消に繋げていくのである。

【参考メモ】遍路宿泊施設の選択肢を増やすことの重要性

歩き遍路は宿泊費の節約が大きな関心事ではあるものの、宿主などと交流できる民泊の宿にも魅力を感じる。一方で、長い歩き旅の合間には疲れた体を癒すため、たまには宿泊費が高めの旅館や一人使用の個室宿にも泊まりたくなる。

幸い四国遍路のルートは、都市の市街地や有名観光地と過疎地域とを交互に訪れるようになっている。過疎地域では簡素な四国版アルベルゲや魅力的な宿主がいる民泊の宿に泊まり、観光地や市街地では既存の温泉旅館やビジネスホテルに泊まるなど、四国での滞在が快適に過ごせるよう、宿の選択肢を増やすことが重要である。

[10]利用者が専用のアプリをスマホにダウンロードして、自身の登録やクレジットカード等との紐付けを行い、以後、スマホを使った宿の入退館（電子キー）や利用料の電子決済を行うことなどが考えられる。

＜お遍路さん向けコンシェルジュ機能の強化＞

(1) “遍路インフォメーションセンター（仮称)”の設置

四国には、外国人を想定して、四国遍路の歩き旅に関する情報を一元的に収集・発信している機関がない。

そこで、外国人遍路向けのオリエンテーション機能や遍路途上での困り事相談、いわゆるコンシェルジュ機能を持った総合窓口を、四国の主要都市に設置できないか。

具体的には、次のようなコンシェルジュ機能を備えることが期待される。

①お遍路の作法や必携品、服装、宿泊施設の予約法、日本の生活習慣などの指南
②遍路道の案内、地図・行程表や遍路道の注意情報（不通区間や迂回路など）の提供
③非常時の対応（地震などの自然災害、大雨・台風などの荒天、通行止め情報のネット掲示、緊急連絡受付など）

(2) 外国人歩き遍路に対応できる着地型旅行会社の設立

遍路宿泊施設は大手旅行予約サイトが扱わない小規模な宿が多い。宿側も、遍路専門のガイドブックや観光関連のホームページなどで宿の情報が多数紹介されているため、仲介手数料のかかる大手旅行予約サイトに登録する必要性を感じていないところがある。さらに、言葉の問題から、外国人の宿泊申込みを敬遠したり、問い合わせに尻込みしてしまう宿も少なくない。

一方で、歩き遍路は自身の希望に沿う宿に泊まりたいというニーズを強く持っており、特に外国人は英語による的確な情報とスムーズな予約受付を欲している。

そこで、遍路道沿いの宿泊施設と個人のお遍路さんとを予約サイト等を介して有料で仲介する着地型旅行会社を設立できないか。これにより、宿泊施設は外国人からの予約申込みでも円滑に対応できるようになり、お遍路さんも好みに合う宿の手配が容易になる。さらに、地域にも持続可能なお遍路さん受入の仕組みが備わる。宿泊施設・お遍路さん・地域にとって望ましいトリプルウインを実現するのである。

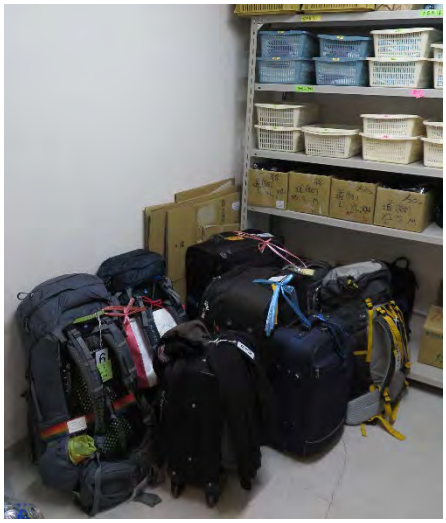
その代表例として田辺市熊野ツーリズムビューロー（以下、「田辺市熊野ＴＢ」）が挙げられる（詳しくは資料編の資料Ⅴ参照)。田辺市熊野ＴＢでは、Ｗｅｂ（英語）を使って外国人からの問い合わせや宿泊の予約・決済・キャンセルなどを、宿に代わって代行している。また、田辺市駅前に窓口（トラベルカウンター）を設けて飛び込みで来た巡礼者のお世話をしたり、熊野古道を歩く外国人からの緊急連絡などに対応したりしている（図表 4-2、写真 4-1)。

図表 4-2 田辺市熊野ツーリズムビューローによる着地型旅行業務の内容

・日本人だけでなく、ＦＩＴ（外国からの個人旅行者）に対応
・旅行手配、プラニングをワンストップで
・Ｗｅｂで宿泊の予約・決済・キャンセル
・市域、県域を越えて旅をサポート
・地元の情報やネットワークを活かした、きめ細かなサポート
（荒天後の巡礼路の通行情報、迂回路情報の提供など）
・田辺駅前でのトラベルカウンター「熊野トラベル」の運営
（飛び込み客相手の宿の当日予約・決済、スーツケースやバックパックなどの荷物の一時預かりや次の宿への搬送受付、歩き旅行用グッズ販売など）

資料：（一社）田辺市熊野ツーリズムビューローの資料をもとに作成

写真 4-1 飛び込み客などに対応する「熊野トラベル」



注）外国人の旅の相談に対応（左）、荷物の一時預かりや宿への搬送も受け付け（右）

撮影：四国経済連合会

【参考メモ】田辺市熊野ツーリズムビューロー（ＴＢ）による宿泊仲介事業の取り組み

当初、田辺市熊野ＴＢが地元宿泊施設に有料での宿泊仲介を提案したところ、小規模な宿を中心に「今まで宿泊客の紹介者に手数料を払ったことはない」などと反発する声があった。しかし、田辺市熊野ＴＢのサイトに登録することで、外国人の予約が増え、キャンセル等のトラブルも減るといった利点が理解されるようになり、今ではサイトへの登録を希望する宿が増えている。

また、宿泊者からの苦情がサイトに寄せられると、田辺市熊野ＴＢが実情を確認し、不都合があれば直ちに宿に改善を指導している。この結果、宿側の受入態勢が向上し、宿泊客の満足度向上に繋がっている。

方向性２　“駆け足遍路”から“体験型・滞在型遍路”に変えていく

四国に滞在して、札所や地域ならではの魅力を深く味わってもらうためには、次の方策が考えられる。

なお、四国版アルベルゲなどの宿泊施設を拠点として、体験型・滞在型のお遍路さんを増やしていくことができれば、その経済効果は地域全体に及んでいくことが期待される。

(1) 四国遍路 Deep～遍路文化を深く知る～

各札所には、成り立ちの歴史や古くから伝わる伝説など様々な物語がある。また、由緒ある寺院建築物や美しい日本庭園、歴史的価値のある仏像など素晴らしい文化財の宝庫でもある。

こうした札所独自のストーリーや豊富な資源を解説付きで案内し、お遍路さんに遍路文化の魅力をより深く知ってもらうのである。

(2) 四国遍路 Experience～遍路文化を体験する～

見たり聞いたりするだけでは飽き足りないお遍路さんもいる。

本堂でのお勤めや写経、阿字観（真言密教の瞑想法）、精進料理など、札所ならではの様々な体験メニューをお遍路さんに提供するのである。

(3) 四国遍路 Plus～札所の周辺地域を巡る～

札所の周辺には、札所の奥の院や別格霊場、番外霊場などと呼ばれる、八十八箇所とは別の霊場や、弘法大師ゆかりの地、あるいは美しい自然景観や地域ならではの集客施設など、たくさんの見所がある。

これらの資源を周遊ルート化し、地域全体の魅力をお遍路さんに味わってもらうのである。

ちなみに、歩き遍路へのアンケートでも、四国遍路の魅力として、「自然」や「歴史・文化」、「住民との交流」などが高い割合を占めた（図表 4-3）。

また、札所や遍路道沿線の市町村へのアンケートでも、四国遍路の魅力向上のために有効な取り組みとして、「札所と寺院周辺の観光資源をセットで売り込む」、「写経や説教など札所ならではの体験型観光を行う」、「寺院（建築物や文化財・庭園など）を観光案内する」などが上位に挙がった（図表 4-4）。

図表 4-3 四国遍路のどのような点に魅力を感じるか

（対象：日本人と外国人の歩き遍路）

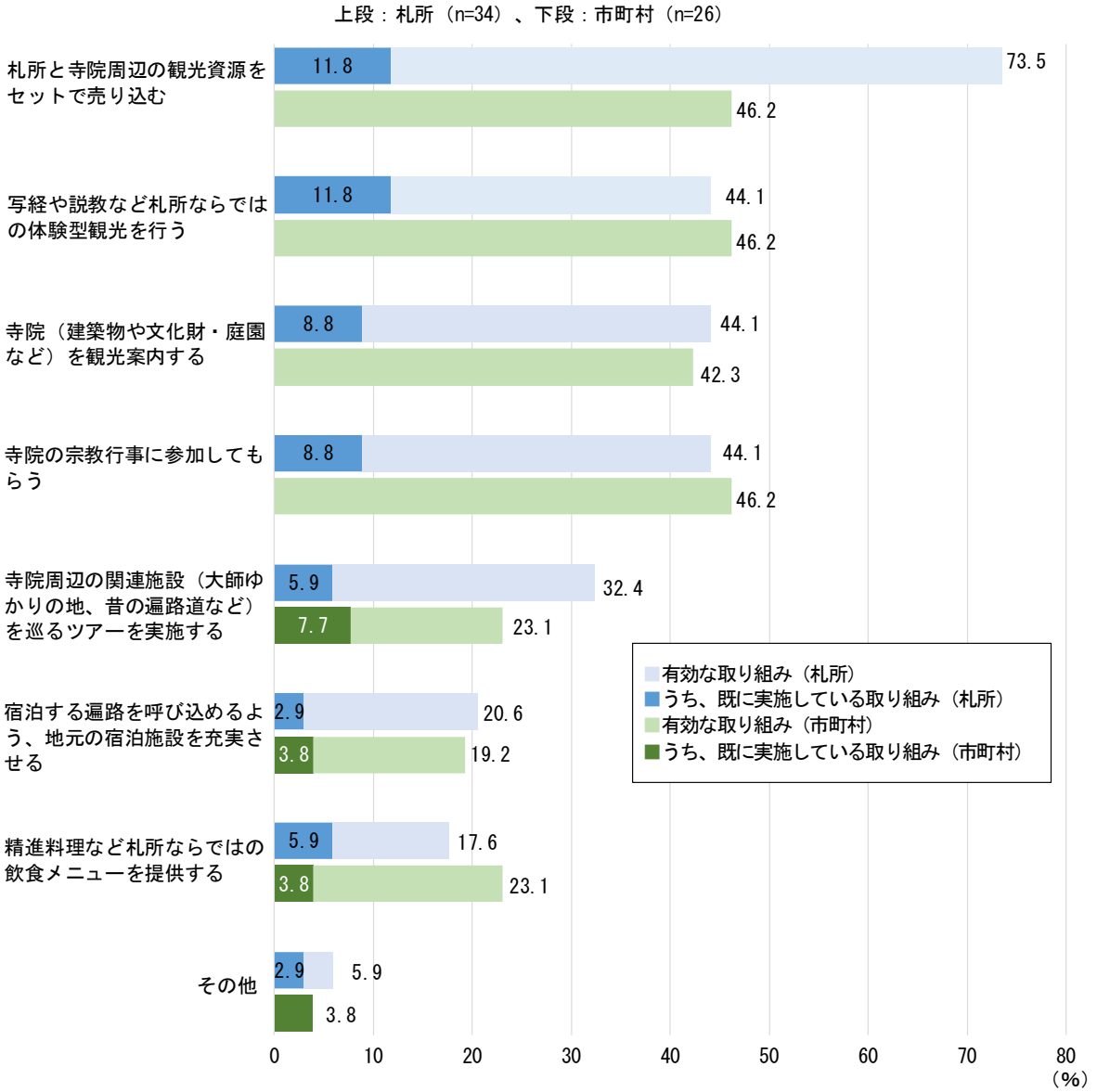
（単位：%）

	宗教性	精神性	自　然	歴史･文化	住民との交流	食　事
日本人	23.3	40.6	63.9	54.4	51.1	18.3
外国人	41.2	58.8	82.4	64.7	82.4	47.1

注）該当する項目を全て選択

資料：「歩き遍路を対象としたアンケート調査」

図表 4-4 四国遍路の魅力向上のために有効な取り組み



資料：「遍路の受入態勢等に関するアンケート調査」

（対象：四国八十八ヶ所霊場、遍路道沿線の市町村）

方向性３　お遍路さんの受入態勢づくりに地域を挙げて取り組む

これまでは団体バス遍路やマイカー遍路が圧倒的に多かったため、お遍路さんのニーズに対応する主体は、札所に加え、バス会社や旅行会社、ホテル・旅館、ガイドブックの出版社などが中心であった。

しかし、過疎地域で宿泊施設を整備・運営したり、札所や遍路道を核として幅広な体験型・滞在型メニューをお遍路さんに提供したりするためには、札所や宿泊施設、旅行関連事業者だけでなく、住民や観光関連以外の民間事業者、自治体など地域の多様な主体を巻き込んで取り組む必要がある。

地域住民などとの交流は、日本人・外国人の別なく多くの歩き遍路が希望しており、四国遍路の醍醐味ともなっている。一方で、地域住民も国内外の様々な地域から来るお遍路さんと日常的に接することで、四国遍路の価値を再認識し、地域に対する誇りや遍路文化の維持・継承の動機付けともなる。

ちなみに、札所や遍路道沿線市町村へのアンケートでも、「札所と自治体や住民などが連携して四国遍路の魅力を高めるべき」とする回答が多数を占めた（図表 4-5、図表 4-6）。

【参考メモ】四国遍路の魅力を体験できるモデルコースの設定

四国遍路の約 1,200km の道のりは余りに長過ぎると、通し打ちの歩き遍路を躊躇する人は少なくない。

スペイン・サンティアゴ巡礼路には、「フランス人の道」、「北の道」、「イギリス人の道」、「銀の道」など幾つかのルートがある。最もポピュラーなのがフランス人の道で、巡礼宿や道標の整備も進んでいる。このうち、巡礼達成が認められる聖地までのラスト 100km（サリア～サンティアゴ）で巡礼者が一挙に増える。この区間は通常４泊５日の歩き旅である。

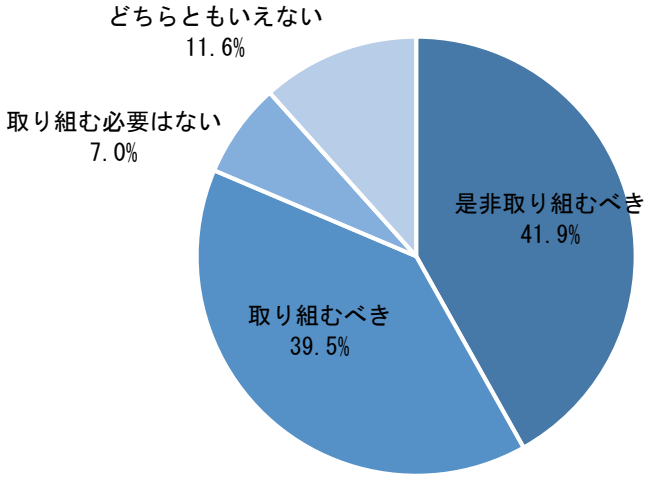
また、熊野古道では、２泊３日もしくは３泊４日程度の歩きプランで訪れる外国人客が多いという。

これらの例を参考に、四国でも２泊３日～４泊５日を目安に、歩き遍路や周辺の資源・景観を楽しめるモデルコースを設定し、宿泊施設やコンシェルジュ機能、遍路道、さらには体験メニューなどの受入態勢を重点的に整備することが考えられる。

トレッキング（山歩き）の観点から見た初級・中級・上級者向け、あるいは写経や阿字観（真言密教の瞑想法）、精進料理等を盛り込んだ遍路文化体験重視など、各コースがそれぞれの特色を競い合うことで、四国遍路の魅力を多彩なものにするのである。

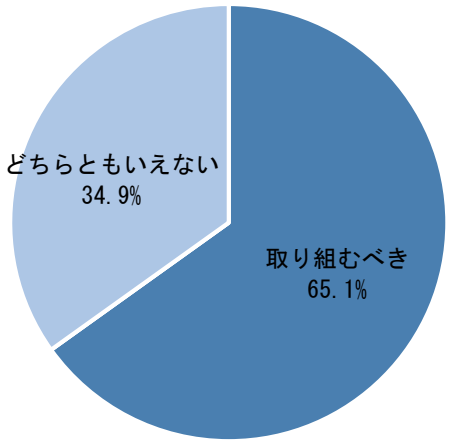
また、交通事業者にダイヤ編成で協力を仰ぎ、鉄道やバスなど公共交通機関を使って複数のコースをシームレスに（途切れなく）楽しめるようにすることも考えられる。

図表4-5 寺院と自治体や住民が連携して四国遍路の魅力を高めること（n=43）



資料：「遍路の受入態勢等に関するアンケート調査」
（対象：四国八十八ヶ所霊場）資料編 P.58

図表4-6 自治体が札所や住民と連携して四国遍路の魅力を高めることについて（n=43）



資料：「遍路の受入態勢等に関するアンケート調査」
（対象：遍路道沿線の市町村）資料編 P.62

お わ り に

四国遍路の歴史を振り返ると、昭和には団体バス遍路が、平成にはマイカー遍路が全盛期を迎えた。そして今、遍路人数が大幅に減少する中で令和の時代を迎え、外国人歩き遍路の増加という新たな動きに対して、四国としてどう対応していくかが問われようとしている。

グローバル化とデジタル化という荒波が地球規模で押し寄せる中で、世界中の個人旅行者がスマホから得られるネット情報を頼りに、言葉や地理も分からない見ず知らずの土地を旅している。

この時代潮流に乗ったスペイン･サンティアゴ巡礼路や熊野古道では､「巡礼路の歩き旅」に対する世界的なブームも追い風となって、多くの巡礼者が訪れており、地域に大きな経済効果が生まれている。

四国には､「お遍路」という世界に誇れる巡礼文化があるにも関わらず､外国人歩き遍路は年間 400 人程度にとどまっており、サンティアゴ巡礼路や熊野古道と比べ大きな落差が生じている。その主な要因は、これまでの団体バス遍路やマイカー遍路に適合した受入態勢が、外国人歩き遍路のニーズにうまくマッチしていないためである。

外国人が満足できる受入態勢を整備していけば、彼らはＳＮＳで自ら四国遍路の魅力を発信し、評判が評判を呼んで来訪者の増加に繋がる。逆に、受入態勢が貧弱であれば、対外アピールにお金をかけても、低評価が世界を駆け回る悪循環に陥りかねない。

日本人遍路は、わが国の人口減少や旅行ニーズの多様化などを背景に、団体バス遍路やマイカー遍路を中心に徐々に減少していかざるを得ない。この不都合な現実を直視する必要がある。

今後、外国人遍路が徐々に増えていくことは歴史の必然である。この流れを地域の積極的な創意工夫により太く大きくできれば、外国人歩き遍路が日本人遍路の減少を補うだけでなく、過疎化に悩む地域を救う存在になる可能性がある。さらに、外国人遍路が増えることで、日本でも四国遍路の魅力が再認識され、新たな日本人遍路を呼び込むことも期待される。

今こそ、地域が一丸となって、外国人歩き遍路のための受入態勢を整備することで、より多くの巡礼者を受け入れ、遍路文化の維持・継承と地域活性化の両立に繋げていくべきである。

【資料編】

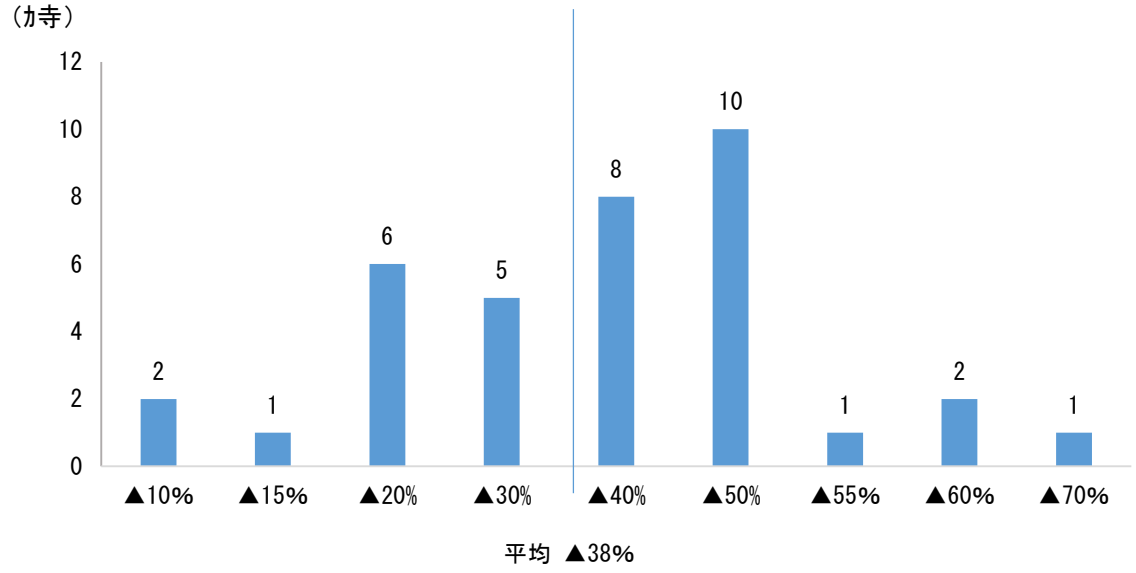
資料Ⅰ　遍路の受入態勢等に関するアンケート調査
（対象：四国八十八ヶ所霊場）

四国八十八ヶ所霊場へのアンケート	
１．実施時期	2018 年 11 月 15 日～11 月 30 日
２．調査対象	四国八十八ヶ所霊場（68 番神恵院・69 番観音寺は同一場所にあるため、先数は 87）
３．調査方法	郵送による配布、返信用封筒・FAX による回収
４．有効回答数	44（回収率：50.6%）

１．概ね 10 年前と比べた巡礼者数の増減

概ね 10 年前と比較した巡礼者総数の増減について尋ねたところ、本問について回答のあった 36 ヵ寺すべての寺院が「減っている」と回答した。また、その減少幅については、▲10%～▲70%と幅があるものの、最も回答数が多かった▲50%が 10 件、次いで▲40%が８件の順となった。36 ヵ寺の平均では▲38%となった（図表Ⅰ-1）。

図表Ⅰ-1 概ね10年前と比較した巡礼者総数の減少率別の札所数（n=36）



２．交通機関別の巡礼者数の増減

交通機関別に巡礼者数の近年の増減について尋ねたところ（図表Ⅰ-2）、団体（巡拝バス）については「大幅に減っている」が 81.8%、「少し減っている」が 13.6%、「大幅に増えている」が 4.5%となった。

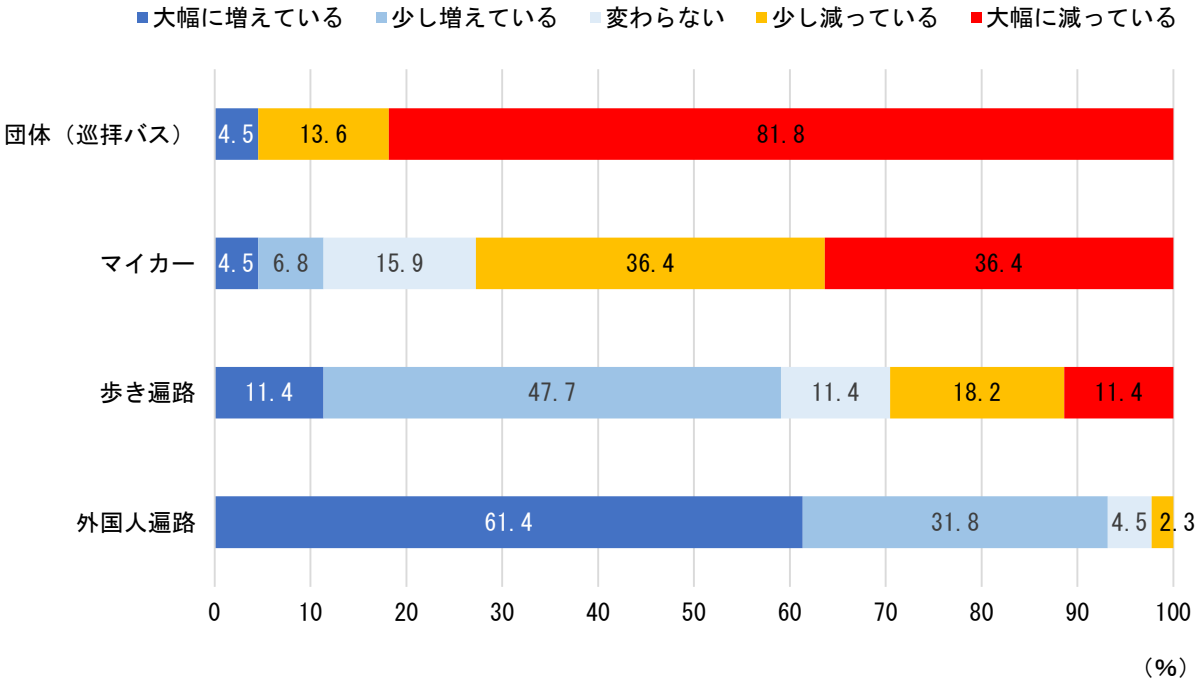
マイカーの巡礼者については、「大幅に減っている」、「少し減っている」がそれぞれ 36.4%となり、合わせて７割強の札所でマイカー巡礼者が減っていた。

歩き遍路は、「少し増えている」が 47.7%、「大幅に増えている」が 11.4%だった

のに対し、「大幅に減っている」が 11.4%、「少し減っている」が 18.2%などとなり、回答のあった寺院の半数以上で歩き遍路の数が増えていた。

なお、外国人遍路については、「大幅に増えている」が 61.4%、「少し増えている」が 31.8%と、９割以上の札所で外国人遍路が増えていた。

図表Ⅰ-2 交通機関別の近年の巡礼者数の動向
［概ね10年前との比較］



注）「大幅に」とは概ね１割以上増減した場合とした

３．宿泊施設の動向

宿坊や通夜堂[1)]などの宿泊施設が札所にあるかどうか尋ねたところ、「ある」が 27.3%、「ない」が 45.5%、「休業・廃業した」が 27.3%となった（図表Ⅰ-3）。

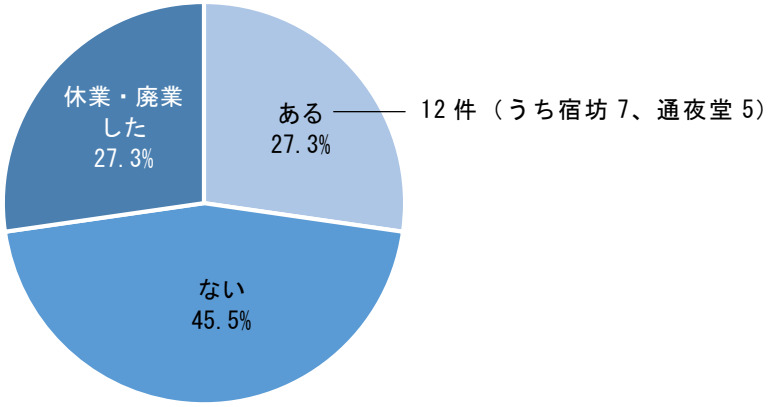
休業・廃業した理由（自由記入）については、宿泊者数の減少やニーズの多様化、人手不足、施設の老朽化といった回答がみられた。

札所近隣の遍路宿泊施設の近年の増減について尋ねたところ、「減っている」が 47.7%、「変わらない」が 34.1%、「増えている」が 9.1%などとなった（図表Ⅰ-4）。

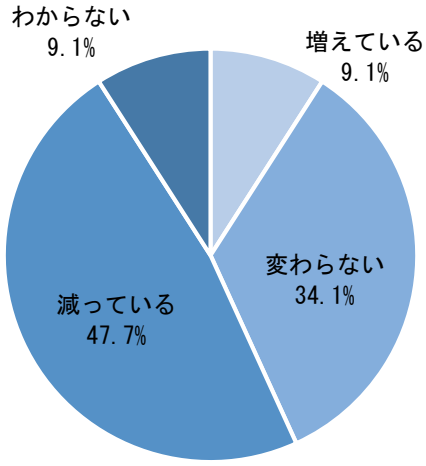
札所周辺の遍路宿泊施設の充足状況については、「非常に不足している」が 9.3%、「やや不足している」が 34.9%と、４割以上の寺院が不足感をもっているのに対し、「適正である」は 37.2%だった（図表Ⅰ-5）。

1）本来は、夜を通して仏事を勤行するために、寺の境内に設けられたお堂のこと。四国の寺院では、歩き遍路のための無料の宿泊施設を「通夜堂」と呼ぶことが多い。

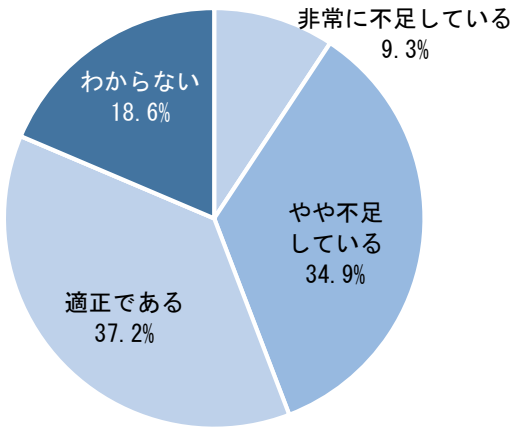
図表Ⅰ-3 札所の宿泊施設の有無（n=44）



図表Ⅰ-4 札所近隣の宿泊施設の増減（n=44）



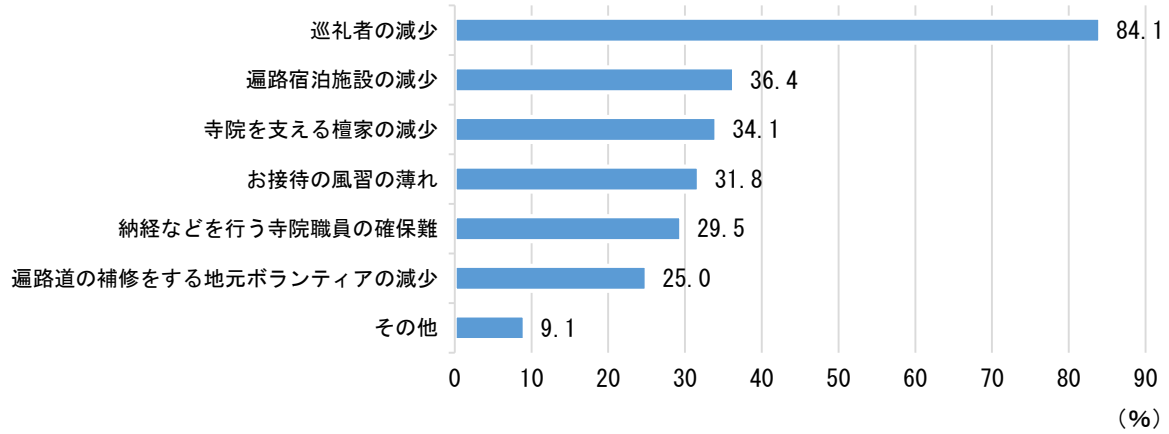
図表Ⅰ-5 札所周辺の遍路宿泊施設の充足状況（n=43）



４．遍路文化を継承していく上での問題点

四国の遍路文化を将来にわたり継承していく上での問題点について尋ねたところ、「巡礼者の減少」が最も多く 84.1%、次いで「遍路宿泊施設の減少」が 36.4%、「寺院を支える檀家の減少」が 34.1%、「お接待の風習の薄れ」が 31.8%などとなった（図表Ⅰ-6）。

図表Ⅰ-6 四国の遍路文化を継承していく上での問題点（n=44、複数回答）

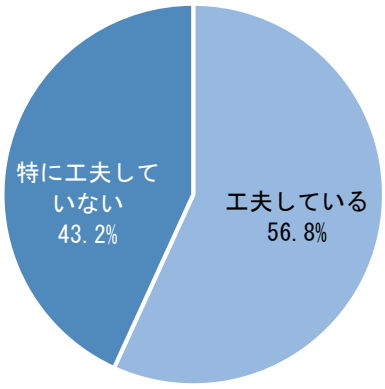


５．外国人遍路への対応について

外国人遍路への対応で工夫していることがあるかどうか尋ねたところ、「工夫している」が 56.8%、「特に工夫していない」が 43.2%だった（図表Ⅰ-7）。

工夫している内容（自由記入）としては、英語案内板の設置や英会話カードの作成、英会話の習得といった多言語対応が多かったほか、Wi-Fi や洋式トイレの整備などもあった。

図表Ⅰ-7 外国人遍路への対応を工夫しているか（n=44）



６．外国人遍路が増えることについての評価

弘法大師信仰や仏教に馴染みのない外国人遍路が増えていることについてどのように思うか尋ねたところ、「自然体に任せるべき」が最も多く 68.2%、「積極的に受け入れるべき」が 27.3%、「余り増やすべきでない」が 4.5%となった（図表Ⅰ-8）。

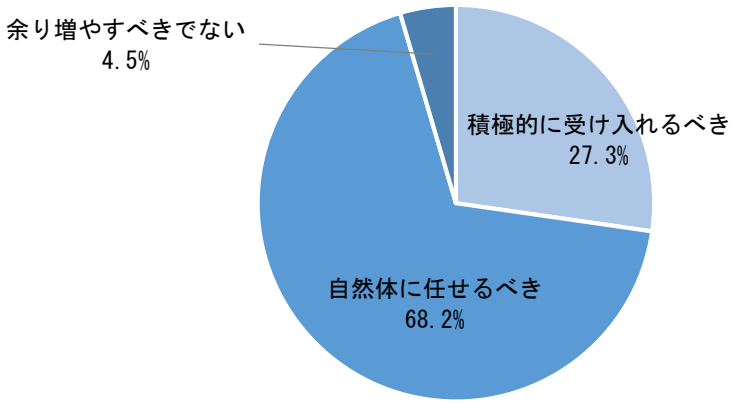
「積極的に受け入れるべき」と回答した札所からは、「日本人の増加に期待できな

い以上、外国人に来てもらうしかない」「人口減少、信仰心の低下による国内客の減少は、外国人観光客の増加で補うことができる」「信仰心が無いからといって拒否すべきでない」といった回答があった。

一方「余り増やすべきでない」と回答した札所からは、「写真を撮るだけや住民に迷惑をかけるなどマナーが悪い」「まずは日本人のお遍路を増やすべき」などの意見があった。

その他、「ネットや SNS で広がるので止まらない」「多種多様な思想や宗派の人たちを受け入れることが仏教・お遍路の基本」「日本人でもスタンプラリー的に回っている人もいる」といった回答があった。

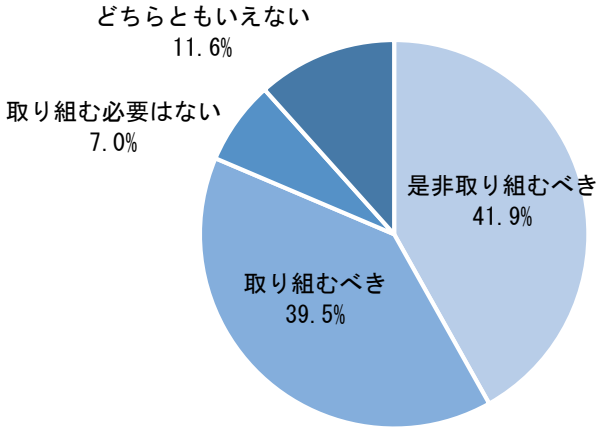
図表Ⅰ-8 弘法大師信仰や仏教に馴染みのない外国人遍路の増加について（n=44）



７．四国遍路の魅力向上に向けた札所と地元との取り組みについて

巡礼者に四国遍路の魅力を深く感じてもらうための取り組みを札所と地元（自治体や住民、宿泊事業者など）が連携して行うことについて尋ねたところ、「是非取り組むべき」が 41.9%、「取り組むべき」が 39.5%で、合わせて８割以上を占めた一方、「取り組む必要はない」は 7.0%だった（図表Ⅰ-9）。

図表Ⅰ-9 寺院と自治体や住民が連携して四国遍路の魅力を高めること（n=43）

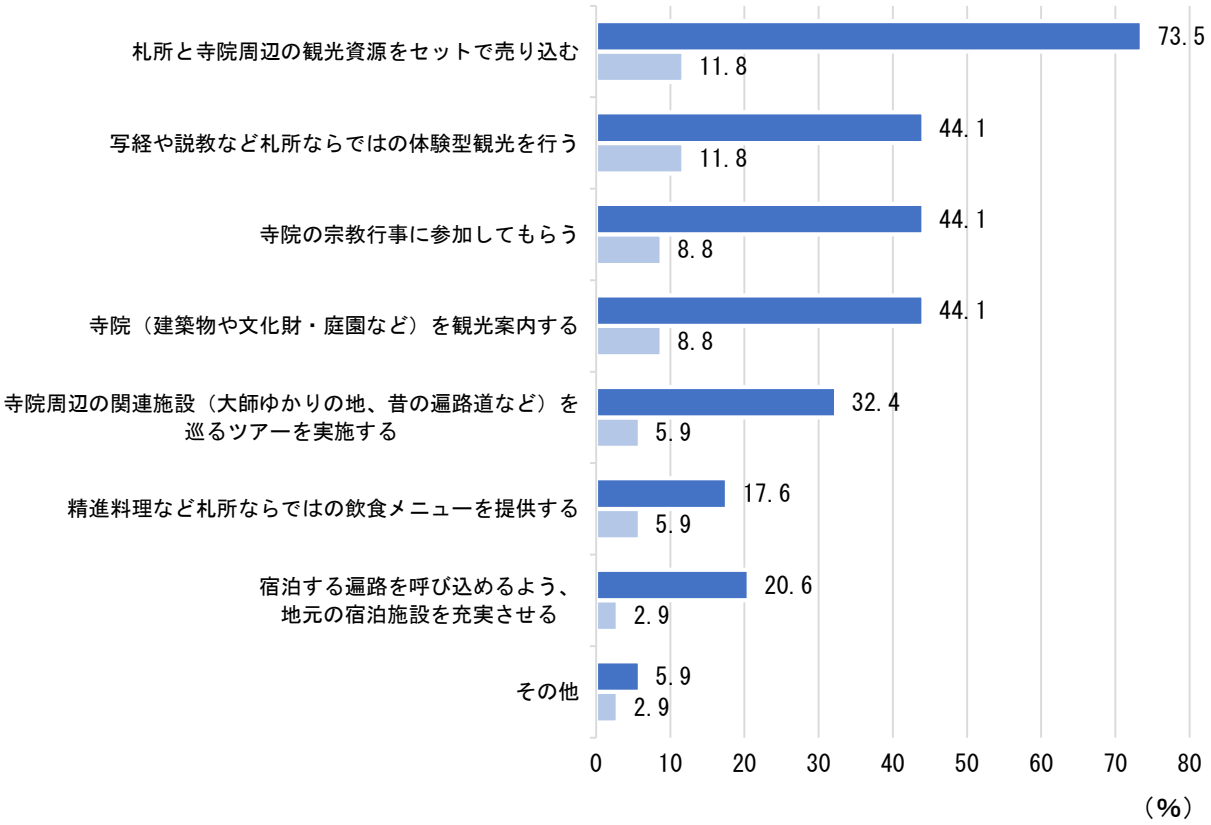


８．四国遍路の魅力向上に向けた札所と地元との取り組みについて

前問７で「是非取り組むべき」「取り組むべき」と回答した人に「どのような取り組みが有効か」について尋ねたところ、「札所と寺院周辺の観光資源をセットで売り込む」が 73.5%で最も多く、「写経や説教など札所ならではの体験型観光を行う」「寺院の宗教行事に参加してもらう」「寺院（建築物や文化財・庭園など）を観光案内する」がそれぞれ 44.1%、「寺院周辺の関連施設（大師ゆかりの地、昔の遍路道など）を巡るツアーを実施する」が 32.4%などとなった（図表Ⅰ-10）。

既に実施している取り組みとしては、「写経や説教など札所ならではの体験型観光を行う」「寺院（建築物や文化財・庭園など）を観光案内する」がそれぞれ 11.8%「寺院周辺の関連施設（大師ゆかりの地、昔の遍路道など）を巡るツアーを実施する」「寺院の宗教行事に参加してもらう」が 8.8%など、いずれも低い割合にとどまった。

図表Ⅰ-10 四国遍路の魅力向上のために有効な取り組み（n=34、複数回答）
［グラフ下段は既に実施している取り組み］



資料Ⅱ　遍路の受入態勢等に関するアンケート調査
（対象：遍路道沿線の市町村）

遍路道沿線の市町村へのアンケート	
１．実施時期	2018 年 11 月 15 日～11 月 30 日
２．調査対象	遍路道沿線の 58 市町村
３．調査方法	郵送による配布、返信用封筒・FAX による回収
４．有効回答数	43（回収率：74.1%）

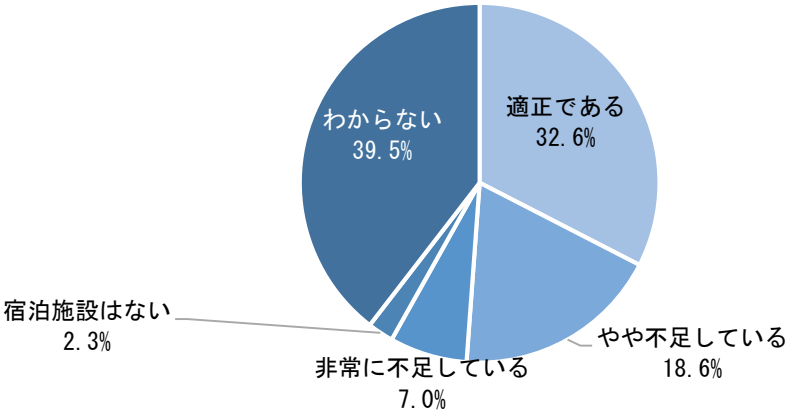
１．遍路向け宿泊施設の充足状況と自治体による支援の有無について

自市町村内での歩き遍路の利用が多い有料の宿泊施設の充足状況について尋ねたところ、「適正である」が 32.6%、「やや不足している」が 18.6%、「非常に不足している」が 7.0%などとなった（図表Ⅱ-1）。

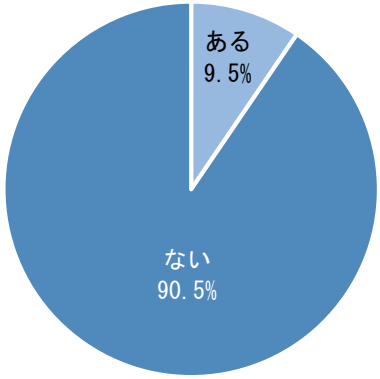
自治体で歩き遍路の利用にも資する有料の宿泊施設の整備や支援を行ったことがあるか尋ねたところ、「ある」が 9.5%、「ない」が 90.5%だった（図表Ⅱ-2）。

このうち、「ない」と回答した市町村にその理由（自由記入）を尋ねたところ、「既存の宿泊施設で充足している」「特に要望がない」「財政的余裕がない」「エリアが狭く、宿泊施設を整備する必要がない」といった回答があった。

図表Ⅱ-1 歩き遍路向け有料の宿泊施設の充足状況（n=43）



図表Ⅱ-2 自治体による遍路向け宿泊施設の整備や支援の有無（n=43）



２．遍路と観光振興について

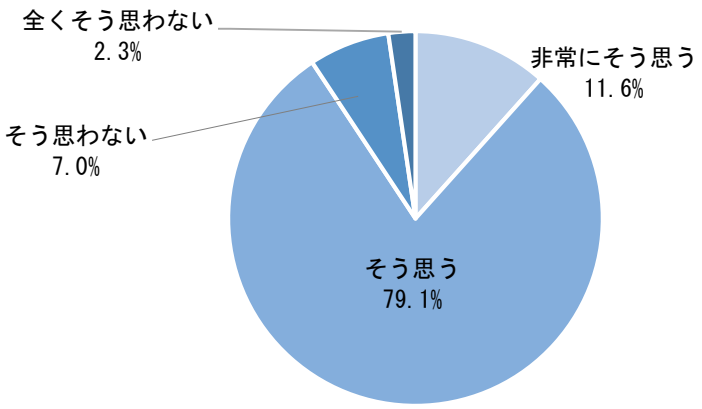
四国遍路（札所や遍路道など）が観光資源になるかどうか尋ねたところ、「非常にそう思う」が 11.6%、「そう思う」が 79.1%だったのに対し、「そう思わない」が 7.0%、「全くそう思わない」が 2.3%だった（図表Ⅱ-3）。

また、自治体が札所や住民などと連携して四国遍路を活かした観光振興や地域活性化に取り組んでいるかどうか尋ねたところ、「ある」が 38.1%、「ない」が 61.9%だった（図表Ⅱ-4）。

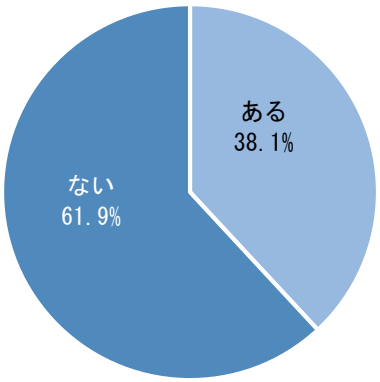
「ある」と答えた自治体の内容（自由記入）として、「遍路道のウォーキングイベントの開催や支援（後援）」や、「お接待を行っている住民や団体への活動支援、英語の研修」、「寺院が実施する祭りの共催」、などの回答があった。

「ない」と答えた自治体の理由（自由記入）には、「札所がなく通過点になっている」、「宗教的要素があることへの懸念」、などの回答があった。

図表Ⅱ-3 四国遍路は観光資源になるか（n=43）



図表Ⅱ-4 四国遍路を活かした観光振興や地域活性化に取り組んでいるか（n=42）

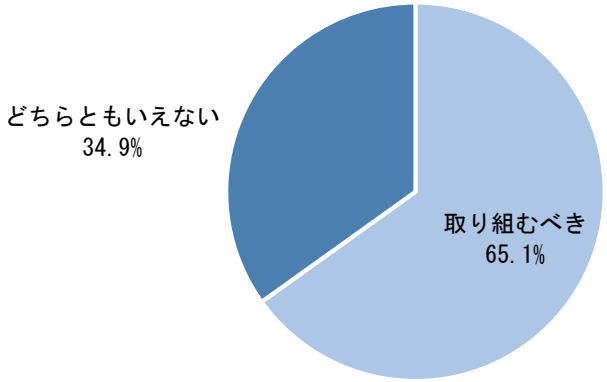


３．四国遍路の魅力を高めることについて

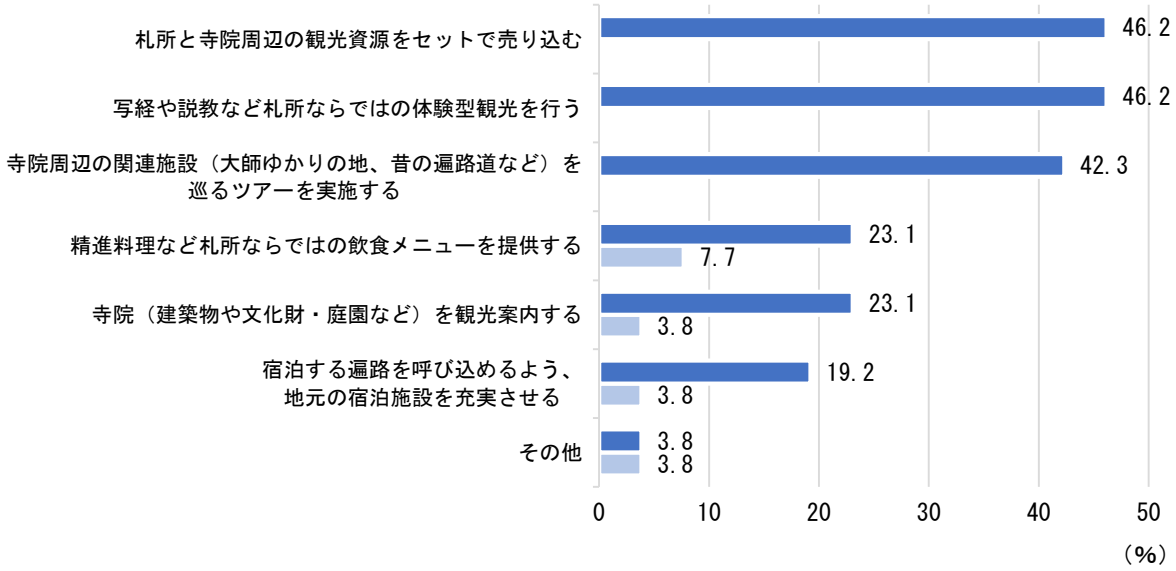
自治体が札所や住民と連携して巡礼者に四国遍路の魅力を深く感じてもらうことについて尋ねたところ、「取り組むべき」が 65.1%、「どちらともいえない」が 34.9%だった（図表Ⅱ-5）。なお、「是非取り組むべき」との回答はなかった。

また、そのために有効な取り組みとして、「札所と寺院周辺の観光資源をセットで売り込む」「写経や説教など札所ならではの体験型観光を行う」がそれぞれ 46.2%、「寺院周辺の関連施設（大師ゆかりの地、昔の遍路道など）を巡るツアーを実施する」が 42.3%となった（図表Ⅱ-6）。このうち、既に寺院と自治体が連携して取り組んでいることについては、「精進料理など札所ならではの飲食メニューを提供する」が 7.7%、「寺院（建築物や文化財・庭園など）を観光案内する」が 3.8%などとなった。

図表Ⅱ-5 自治体が札所や住民と連携して四国遍路の魅力を高めることについて（n=43）



図表Ⅱ-6 四国遍路の魅力向上のために有効な取り組み（n=26、複数回答）
［グラフ下段は既に実施している取り組み］



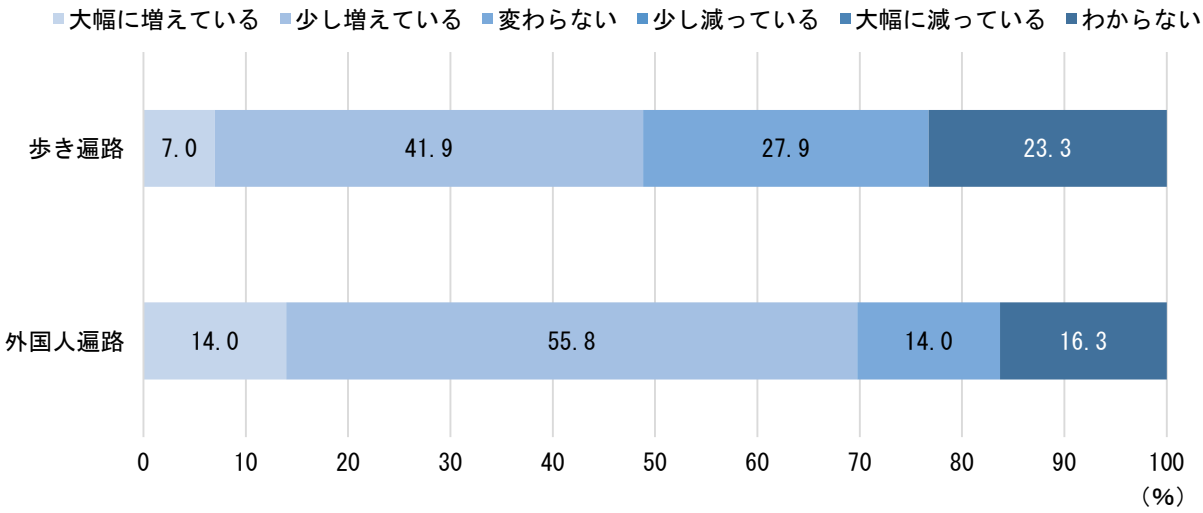
４．遍路の動向

歩き遍路の数について近年の動向（概ね 10 年前との比較）を尋ねたところ、「大幅に増えている」が 7.0%、「少し増えている」が 41.9%で、「変わらない」は 27.9%だった（図表Ⅱ-7）。

外国人遍路の動向について尋ねたところ、「大幅に増えている」が 14.0%、「少し増えている」が 55.8%で、「減っている」という回答はなかった。

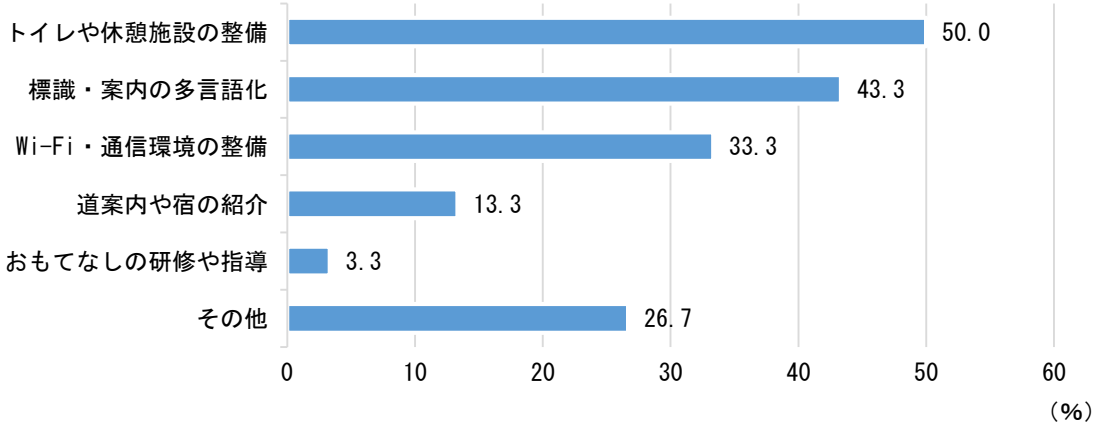
外国人遍路を受け入れるために取り組んでいることについて尋ねたところ、「トイレや休憩施設の整備」が 50.0%で最も多く、「標識・案内の多言語化」が 43.3%、「Wi-Fi・通信環境の整備」が 33.3%などとなった。「道案内や宿の紹介」は 13.3%にとどまった。（図表Ⅱ-8）。

図表Ⅱ-7 巡礼者数の近年の動向（n=43）
［概ね10年前との比較］



注）「大幅に」とは概ね１割以上増減した場合とした

図表Ⅱ-8 外国人遍路を受け入れるために取り組んでいること（n=30、複数回答）



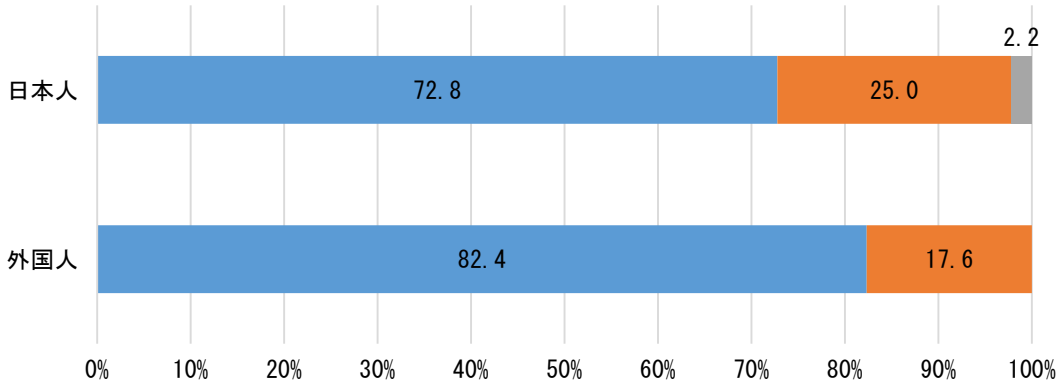
資料Ⅲ　歩き遍路を対象としたアンケート調査（対象：日本人と外国人）

歩き遍路へのアンケート	
1. 実施時期	2019 年 1 月 1 日～3 月 31 日
2. 調査対象	前山おへんろ交流サロン（香川県さぬき市）を訪れた巡礼途中の歩き遍路
3. 調査方法	アンケート用紙への記入による
4. 有効回答数	197 件（日本人 180 件・外国人 17 件）

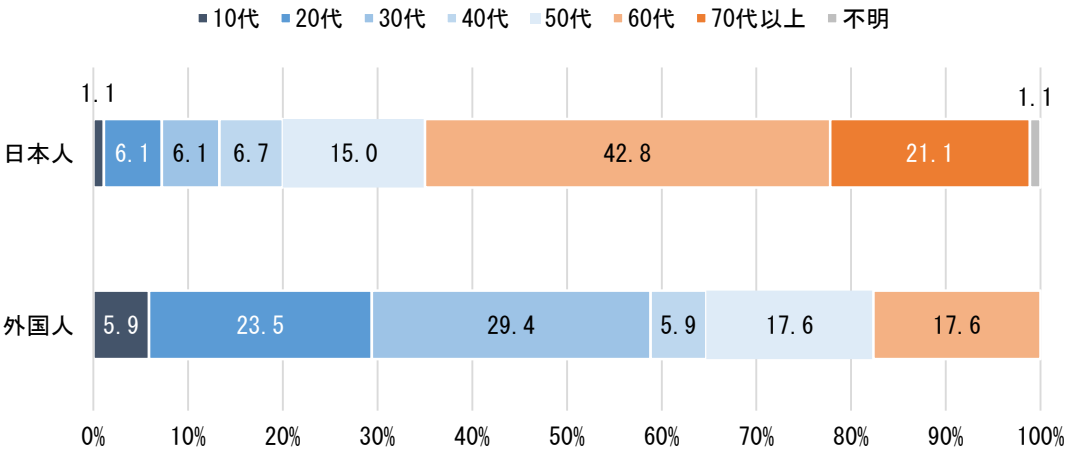
(1) 歩き遍路の属性（性別・年代別・信仰する宗教別）

性別は、日本人の 72.8%、外国人の 82.4%が「男性」だった。(図表Ⅲ-1)。年代別には、日本人では「60 歳代」が 42.8%、次いで「70 歳代」が 21.1%などとなった。外国人は「30 歳代」が 29.4%、次いで「20 歳代」が 23.5%だった。(図表Ⅲ-2)。日本人の歩き遍路は退職者世代が中心、外国人は現役世代が中心となった。

図表Ⅲ-1 歩き遍路の属性 性別　　日本人 n=180　外国人 n=17



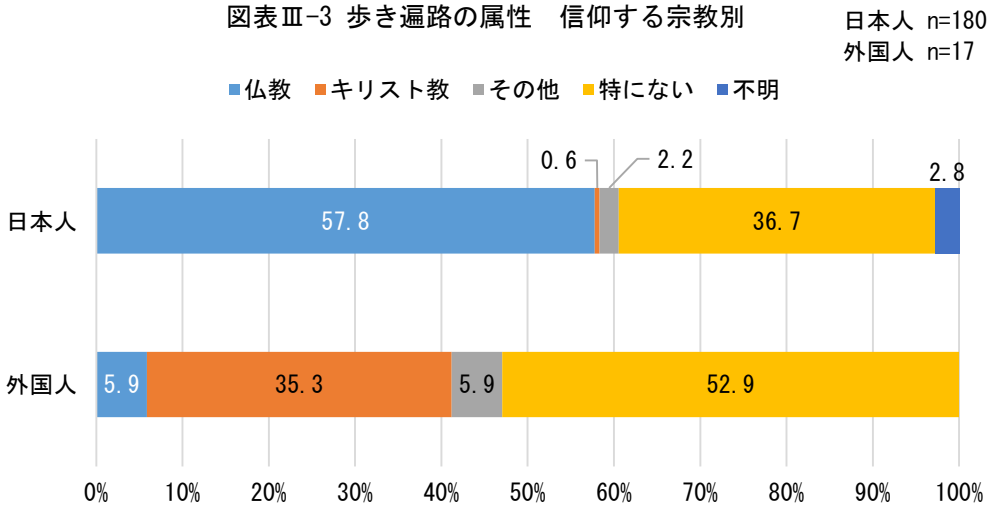
図表Ⅲ-2 歩き遍路の属性　年代別　　日本人 n=180　外国人 n=17



信仰する宗教について尋ねたところ、日本人は「仏教」が 57.8%と最も多いが、「特にない」も 36.7%を占めた。一方、外国人は「特にない」が 52.9%と最も多く、次いで「キリスト教」が 35.3%となった（図表Ⅲ-3）。

日本人、外国人ともに宗教離れが進んでいる様子がうかがえる。

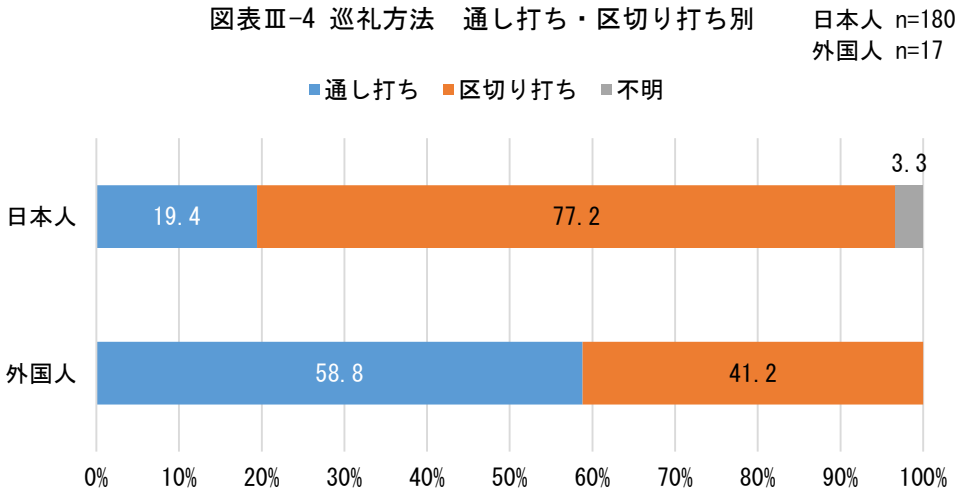
図表Ⅲ-3 歩き遍路の属性　信仰する宗教別



(2) 巡礼方法（通し打ち・区切り打ち別）

通し打ち・区切り打ち別で巡礼方法を尋ねると、日本人は 77.2%が「区切り打ち」、外国人は 58.8%が「通し打ち」となった（図表Ⅲ-4）。

図表Ⅲ-4 巡礼方法　通し打ち・区切り打ち別



（参考）外国人回答者（17 名）の地域・国別人数

北米地区　：　カナダ４名、アメリカ２名

欧州地区　：　フランス２名、ドイツ２名、デンマーク２名、オーストリア１名

豪州地区　：　オーストラリア１名

アジア地区　：　韓国２名、中国１名

(3) 巡礼する目的と四国遍路の魅力

巡礼する目的（以下、「目的」）と、四国遍路の魅力（以下、「魅力」）について、複数回答で尋ねた。

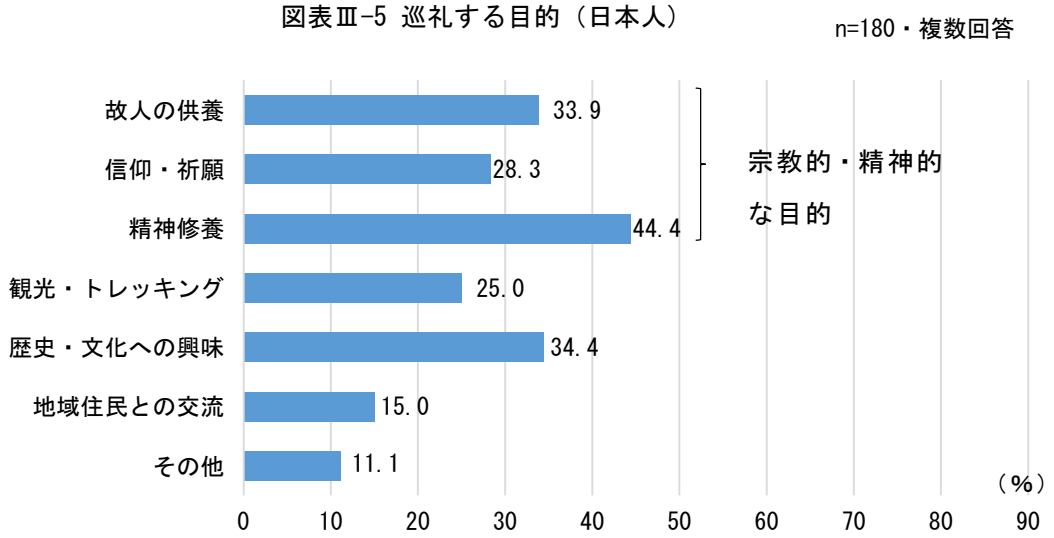
A. 日本人

日本人歩き遍路の「目的」は、「精神修養」が最も多く 44.4%、次いで「歴史・文化への興味」が 34.4%、「故人の供養」が 33.9%、「信仰・祈願」が 28.3%などとなった。「地域住民との交流」は最も少なく 15.0%となった（図表Ⅲ-5）。

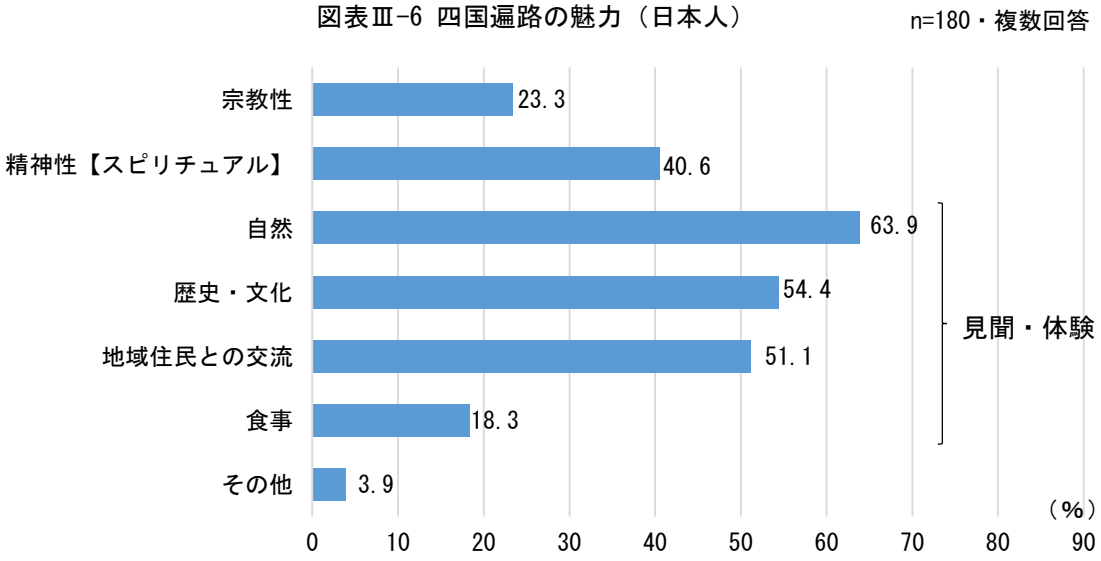
「魅力」については、「自然」が 63.9%と最も多く、次いで「歴史・文化」が 54.4%、「地域住民との交流」が 51.1%となり、「宗教性」は 23.3%にとどまった（図表Ⅲ-6）。

日本人は宗教的・精神的な目的から巡礼を始めるものの、道中での見聞や体験の数々がより印象に残り、それらを四国遍路の魅力として感じるようである。

図表Ⅲ-5 巡礼する目的（日本人）



図表Ⅲ-6 四国遍路の魅力（日本人）



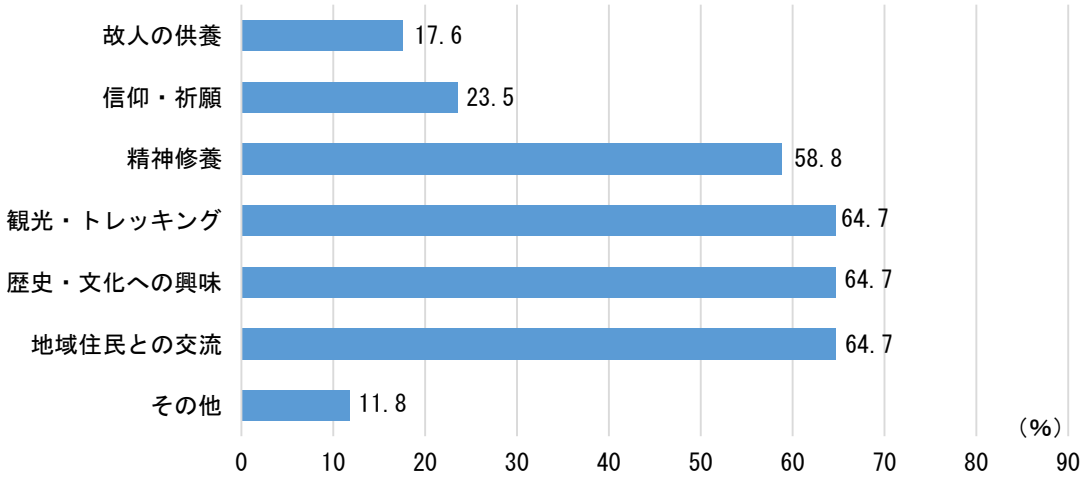
B. 外国人

外国人歩き遍路の「目的」は、「観光・トレッキング」「歴史・文化への興味」「地域住民との交流」の３項目がそろって 64.7%となった（図表Ⅲ-7）。

「魅力」については、「自然」「地域住民との交流」が 82.4%にのぼり、「歴史・文化」が 64.7%と続いた。（図表Ⅲ-8）。

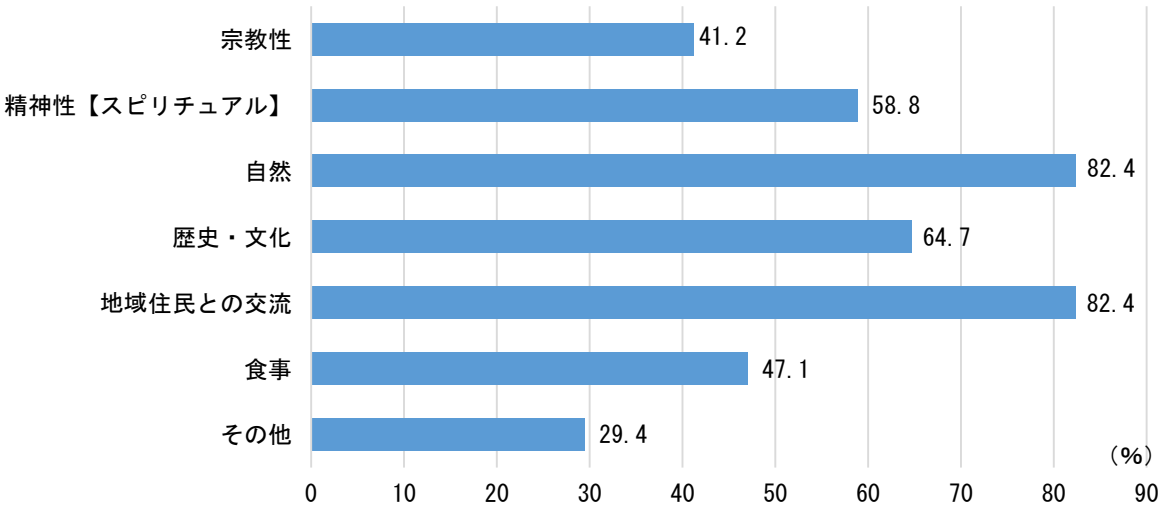
図表Ⅲ-7 巡礼する目的（外国人）

n=17・複数回答



図表Ⅲ-8 四国遍路の魅力（外国人）

n=17・複数回答



(4) 通し打ちの歩き遍路に要する費用

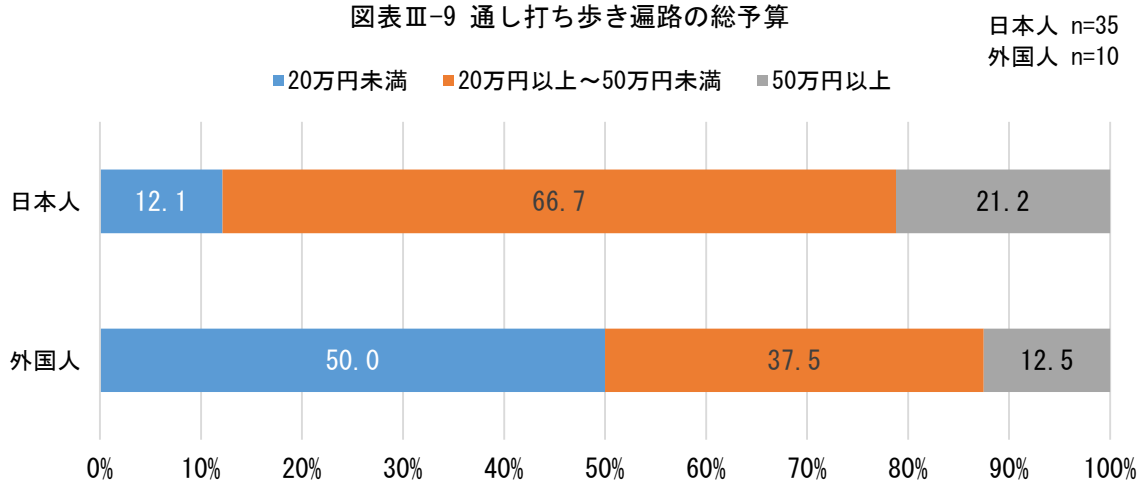
A. 総予算

通し打ちの総予算は、日本人では「20 万円以上～50 万円未満」が 66.7%を占め、次いで「50 万円以上」が 21.2%となった。

一方、外国人では「20 万円未満」が 50.0%と最も多く、次いで「20 万円以上～50 万円未満」が 37.5%となった（図表Ⅲ-9）。

外国人は日本人よりも低予算で通し打ちを行っていることがわかる。

図表Ⅲ-9 通し打ち歩き遍路の総予算



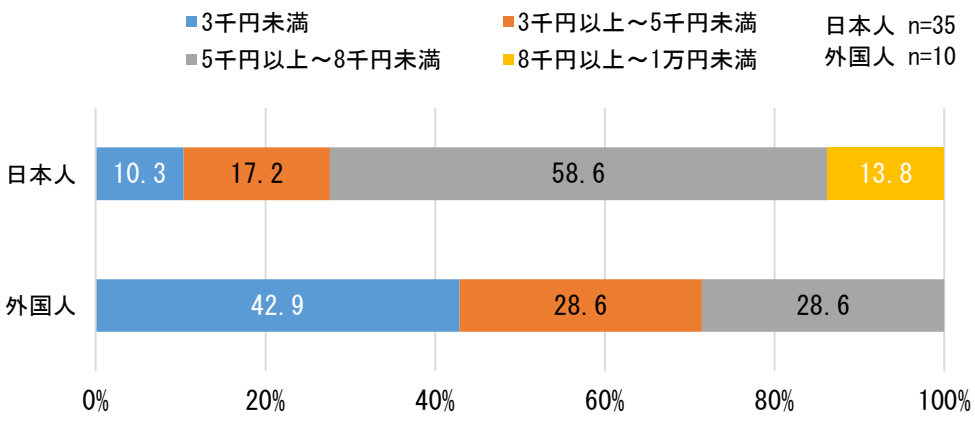
B. 予算内訳（１泊当たり宿泊費・１日当たり食費）

通し打ちの総予算の内訳として１泊当たり宿泊費と１日当たり食費についてみる。

１泊当たりの宿泊費は、日本人の場合、「５千円以上～８千円未満」が 58.6%、次いで「３千円以上～５千円未満」が 17.2%などとなった。外国人では、「３千円未満」が 42.9%、次いで「３千円以上～５千円未満」及び「５千円以上～８千円未満」が 28.6%となった（図表Ⅲ-10）。

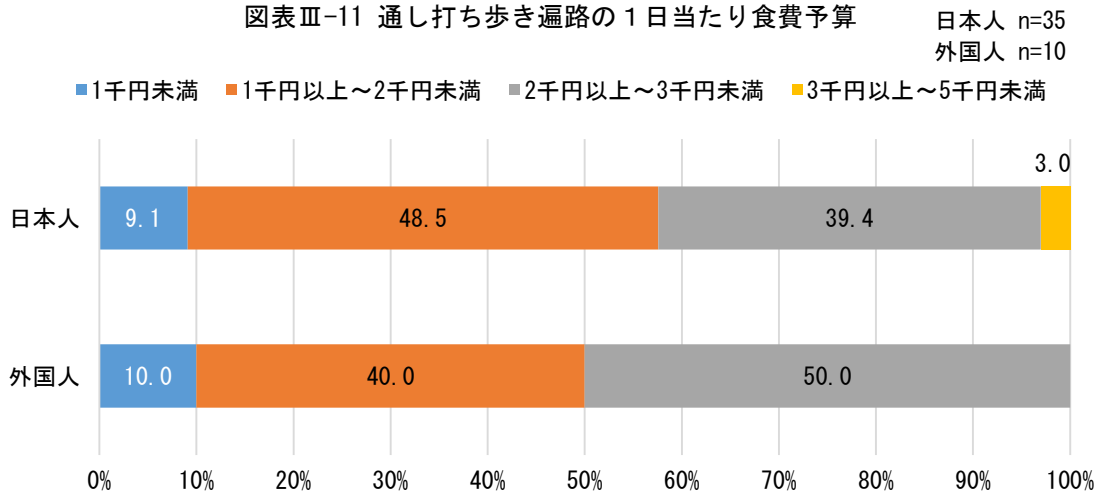
外国人は宿泊費用を節約することで総予算を抑えようしており、野宿も厭わない人が少なくないとみられる。

図表Ⅲ-10 通し打ち歩き遍路の1泊当たり宿泊費予算



１日当たりの食費については、日本人の場合、「１千円以上～２千円未満」が 48.5%と最も多く、次いで「２千円以上～３千円未満」が 39.4%などとなった。外国人では、「２千円以上～３千円未満」が 50.0%を占め、次いで「１千円以上～２千円未満」が 40.0%などとなった（図表Ⅲ-11）。食費については、外国人と日本人に大きな差異はみられない。

図表Ⅲ-11 通し打ち歩き遍路の１日当たり食費予算

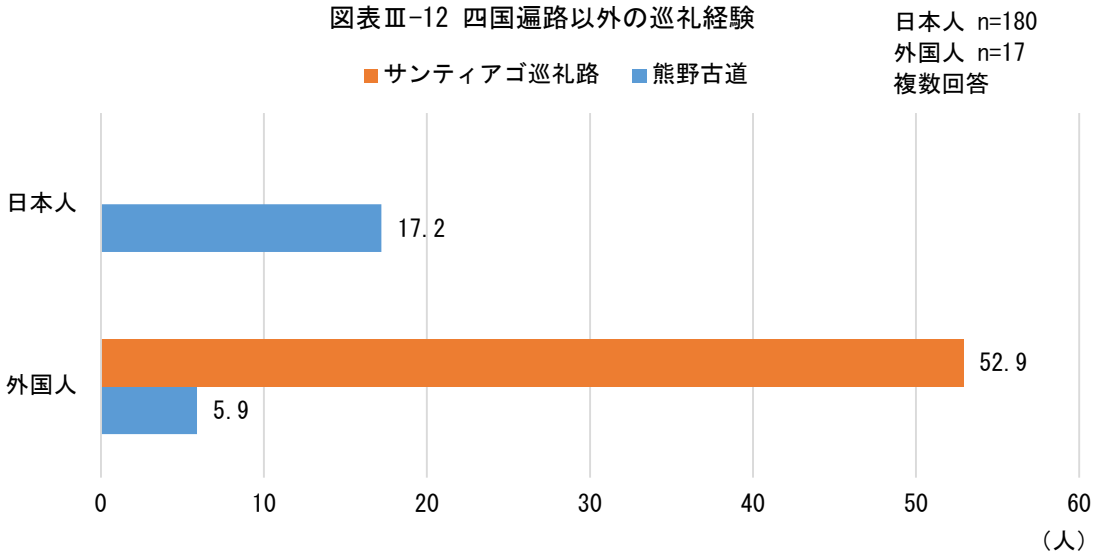


(5) 四国遍路以外の巡礼路との比較

四国遍路以外の巡礼経験について複数回答で尋ねたところ、日本人は 17.2%が「熊野古道」を経験していた。外国人では、52.9%が「サンティアゴ巡礼路」を、5.9%が「熊野古道」を経験していた（図表Ⅲ-12）。

また、サンティアゴ巡礼路の経験がある外国人歩き遍路に、両者の相違や感想などについて自由記入で尋ねた（図表Ⅲ-13）。

図表Ⅲ-12 四国遍路以外の巡礼経験



図表Ⅲ-13 外国人歩き遍路の感想（サンティアゴ巡礼路との比較・四国の印象など）

[カナダ・60 歳代男性]
・日本の文化と自然を楽しめた。
・サンティアゴ巡礼路では、巡礼者と沿道の小さな町がうまく共存している。
[デンマーク・30 歳代男性・林業]
・サンティアゴ巡礼路は静かではない（巡礼者が多く、観光地化されている)。
[デンマーク・30 歳代女性・人類学者]
・サンティアゴ巡礼路で幾人かの日本人と出会い、四国遍路のことを知った。
・弘法大師の教えを学びたくて四国に来た。
・無料の宿泊施設があればいいのにと思う。
・サンティアゴ巡礼路のほうがより国際的であり、道がより平たんである。
・どちらもそれぞれに非常に美しい。
[オーストリア・30 歳代男性・音響エンジニア]
・自然、食事、文化（が違う)。
[中国・40 歳代男性・エンジニア]
・どちらにも（人の）温かみを感じる。
・どちらも歴史に満ちている。
[韓国・20 歳代男性]
・(四国では）安い宿が見つからなかった。
・(四国では）正直なところスタンプ（納経？）料金 300 円は高すぎる。
・どちらも好きだが、四国遍路は経費がかかり過ぎる。
[カナダ・60 歳代男性・自営業]
・スペインは国家がやっているのでアルベルゲ、めじるし、住人の助けが良いです。 ※日本語で回答。
[カナダ・60 歳代女性]
・(不便もあるが）それも巡礼経験のひとつである。
・Ｗｅｂ上に、英語サイトがあればいいのにと思う。
[アメリカ・30 歳代男性・アートディレクター]
・宿泊施設に、アメニティグッズがあればいいのにと思う。

注）一部※を除き、英文での回答を日本語に翻訳した。カッコは本報告書の執筆者が補足

（参考）前山おへんろ交流サロンについて

前山おへんろ交流サロン（香川県さぬき市）は、87 番札所長尾寺と 88 番札所大窪寺の間に位置している（図表Ⅲ-14）。施設内には「へんろ資料展示室」と「交流サロン」がある。

へんろ資料展示室には江戸時代の紀行本や古地図、納札（おさめふだ）、納経帳など貴重な歴史的資料が展示されており、見学すると四国遍路文化をより深く知ることができる。

多くの歩き遍路がここに立ち寄って、休憩しながら他の歩き遍路や地元住民と交流し、結願前のひとときを過ごす。（そのような歩き遍路の方々にアンケートのご協力をいただいた。）

なお、徒歩または自転車で結願したお遍路さんには、当サロンの職員から結願証明書となる「遍路大使任命書」が授与される。

図表Ⅲ-14 前山おへんろ交流サロンと周辺地図

資料：さぬき市観光協会　さぬき市観光ガイドを参考に作成

資料Ⅳ　世界遺産「スペイン・サンティアゴ巡礼路」の概要

１．概要

1.1 巡礼の歴史

1993 年に世界遺産へ登録された「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」（以下、「サンティアゴ巡礼路」）は、エルサレム、ローマと並ぶキリスト教の三大聖地の 1 つを目指す巡礼の道である。巡礼者はスペイン国内に複数ある巡礼路のいずれかをたどり、ガリシア州の州都サンティアゴ・デ・コンポステーラに位置する大聖堂を目指す。10 世紀頃からは聖ヤコブ信仰を背景にヨーロッパ全土から巡礼者が集まるようになり、千年以上の歴史を持つ巡礼文化として今日に残されている。

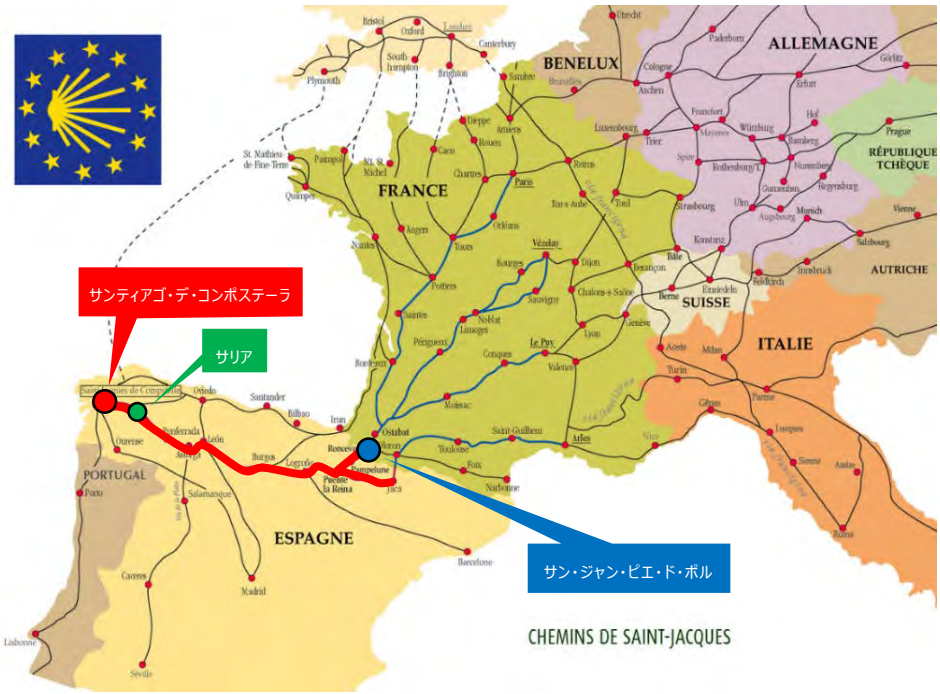
1.2 巡礼路

「サンティアゴ巡礼路」はヨーロッパ一円に広がり、スペイン国内に入るとすべてがサンディアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂に通じていく（図表Ⅳ-1）。

フランス各地からピレネー山脈を経由してスペイン北部を通る道（赤線）を「フランス人の道」といい、最も重要な巡礼路とされている。「フランス人の道」の起点となる「サン・ジャン・ピエ・ド・ポル」から歩くと、大聖堂までの距離は約 780km、１ヵ月～１ヵ月半程度を要する。近年は巡礼証明書の交付要件（徒歩で 100 km 以上）を満たす「サリア」から出発する巡礼者が非常に多くなっている。

その他、「北の道」「イギリスの道」「ポルトガルの道」「銀の道」「フィニステレの道」「冬の道」などがある。

図表Ⅳ-1 巡礼路「フランス人の道」（赤線）



資料：「シャコベオ」HP 掲載の地図などを参考に作成

1.3 サンティアゴ・デ・コンポステーラ

スペイン北西端部、ガリシア州の州都。州内では５番目の人口で 2012 年の人口は約 9 万 5 千人である。ガリシア州の政治の中心であるが、サンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂が位置する宗教都市であり、観光都市でもある。

ガリシア州政府は「シャコベオ」（観光協会のような団体）を運営している。シャコベオは、観光振興の立場から巡礼文化の情報発信、プロモーション、受入態勢整備を行っている。

1.4 サンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂

伝説では、イエスの十二使徒の１人、聖ヤコブ（スペイン語名はサンティアゴ）がエルサレムで殉教した後、その遺骸はガリシアまで運ばれて埋葬されたとされる。813 年、現在のサンティアゴ・デ・コンポステーラでヤコブの墓が発見されたとされ、それを記念して墓の上に大聖堂が建てられたのが起源である。

大聖堂は「巡礼事務所」を運営している。巡礼事務所は、主として信仰の立場から情報発信、プロモーション、受入態勢整備を行っている。また、大聖堂の権威のもと「巡礼手帳」（クレデンシャル）の発行および「巡礼証明書」（コンポステーラ）を交付することで、巡礼の認証機能を担っている。なお、巡礼手帳の発行が始まったのは 1987 年であり、比較的歴史が浅い。

２．典型的な巡礼者の行動

2.1 服装・荷物を整える

巡礼者の服装、荷物などに特段のルールはないが、ホタテガイ（聖ヤコブのシンボル）を身に着け、ひょうたん（水筒の代わり）を持つのが一般的である（写真Ⅳ-1）。

写真Ⅳ-1 巡礼者の服装（左）と巡礼の様子（右）

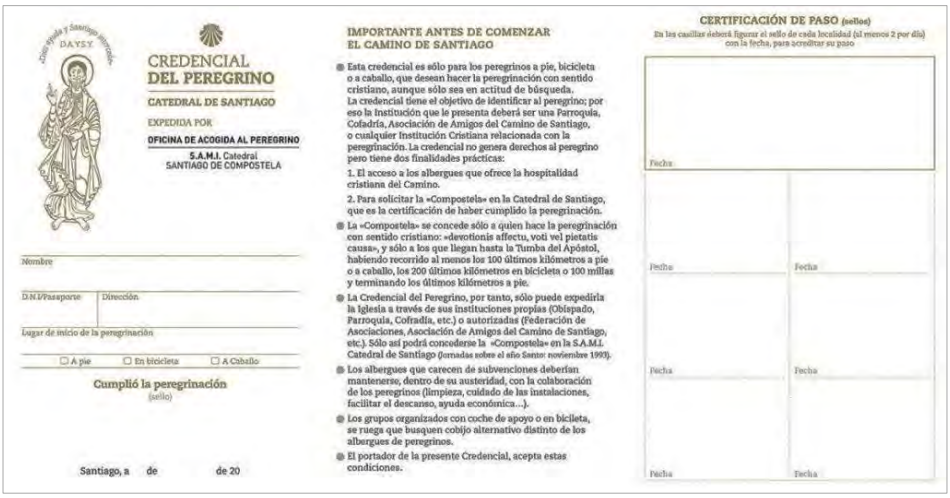
資料：「シャコベオ」 HP

2.2 巡礼手帳を携帯する

巡礼手帳（写真Ⅳ-2）は巡礼者の証であり、必携品である。通常、出発地付近の巡礼事務所などで購入することができる（３ユーロ程度、日本円で 375 円。1 ユーロ=125 円換算）。巡礼手帳所持者に対しては、飲食店での割安メニューの提供や、各地の博物館や公共交通機関における割引料金が適用されるなどの特典があり、巡礼者を地域全体で支援する仕組みとなっている。

巡礼手帳には公式スタンプの押印欄が設けられており、飲食店や宿泊施設を利用するとそれぞれ独自の公式スタンプを押印してもらえる。

写真Ⅳ-2 巡礼手帳



資料：「巡礼事務所」 HP

2.3 アルベルゲに泊まる

アルベルゲ（写真Ⅳ-3）とは、巡礼者専用の素泊り簡易宿泊施設であると同時に、巡礼者を見守る機能を併せ持つ。巡礼手帳を所有する人だけが利用できる。設置主体別には、教会系や自治体系、民営などがある。

(1) 利用方法

宿泊料金の相場は、自治体系では５～10 ユーロ（日本円で 625～1,250 円）、民営では 10～15 ユーロ（同 1,250～1,875 円）といずれも格安である。教会系では宿泊料金は無料ながら寄付を行うのが作法のようである。公営は先着順であるが、民営はインターネット等での予約を受け付けるところもある。

ベッドは二段ベッドのドミトリー（相部屋）形式で、男女同室も多い。到着順に空いているベッドを使う。使い捨ての不織布製シーツを受付で受け取って自分でベッドに敷き、持参した寝袋に入って寝る。設備としては、共同のキッチン、食堂、シャワー、トイレが基本的で、ところによっては有料の洗濯機、乾燥機も備えている。また、原則として各所１泊限りとされている。

(2) 荷物配送体制（アルベルゲの付随機能）

アルベルゲから次のアルベルゲまで荷物を配送するサービスがある。専用の紙袋に名前と届先を記入し、配送料（５～７ユーロ、日本円換算 625 円～875 円）を入れてアルベルゲ内の所定の場所に置いておくと、業者（民間運送会社または郵便局）が集荷して１時間程度で次の宿に配送してくれる。

(3) ボランティア（アルベルゲの人手）

公営のアルベルゲでは、世界各国からのボランティアが世話人として１～３週間程度交代で働いている。彼らは自己の巡礼経験をもとに、宿泊者の足のマメの処置、病院の紹介、次の宿の相談なども行っている。ボランティアには現地までの交通費や給料は支給されず、寝場所と食事だけが提供される。巡礼事務所が巡礼経験者を対象に募集しており、応募者のなかから一定要件を満たした人が世話人に認定される。

写真Ⅳ-3 アルベルゲの外観（左）とベッド（右）

資料：「シャコベオ」 HP

2.4 道を確かめる

巡礼者に向けた道案内として、巡礼のシンボルであるホタテガイが刻まれた道標をシャコベオが設置している。道標の材質は様々であるが形は共通である。原則 500ｍごとに、また、分岐や交差があるところにも設置され、サンティアゴ・デ・コンポステーラまでの距離が記されている（写真Ⅳ-4）。

黄色の矢印は、ホタテガイと同様に巡礼路のシンボルであり、巡礼路の至るところ（路面、建物、塀、樹木など）に描かれている。目につきやすく、だれでも一目で理解できる優れたデザインである。黄色の矢印の創始者、司祭 Elías Valiña は、1980 年代、「サンティアゴ巡礼路」の維持保全活動に尽力した人物として知られており、その貢献はシャコベオ HP でも讃えられている。

写真Ⅳ-4 道標（左）と黄色の矢印（右）

資料：「シャコベオ」 HP

2.5 巡礼証明書を受け取る（巡礼の終わり）

巡礼者は終着点である大聖堂に到着すると巡礼事務所へ回り、スタンプが押された巡礼手帳を提示して巡礼証明書の交付申請を行う。申請書類には、国籍、出発地、巡礼手段（徒歩、自転車）、巡礼目的の記入を求められる（写真Ⅳ-5）。

巡礼証明書の交付要件は、徒歩・騎馬であればサンティアゴ・デ・コンポステーラまでの最後の 100km を、自転車であれば同じく 200km をそれぞれ巡礼すること、巡礼手帳に１日当たり２個以上のスタンプが押印されていること、さらに巡礼目的が「宗教」または「宗教およびその他」の場合である。（「宗教以外」の場合は「距離証明書」が交付される。）

大聖堂では毎日正午に巡礼者のための ミサが行われている。ミサでは出身国、出発地、氏名が唱えられ祝福されて、巡礼は終わりとなる。

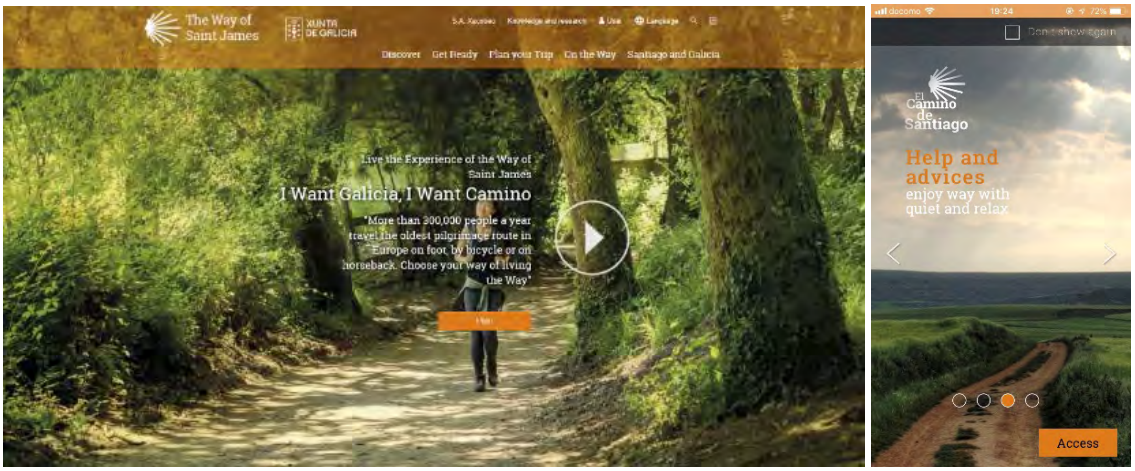
写真Ⅳ-5 大聖堂（左）と巡礼証明書（右）

資料：「シャコベオ」 HP

2.6 シャコベオ HP による情報発信

アルベルゲなどに設置された Wi-Fi スポットからシャコベオ HP にアクセスすることで、巡礼中に必要な情報（宿泊施設、医療施設、経路、天気予報、観光情報など）を確認できる（写真Ⅳ-6）。（スペイン語、英語等 7 か国語対応。日本語は未対応。）

写真Ⅳ-6 シャコベオ HP ポータル（左）とスマホアプリ画面（右）



資料：「シャコベオ」 HP

３．世界遺産の経済効果

3.1 巡礼者総数の推移

1993 年に世界遺産へ登録された後、巡礼者総数は急増している。1991 年には年間 7,274 人であったが、2017 年には 30 万人を超え、2018 年には 32 万 7 千人以上に上っている（図表Ⅳ-2）。聖ヤコブの殉教日とされる 7 月 25 日が日曜日となる年は「聖年」とされ、巡礼者数は例年に比べ大幅に増加する。しかも、これは巡礼証明書を交付された人だけを集計した数値であり、証明書の交付を希望しない人や大聖堂まで行きつかなかった人を含めると、実際の数はもっと多い。巡礼路沿道の自治体にもたらす経済効果は大きいものと推察される。

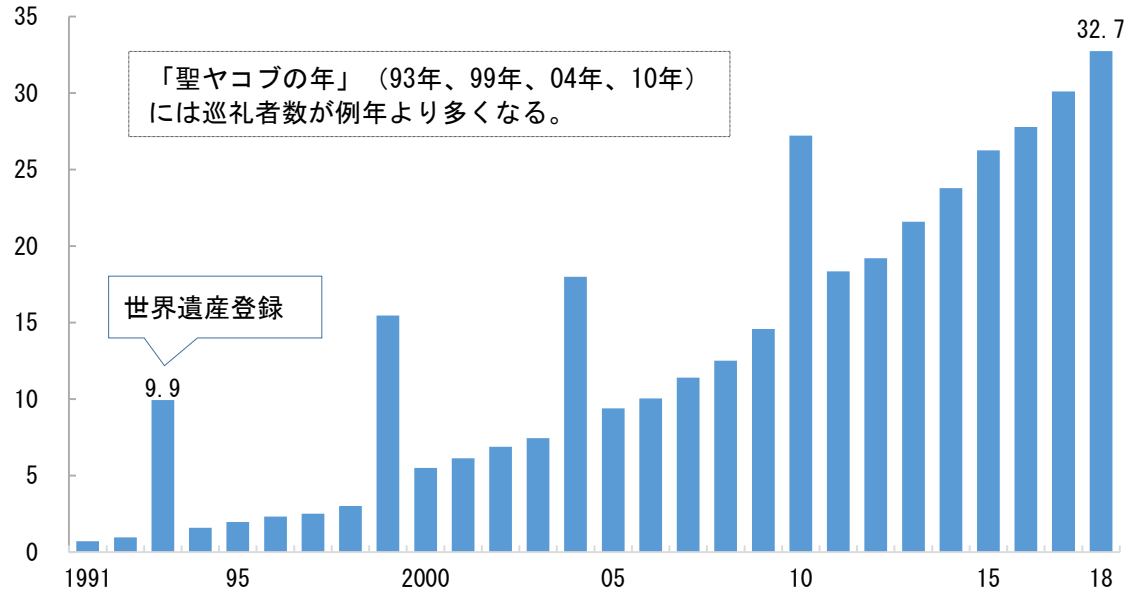
3.2 「フランス人の道」の成功

当初は、シャコベオが「フランス人の道」沿道の自治体に働きかけ、公営アルベルゲの建設と整備を後押しするなどして地道な努力を続けた。受入態勢整備が進むと次第に巡礼者が増え、民間の飲食店や宿泊施設も増加して、廃村の危機にあった地域が持ち直した例もあるという。「世界遺産に登録されて巡礼者が増えたのではなく、受入態勢整備が巡礼者を招き入れた。」と説明されている。このような状況から、「冬の道」などの地域でも「フランス人の道」を先進事例とする活性化の取り組みが行われている。

3.3 「冬の道」沿道自治体の取り組み

「冬の道」沿道自治体では、過疎をくいとめるために、巡礼路を重要な観光資源として観光産業の振興を目指している。具体的には、アルベルゲを自治体で建設することで「冬の道」を歩く巡礼者を増やし、その周辺に飲食店などが増加することを期待している。ルートの決定や巡礼路整備計画の策定は地元自治体で行い、巡礼路の整備や道標の設置はシャコベオが行っている。

（万人）　　図表Ⅳ-2 年間巡礼者総数の推移



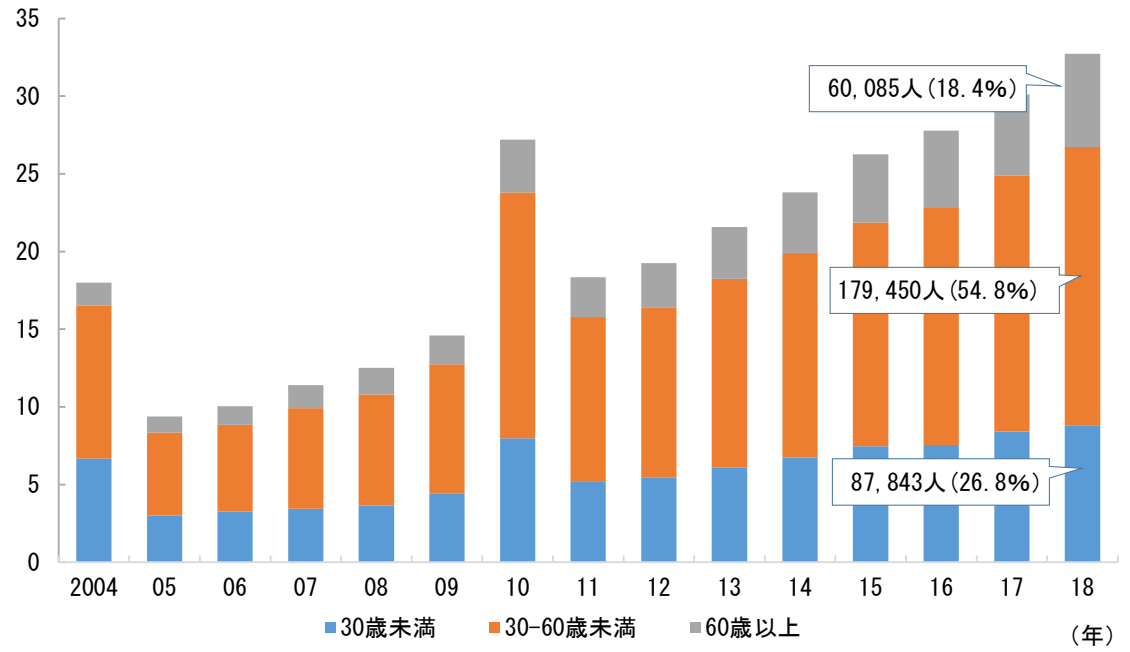
資料：サンティアゴ・デ・コンポステーラ巡礼事務所 HP　　（年）

４．統計データ

4.1 年代別人数

巡礼者数を年代別でみると、働き盛りの「30～60 歳未満」が最も多く、次いで「30 歳未満」「60 歳以上」となっている（図表Ⅳ-3）。いずれの年代も増加し続けている。

（万人）　　図表Ⅳ-3 年代別巡礼者数の推移



（年）

注）端数処理の関係で内訳と合計の数字が一致しない場合がある。以下同じ。

資料：「巡礼事務所」HP 掲載のデータをもとに作成

4.2 職業別人数

職業別でみると、「会社員」が最も多く、次いで「学生」、「退職者」となっている（図表Ⅳ-4）。

図表Ⅳ-4 巡礼者の職業（2018 年）

職業	会社員	学生	退職者	自由業	技術者	教員	その他	合計
人数	84,611	58,674	42,752	40,785	30,885	22,724	46,947	327,378
構成比	25.8%	17.9%	13.1%	12.5%	9.4%	6.9%	14.3%	100%

資料：「巡礼事務所」HP 掲載のデータをもとに作成

4.3 巡礼手段別人数

巡礼手段別でみると、「徒歩」が大半を占め、次いで「自転車」が多い。その他はごく少数となっている（図表Ⅳ-5）。

図表Ⅳ-5 巡礼手段（2018 年）

手段	徒歩	自転車	その他騎馬など	合計
人数	306,064	20,787	527	327,378
構成比	93.5%	6.3%	0.2%	100%

資料：「巡礼事務所」HP 掲載のデータをもとに作成

4.4 巡礼目的別人数

「宗教＆その他」が最も多く、次いで「宗教」となっている（図表Ⅳ-6）。なお、巡礼証明書を得るために巡礼事務所で「宗教以外」と申告する人が少なくなっているとみられ、実際には非キリスト教徒の巡礼者も少なくない。

図表Ⅳ-6 巡礼の目的（2018 年）

目的	宗教＆その他	宗教	宗教以外	合計
人数	156,720	140,037	30,621	327,378
構成比	47.9%	42.8%	9.3%	100%

資料：「巡礼事務所」HP 掲載のデータをもとに作成

4.5 国籍別人数

巡礼者数を国籍別でみると、地元「スペイン」をはじめ欧州圏内が８割を占めるが、その他からの巡礼者も２割を超えており、巡礼者の国際化が進んでいる（図表Ⅳ-7）。

図表Ⅳ-7 地域別・国籍別人数（2018 年・上位 50 カ国）

地域（構成比）	国籍別人数（千人）
欧州（80.9%）	スペイン（144.1）、イタリア（27.0）、ドイツ（25.3）、ポルトガル（14.4）、フランス（8.8）、イギリス（7.6）、アイルランド（7.5）、ポーランド（4.8）、オランダ（3.7）、デンマーク（2.5）、チェコ（2.3）ベルギー（2.1）、オーストリア（2.1）、ロシア（1.9）、スイス（1.6）、スウェーデン（1.3）、ハンガリー（1.3）、スロバキア（1.1）、フィンランド（0.9）、ルーマニア（0.7）、リトアニア（0.7）、スロベニア（0.7）、ノルウェー（0.6）、ブルガリア（0.6）、ウクライナ（0.6）、クロアチア（0.5）、ラトビア（0.2）
北米（7.2%）	アメリカ（18.6）、カナダ（5.0）
中南米（5.3%）	ブラジル（5.6）、メキシコ（3.6）、アルゼンチン（2.9）、コロンビア（2.1）、ベネズエラ（0.9）、ウルグアイ（0.6）、チリ（0.5）、エクアドル（0.5）、ペルー（0.3）、プエルトリコ（0.3）、コスタリカ（0.3）
アジア（3.1%）	韓国（5.7）、日本（1.5）、中国（1.1）、台湾（1.0）、フィリピン（0.4）、イスラエル（0.3）、シンガポール（0.3）
豪州（1.9%）	オーストラリア（5.2）、ニュージーランド（0.9）
その他（1.5%）	南アフリカ（1.5）、その他（3.3）
合計（100.0%）	合計　327.3 千人

資料：「巡礼事務所」HP 掲載のデータをもとに作成

５．巡礼の目的

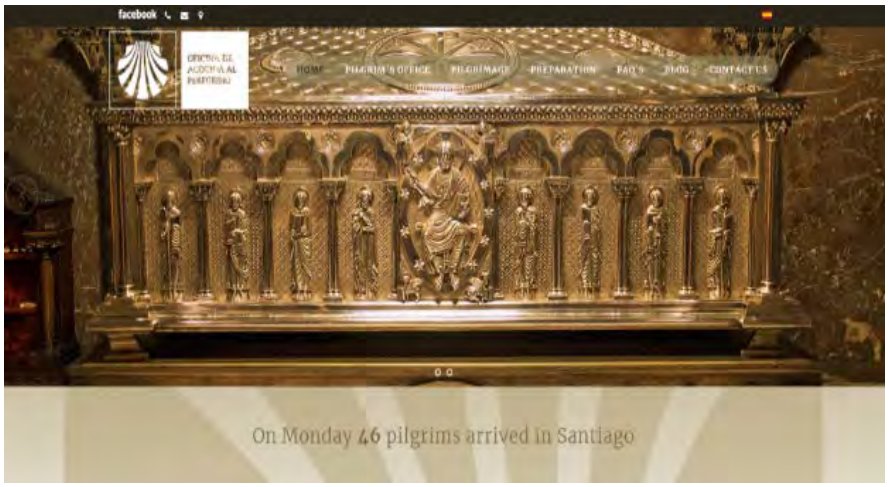
本来の巡礼目的は「聖ヤコブ信仰」であるが、巡礼事務所 HP に掲示されている“巡礼する理由”をみると、目的が多様化していることがわかる（図表Ⅳ-8）。巡礼事務所は、伝統的な聖ヤコブ信仰を守る立場であるが、寛容な姿勢で多種多様な巡礼者を迎え入れている。

図表Ⅳ-8 “巡礼する理由”

・自分探し	・人生の目的を探したい
・巡礼の雰囲気を楽しみたい	・約束を果たすため
・巡礼者間で交流したい	・歴史ある巡礼路を歩きたい
・文化と芸術を学びたい	・聖ヤコブ信仰による
・信仰を深め自分自身を強くしたい	

資料：「巡礼事務所」 HP

写真Ⅳ-7 巡礼事務所 HP ポータル



資料：「巡礼事務所」 HP

６．考察

「フランス人の道」沿道の都市「サリア」から「徒歩」で巡礼すると、移動距離は約114㎞であり、４～５日の日程で大聖堂に到着し、巡礼目的を「宗教」または「宗教およびその他」で申告すると巡礼事務所から巡礼証明書が交付され、「巡礼した」と認められる。これは、長期休暇を取りにくい「会社員」や体力の衰えた「60歳以上」の巡礼者でも完遂できる行程であろう。こうした巡礼証明書交付の仕組みが、巡礼者数が急増した理由の一つともなっており、観光振興策として成功を収めていると言える。

一方、「フランス人の道」の起点「サン・ジャン・ピエ・ド・ポル」から歩き通す巡礼者も相当数増加している。国籍、性別、職業、年齢、巡礼目的、宗教を異にする様々な巡礼者が、歩きながら、またはアルベルゲで寝食をともにすることで交流し、友情を育み、相互理解を図る様子が想像できる。巡礼路は人が歩いてこそ巡礼路であるから、このように全行程を歩く巡礼者は「サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路」の維持・継承にとって重要な存在と言える。

７．映画にみる今日の巡礼者

7.1 「サン・ジャックへの道」（フランス、2005年）

主な登場人物は人種、国籍が異なる９名。数名のイスラム教徒を含む。重い荷物を背負い、旅を続けるうちに次第に打ち解け家族同然となる。都会の日常生活を離れ巡礼することで個性の強い登場人物たちが精神的に成長していく様子が描かれている。

7.2 「星の旅人たち」（アメリカ・スペイン、2010年）

息子を亡くし、喪失感を抱きつつ巡礼の旅に出る眼科医が主人公。世界各国から集まる巡礼者も、皆、それぞれの過去や問題を抱えている。様々な人々との交流を経て、主人公の内面が変わっていく過程が描かれている。

【参考資料等】

1.「NPO 法人遍路とおもてなしのネットワーク」（2018 年 12 月・ヒアリング）

2.「NPO 法人日本カミーノ・デ・サンティアゴ友の会」（2018 年 12 月・ヒアリング）

3.「NPO 法人日本カミーノ・デ・サンティアゴ友の会」HP（http://www.camino-de-santiago.jp/）

4.「シャコベオ」 HP （http://www.caminodesantiago.gal/en/inicio）

5.「巡礼事務所」HP（https://oficinadelperegrino.com/）

資料Ⅴ　世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道（熊野古道）」の視察概要

１．視察について

1.1 視察の目的

「紀伊山地の霊場と参詣道」は、和歌山県・奈良県・三重県にまたがり、起源や内容を異にする三つの霊場（高野山、熊野三山、吉野・大峰）とそれらを結ぶ参詣道を登録対象とする世界遺産である。2004 年７月に世界遺産として登録されて以来、世界各国からの観光客が年々増加しており、その受入態勢は高く評価されている。

四国アライアンス地域経済研究分科会は、高野山における宿坊や、熊野古道における外国人観光客の受入態勢と世界遺産の維持・継承へ向けた先進的な取り組みを調査するため、現地を視察しヒアリングを行った（図表Ⅴ-1）。

図表Ⅴ-1　「紀伊山地の霊場と参詣道（熊野古道）」の視察先および位置図

高野山	・高野町観光振興課　・高野町観光協会 ・（一社）高野山宿坊協会
熊野古道	・（一社）田辺市熊野ツーリズムビューロー ・旅館「霧の郷たかはら」　・和歌山県世界遺産センター

資料：「（一社）田辺市熊野ツーリズムビューロー」HP を参考に作成

２．高野山の視察

2.1 高野山の概要

高野山は、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」を構成する聖地の地域名称であり、和歌山県北部、伊都郡高野町にある、周囲を 1,000m 級の山々に囲まれた標高約 800m の平坦地を指す。

高野山真言宗総本山金剛峯寺（山号は高野山）は、平安時代の 816 年（弘仁７年）空海（弘法大師）により修禅の道場として開かれ、現在は根本道場「壇上伽藍」を中心としている。東西 60m、南北約 70mの主殿（本坊）をはじめとした様々な建物を備え、境内総坪数は 48,295 坪（約 16 万㎡）にわたる。高野山内の寺院は金剛峯寺、大本山宝寿院のほか、子院が 117 ヵ寺に及び、宗教都市を形成している。

(1) 行政、寺院の役割

歴史的には金剛峯寺がこの地域の取りまとめ役であり、今日でも宗教の立場からその一翼を担っている。高野町役場は行政の立場から観光面での企画、調整や設備などの整備を受け持つ。その他、旅行者と宿坊の仲介役である（一社）高野山宿坊協会や、観光プロモーションを担う高野町観光協会がある。

いずれも個別に窓口を持ち、それぞれの立場から参拝者や観光客に対応しているが、外国人観光客に対応するためのワンストップ窓口が必要との共通認識もある。

(2) 訪日外国人の受入態勢

A. 外国語対応

外国人は母国語での案内を希望しているが、対応できる地域通訳ガイドはまだ少なく、その育成が課題となっている。高野町に住む人がガイドをしながら生活していける町になれば、雇用機会が増え人口維持にもつながるとの考えから、学校における外国語教育のあり方から見直したいとの意見もある。

B. 情報発信

（一社）高野山宿坊協会は宿坊案内、高野町役場は高野山観光全体の PR を役割としており、力点が異なるのでパンフレットなどは別々に作成している。

日本語版と外国語版も別々に作成している。外国語版パンフレットをつくるにあたっては、日本語版を翻訳しても外国人目線にそぐわないので、外国人に依頼して書き起こしてもらっている。また、宗教分野の専門用語が多いので、高野山の案内ができる外国人や英文がわかる僧侶などに依頼して内容、表現をチェックしている。

C. 音声ガイド機器等

15 年前に観光協会が関係各所からの補助金や出資を募り導入した。5 か国語対応(日本語、中国語、韓国語、英語、フランス語）で、103 ヵ所のスポットで該当番号を入力すると音声案内が流れる仕組みとなっている。レンタル料金は 1 日 500 円である。

観光ナビアプリをダウンロードしてスマホでガイド音声を聞く仕組みもある。

D. Wi-Fi 環境

外国人は、ローミング費用が高くつくため Wi-Fi を好む。高野町内ではほぼ全域で利用可能であり、奥之院などでも順次整備を進めている。

各空港で販売されている格安 SIM カードは、アジア系外国人はよく利用しているが欧米系外国人はあまり使わない。スマホに観光ナビアプリをダウンロードして、各所に設置した基地局から Bluetooth を飛ばして Wi-Fi 環境を補完するという方向性も考えている。

E. 夜間観光（ナイトツアー）

地元旅行会社主催の「奥之院ナイトツアー」(有料、ガイド付き）がほぼ毎日あり、多い日には 80 人ほど参加している。参加者数は最高 270 人/月に達し、真冬でも 60 人/月の参加者があるという。そのうち 3 割程度は外国人であり、外国語で解説できる案内人も在籍している。

ライトアップを行う寺院（写真Ⅴ-1）も増えてきており、将来的にはナイトミュージアムのようなイベントも開催可能ではないかと考えている。

写真Ⅴ-1 奥之院付近（左）と寺院のライトアップ（右）

撮影：（一財）百十四経済研究所

(3) 宿坊

A. 宿坊の状況

宿坊とは、寺院に付属した宿泊施設である。本来は修行僧や参拝者が修行で訪れた際に泊まる施設であることから、一般的な旅館と異なり門限や食事時間、勤行参加などについて宿坊ならではの規則がある。精進料理が供され、客室は相部屋にできるような和室で、洗面所やトイレ、風呂は共用となっているところが多い。

現在、宿坊は 52 軒（内１軒は休業中)、高野町全体では約３千人の収容力がある。例年夏に開催される高野町少年野球大会の時期には、選手・父兄など３千人弱を一度に受け入れている。

B. 宿坊の取り組み

宿坊の多くは外国人の受入に積極的である。外国人の多くは個人旅行でプライベート面への配慮も重視されることから、客室の個室化（バストイレ付）が進みつつある。価格帯は、１泊２食付きで１万円程度、バストイレ付で１万５千円前後がほとんどで、最高級では１泊５万円もある。

館内の外国語表記については地元在住外国人の協力、キャッシュレス決済対応については地元銀行の協力もあって徐々に進んでいる。Wi-Fi は過半数の宿坊が全館または一部分に設置済みである。大広間を仕切る襖を締め切って、襖絵をアートとして鑑賞してもらう工夫をしている寺もある。

高野山はかつて女人禁制であったことから接客はもっぱら修行僧（男性）が行っていたが、外国人や女性をスタッフとして雇い入れている宿坊もある。精進料理はベジタリアンの外国人に喜ばれており、連泊者が増えてきているため、同じメニューが続かないよう精進料理の新たなメニュー開発に取り組む宿坊もある。

外国人宿泊者に適した態勢を整えたことが評判となって、外国人がさらに増えるという好循環もみられる。また、建物の内部が古いままでも高野山の伝統を守っているとして、外国人から喜ばれることも多いという。

（写真Ⅴ-2 は本覚院宿坊、個室１室の定員２名～３名、１泊２食付き１万２千円程度）

写真Ⅴ-2 本覚院宿坊

（正面入口）

（個室）

（広間・襖絵）

（精進料理）

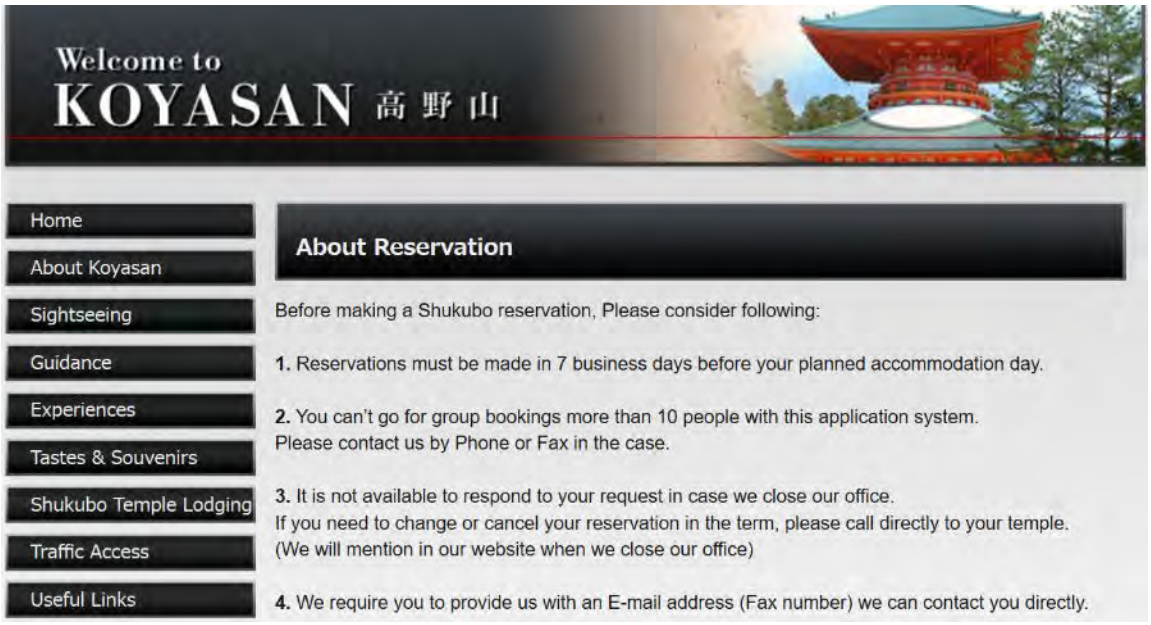
撮影：（一財）百十四経済研究所

C.（一社）高野山宿坊協会

（一社）高野山宿坊協会は「高野山の本当の魅力は宿坊体験にある」との立場から、旅行代理店（第３種旅行業者）として宿坊と外国人観光客を仲介しつつ受入態勢整備を進めてきた。

外国人観光客によくあるトラブルとして、無断キャンセルが挙げられる。電話で予約を受け付けると、習慣の違いや言葉の問題などから無断キャンセルにつながりやすい。そこで同協会では、ホームページに外国語（英語）対応の宿坊予約ページを設け、インターネット経由の予約に限ることでトラブルを防いでいる。予約ページでは、予約時点でクレジットカード情報を入力してもらうなどして、キャンセル料を回収できるように設計されている（図表Ⅴ-2)。

図表Ⅴ-2 宿坊予約ページ



資料：（一社）高野山宿坊協会 HP

(4) 欧州系外国人が宿坊を評価する理由

寺院における勤行は教会におけるミサと同様、祈る行為であり、キリスト教圏に通じるところが大きい。宿坊で毎朝行われる勤行にも、外国人はよく参加する。僧侶とともに祈る、という体験は京都でもなかなかできないのだという。欧州系外国人は自国文化に誇りを持っているが、異文化にも強く興味を持つようである。

日本の旅行において、京都は絶対外せないが、実際に訪れてみると写真でみたイメージとの違い（振り向けば大都会）に落胆するようだ。しかしながら、高野山には日本らしさが残っているのだという。

(5) 宿泊客数の動向

当地の宿泊施設のほとんどは宿坊（52 軒）であり、その他、ゲストハウス（３軒）、ビジネスホテル（１軒）がある。

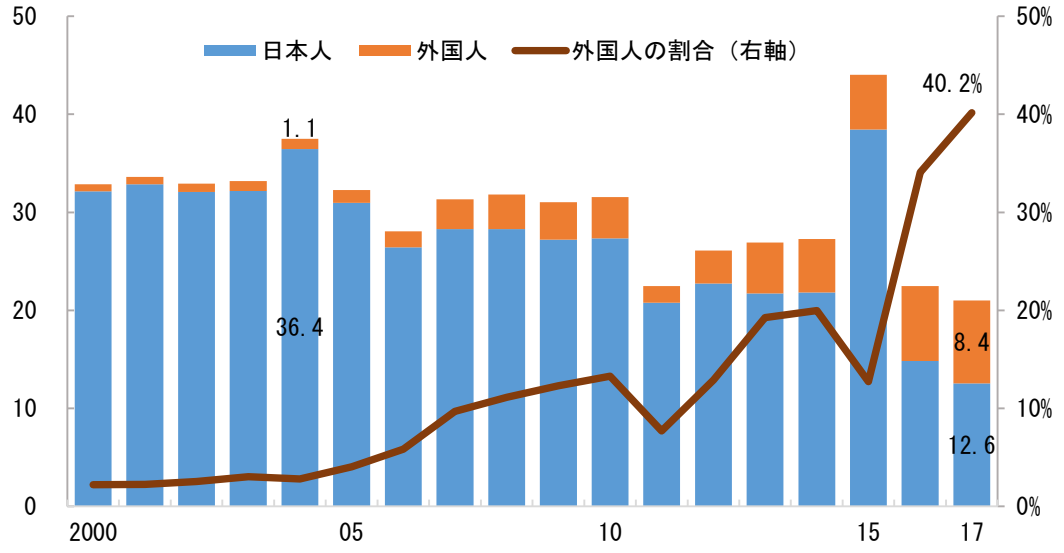
1973 年（宗祖御生誕 1200 周年）には 92.3 万人が宿泊していた。1980 年に南海電鉄スカイラインが開通すると観光客の流れが変わり、日帰り観光の増加、他の観光地への流出もあって、2017 年には 20.9 万人に減少した。

参拝者の宿泊は、かつて多かったお盆の時期は最近では減少する一方、外国人観光客が多く来る春、秋に増加している。宗教行事が多い冬（12 月～２月）は寺院が多忙となるが、観光客の閑散期と重なる。このため２月には半数以上の宿坊が休業する。

外国人宿泊者数は 2003 年には１万人程度だったが、世界遺産登録後に急増し、2017 年には８万４千人となった。直近では、2.5 人に１人の割合で外国人となっている。地域別にみると欧米人が特に多く、なかでもフランス人が４分の１以上を占めている。

外国人観光客は大地震などが日本で発生すると激減するリスクがあり、2016～2017年頃からはフランス人も頭打ちとなった。このため、今のうちに、日本人信者を増やしたいというのが関係者の総意となっている（図表Ⅴ-3）。

図表Ⅴ-3 高野山の宿泊客数の推移



資料：和歌山県観光客動態調査報告書を参考に作成

(6) 日本人参拝者・観光客の招き入れ

かつては戦没者遺族団による慰霊碑の建立や、高度成長期に活躍した企業、法人オーナーによる慰霊碑の建立や寄進が盛んに行われた。これが、企業関係者が定期的に高野山を訪れる強い動機となっていた。最近は遺族や企業オーナーの高齢化もあって慰霊碑への参拝者も減少傾向となっている。

次の世代にも、高野山に墓所を設け、定期的な参拝者になってほしいと期待しているが、日本人の宗教離れもあって難しい。

一方、欧米諸国では故スティーブ・ジョブズ氏など著名人が禅に傾倒したり、マインドフルネス（瞑想・呼吸法）が流行したりしている。こうした日本的な精神文化に関心のある欧米系外国人を招き入れることが、結果として日本人参拝者の増加につながるのではないかと考えている。

(7) 四国との連携

四国遍路を終えて高野山を訪れる人を毎日のように見かける。お接待や遍路宿での宿泊を経験したあとでは、高野山の宿坊の料金設定は高く感じられるかもしれず、どのように受け入れるべきか課題だと思っている。四国とはもっと積極的に連携したいと考えている。

(8) 金剛峯寺境内・境内案内人

高野町宿坊協会などを通じ、「金剛峯寺境内案内人」にガイドを依頼できる。金剛峯寺境内案内人は、一定の試験を経て金剛峯寺が任命する。金剛峯寺境内、壇上伽藍の案内が各３千円、合計で６千円、所要時間は１時間半程度である（写真Ⅴ-3)。

写真Ⅴ-3 金剛峯寺境内案内人による壇上伽藍の案内

撮影：（一財）百十四経済研究所

３．熊野古道の視察

3.1 熊野古道

熊野古道は、熊野三山（熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社）へ通じる参詣道の総称であり、世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」の通称ともなっている。

参詣道は中辺路（なかへち）、小辺路（こへち）、伊勢路（いせじ）、大辺路（おおへち）の４ルートからなり、一般には熊野古道と言えば中辺路の区間が観光の対象となることが多い。中辺路ルートは、和歌山県田辺市から山間部の熊野本宮大社・熊野那智大社を通って熊野速玉大社に至るおよそ 84 ㎞の行程となっている。

田辺市は、和歌山県の中南部に位置する人口約７万人の県下第二の都市で、県南部の経済・産業の中心地である。2003 年には旧田辺市を中心に近隣市町村が合併して現在の田辺市となった。熊野古道の中辺路ルートの起点であり、2004 年の世界遺産登録後は、観光振興の拠点となっている。

3.2 （一社）田辺市熊野ツーリズムビューローの取り組み

A. 同社の役割

世界遺産登録後、旧５市町村の地元関係者の協議を経て、熊野古道全域をカバーする官民協働の着地型旅行会社「(一社) 田辺市熊野ツーリズムビューロー」(職員 22 名)

が設立された。田辺市観光振興課や旧市町村の観光協会・商工会議所などと連携・協力しながら観光振興に取り組んでいる。

世界遺産が観光業にもたらす恩恵は３年までといわれることもあるが、田辺市の外国人宿泊者数は今でも増加中だ。世界遺産に登録された 2004 年の 1,409 人から 2017 年には 36,821 人へと大幅に増加。2018 年にはその取り組みと実績が高く評価され、第 10 回観光庁長官賞を受賞した。

B. これまでの経緯

世界遺産登録直後、田辺市には１日当たり 100 台を超える観光バスが訪れ、旅行者の多くは短い滞在時間で次の観光地へ移動。駆け足での団体旅行に観光客は不満を抱き、地元住民にもストレスであった。また、地元民宿等では特に外国人観光客対応の経験がなく、地域全体に外国人を積極的に受け入れようという機運が不足していた。

この反省を踏まえ、地元住民と連携・協力しながら「持続可能で質の高い観光地」を目指す方針に転換した。本来、熊野古道は参詣道であるから、「観光資源としての魅力は数日かけて歩き、沿道の民宿等に泊まり、地元住民等との交流を楽しむところにある」との認識を共有し、観光戦略の基本スタンスを「ブームよりルーツ」「乱開発より保全・保存」「マス（団体）より個人」「インパクトを求めずローインパクトで」「世界に開かれた上質な観光地に」とした。

C. 課題解決型の業務運営

（a）外国人目線を取り入れた受入態勢整備

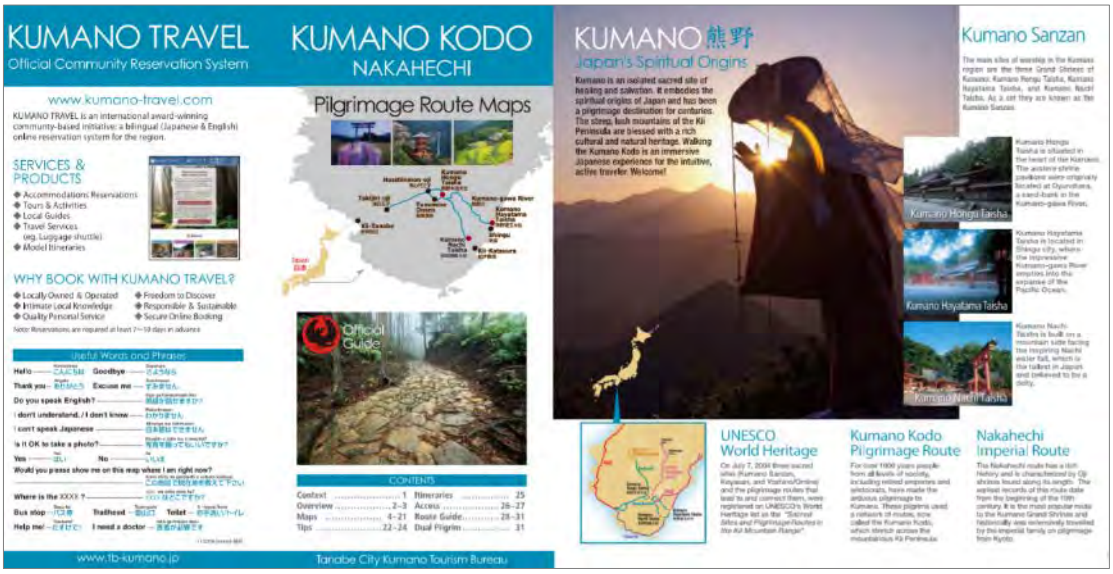
ブラッド・トウル氏（カナダ出身）を国際観光推進委員として起用し、外国人目線からの助言を受けながら、外国人観光客の受入態勢整備を進めた。特に、宿泊施設、交通機関、観光案内スタッフなどを対象に数十回にわたるワークショップ、研修会を繰り返して現場のレベルアップを図った（写真Ⅴ-4、図表Ⅴ-4）。

写真Ⅴ-4 受入態勢整備の例

（道標の統一とローマ字表記）　　**（一定距離間に標識を設置）**

撮影：（一財）百十四経済研究所

図表Ⅴ-4 外国人目線の英語版パンフレット



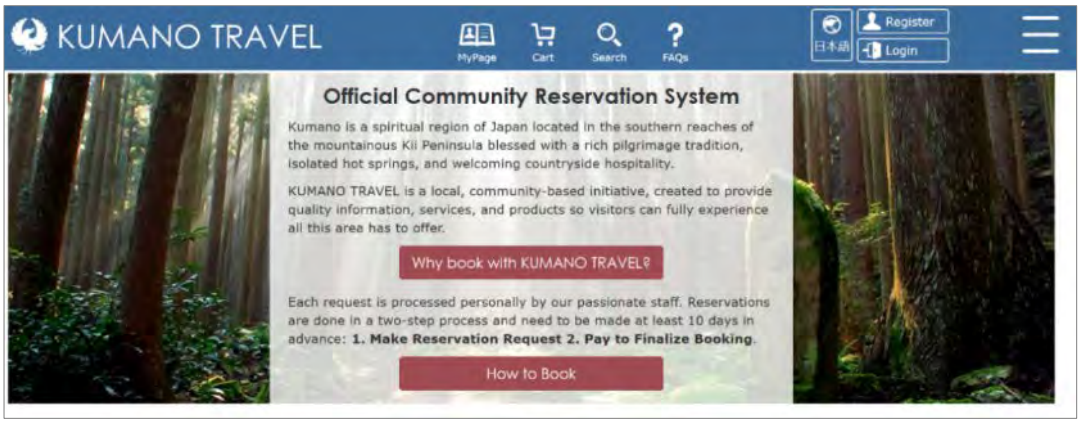
資料：（一社）田辺市熊野ツーリズムビューロー HP

（b）着地型旅行代理店業務への取り組み

地元の民宿など小規模な宿泊業者との連携・協力や個人旅行者との個別相談などに対応する、いわゆる “着地型旅行代理業務”は、収益性の低さから大手旅行代理店は手掛けない。そこで 2010 年に旅行業法による第２種旅行業を取得し、インターネットによる旅行予約システム（予約・決済・キャンセル対応）の運用を開始した（図表Ⅴ-5)。宿泊業者は当社を代理店とすることで事前決済が可能となり、当日キャンセルによる収益逸失も解消した。代理店手数料は 10%程度であり、海外個人顧客と英文メールなどで個別にやりとりを繰り返す場合も多く、採算性が高いとは言えないが、外国人旅行者と地元宿泊業者の壁を低くするという役割は果たせている。

また、オプショナルツアー商品を組成して、海外旅行業者に卸売もしている。海外の旅行業者側としては、現地事情に詳しい同社に任せることで、安心して自社顧客を熊野古道に送り出すことができるので引き合いは増加中である。

図表Ⅴ-5 宿泊予約システムページ



資料：（一社）田辺市熊野ツーリズムビューロー HP

（c）営業拠点「熊野トラベル」

一般に熊野古道を歩くコースは３泊４日程度の行程となることが多い。富裕層になるとハイキングを兼ねて１週間滞在することもある。こうした熊野古道をトレッキングする外国人観光客が増えたことから、2017 年には JR 紀伊田辺駅前に旅行者向けのワンストップ機能を備えた「熊野トラベル」を開設した。

熊野トラベルでは、来訪者の様々な要望に合わせて、日程、ルート、宿泊予約の相談や宿泊先への荷物運搬サービス（個人運送業者 10 社と連携）の取り次ぎ、各種装備品の販売などを行っている（写真Ⅴ-5）。

写真Ⅴ-5 熊野トラベル外観（左）と店内（右）

撮影：（一財）百十四経済研究所

（d）セーフティネット

熊野トラベルでは、出発前に行程の地図を見せてルートの確認、バスの時間、宿泊施設の位置、歩行距離、所要時間、緊急連絡手段などのガイダンスを行っている。山間部でのけがや急病、道に迷うなどのトラブルがあっても、熊野トラベルでは日程の詳細を把握しているのでどの辺を歩いているか見当がつく。万一の際には行政機関や民宿経営者もその情報を共有し、対応することができる。外国人観光客を地域全体で緩やかに見守る体制と言える。この取り組みにより外国人による無計画な古道歩きや野宿が減少し、地元住民の安心感にもつながっている。

旅館「霧の郷たかはら」のオーナーは、この状況を「守られた冒険」と一言で言い表し、「今日の欧米系外国人が最も喜ぶ旅行形態」と語っている。

（e）地元宿泊業者との関係強化

宿泊業者と年１回の意見交換会を行い、受入態勢のレベルアップを継続している。また、予約サイトに書き込まれたレビューのなかに苦情があれば、すぐ事実関係を確認して宿に改善を働きかけている。改善がみられない場合は仲介を取りやめることもあるという。同社の取り組みは地元の宿泊業者からも高く評価されており、提携宿泊

施設は増加傾向にある。

（f）スペイン巡礼路との連携

2014 年、田辺市は世界遺産の巡礼路があるスペインのサンティアゴ・デ・コンポステーラ市との観光交流協定を締結した。

2015 年には共通巡礼手帳を作成し、「二つの道の巡礼者」には証明書を贈呈することとした。2018 年には 1,500 名以上が達成するなど、巡礼路を歩きたい世界各国の旅行者の呼び込みにつながっている（写真Ⅴ-6）。

写真Ⅴ-6 共通巡礼手帳（左）「二つの道の巡礼者」への証明書贈呈（右）

資料：（一社）田辺市熊野ツーリズムビューロー HP

（g）日本人観光客の招き入れ

地元有志による組織「熊野古道 女子部」を立ち上げ、女性目線による観光ガイドブックの発刊や、SNS による情報発信（図表Ⅴ-6）などを通して、「熊野古道を楽しく歩き、その魅力を日本と世界に発信していく活動」を行っている。

図表Ⅴ-6 「熊野古道 女子部」の SNS による情報発信

資料：「熊野古道 女子部」 Facebook ページ

3.3 旅館「霧の郷たかはら」

(1) 設立の経緯

行政先導による宿泊施設経営の成功例として旅館「霧の郷たかはら」がある（写真Ⅴ-7)。世界遺産登録後の受入態勢整備の一環として、和歌山県は宿泊施設が不足していた田辺市中辺路町高原地区に、公設民営旅館「霧の郷たかはら」を 2008 年に開業。イギリス留学やスペイン在住経験により国際感覚があり、地元事情にも詳しい地元出身者に運営を委託した。

写真Ⅴ-7 霧の郷たかはらの正面玄関（左）と客室・客室からの景観（右）

撮影：（株）いよぎん地域経済研究センター

(2) 施設の概要

客室８室（うち和室が３室）と大広間を含め 28 人が最大収容人数で、料金は１泊２食で１万円～１万２千円程度、富裕層向けプランでも最高２万円を目安としている。

約 250 坪の建坪のうち約 100 坪をレストラン、ロビーにして交流の場としている。宿泊のほかランチ営業を行っており、地元住民も昼食で訪れている。

(3) 外国人観光客の状況

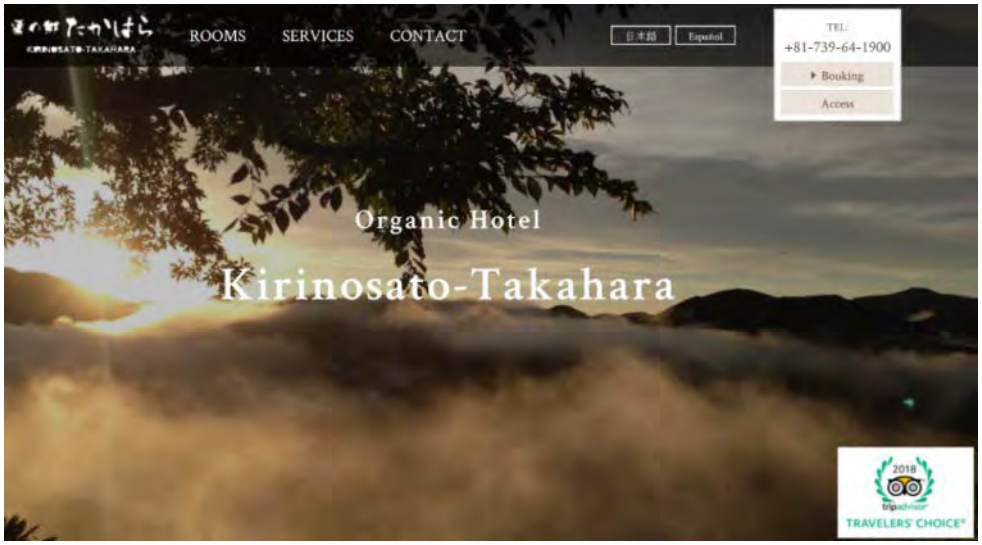
外国人の４分の１が欧米豪系で、特に豪州、欧州からは個人旅行客が、アメリカからは富裕層向け旅行代理店を通じた富裕層のパック旅行客が多い。

欧米人は個室に閉じこもらず、食事やコーヒーをとりつつ、他の旅行者や地元住民と交流し、その様子を SNS に投稿しようとするので、それに適した Wi-Fi 環境を整備している。

(4) 宿泊予約システム

ホームページは日本語、英語、スペイン語で作成。海外の個人から月 20 件くらいは英文メールで問い合わせがあり、きちんと返事したら予約が来るようになった。決済は、「Square 請求書」という、メールで請求書を発行できるシステムを利用している。前金として半額をデポジットとしているのでキャンセルはほとんどない（図表Ⅴ-7)。

図表Ⅴ-7 旅館「霧の郷たかはら」HP ポータル



資料：旅館「霧の郷たかはら」HP

(5) 欧米系外国人が熊野古道を評価する理由

熊野古道の良さは、「何も手を加えてないところにある」という。また、「観光地には受入の適正人数があり、熊野古道は観光客が少ないのが良い」ともいう。開発型のリゾートとは異なった魅力があり、お金で買えない体験が豊富にできる。

霧の郷たかはらでも、高級食材ではなく、地元でとれた野菜や山菜、地元の水を使ったオーガニックな料理を提供して喜ばれている（ベジタリアン対応は必須となる）。風呂は、離れた場所にある温泉をくみあげてトラックで運んでいる。

今後は、お茶、ミカン狩り、味噌、漬物や梅酒づくり、餅つきなどの「体験」をからませていく方針である。

(6) WWOOF（ウーフ）の取り組み

人手確保の面では、宿泊者に旅館の仕事を手伝ってもらう代わりに食事や寝泊まりを無料で提供する WWOOF（ウーフ）を受け入れている。３年間で約 400 人のウーファー（手伝う人）を受け入れた結果、日本人スタッフ（12 名）も、一緒に働く中で各国語である程度コミュニケーションをとれるようになった。外国人は、一緒に働くことを通じて日本人と交流できることを大変喜ぶとともに、SNS などで熊野古道を世界に向けて PR している（図表Ⅴ-8）。

図表Ⅴ-8 WWOOF（ウーフ）

資料：旅館「霧の郷たかはら」HP

(7) 経済効果

霧の郷たかはらは、公設民営で運営されていたが、委託契約期間が終了した開業 10 年後には払い下げられ、当初からの経営者が現オーナーとなっている。また、その成功が刺激となって移住者が近隣で民宿を開業。いずれも小規模ではあるが、高原地区全体として宿泊収容人数は拡大している。

高原地区は過疎化・高齢化が進み、人口は 300 人程度まで減少していたが、霧の郷たかはらを核に再生しつつある。

4.「和歌山県世界遺産センター」の取り組み

4.1 概要

2005 年、和歌山県により、田辺市の熊野本宮大社の前に設置された。当地は紀伊山地の霊場を結ぶすべての参詣道が集まる場所である。

当センターは、当世界遺産の文化的景観を保存しながら適切に活用し、地域の振興に結び付ける拠点である。和歌山県観光振興課と 11 市町が連携し、和歌山県などからの公的資金や企業・団体からの寄付金により運営している（写真Ⅴ-7）。

4.2 世界遺産登録までの経緯

世界遺産登録申請は、３県（和歌山県、奈良県、三重県）にまたがる広域プロジェクトであり、和歌山県がリーダーとなって進められた。

当時は世界遺産への関心がほとんどなく、登録申請が相次ぐ近年とは事情が異なる。地元向けの PR 活動、フォーラム、シンポジウムなどでは、世界遺産とは何なのか説明することから始められた。もともと古い巡礼道の所有者は県や法人、個人など様々で、

所有者からの理解と同意がなければ文化財や世界遺産に指定することはできない。また、周囲にはバッファーゾーンの設定が必要となり、そこにも何らかの制約が発生するので、世界遺産に登録されると困る、といった抵抗も強かった。地元住民には丁寧な事前説明を求められたが、地域によって世界遺産に登録することに温度差があった。

4.3 主な取り組み

(1) 古道の維持・継承

古道の修復については、あくまでも文化財を保護する目的で行っている。文化財保護法に適合するよう、元通りの修復が原則であり、現状変更には文化庁に事前申請と事後報告が必要となる。

1970 年代にはコンクリートで修理してしまった箇所があり、今後どのように復元していくか問題となっている。将来、専門家にどのように評価されるかを常に意識して、古道の修復に取り組んでいる。

(2) 保全修繕活動

舗装されていない参詣道は雨によって土が流出するため、常に修復していく必要がある。このため文化財保護専門家による指導のもと、参詣道の保全活動（道普請・清掃・景観保全等）として「10 万人の参詣道『環境保全活動』」を行っている。当初は小中高の生徒、地域の団体からの参加を想定し、累計１万人を目指した保存活動としていたが、２～３年で達成してしまい、目標を 10 万人に修正した。日本全国の企業や団体から、CSR 活動や研修、組合活動の一環として参加が相次いでおり、現在では年間 2,500 人程度の参加があり、累計３万人を超えたところである。

修復作業に必要な土の代金は参加団体側の負担となるものの、「世界遺産を自分の手で保全できる」という満足感から参加者は古道に愛着を持ち、リピーターになる人も少なくない。自然災害による大規模な復旧は国または県の負担で行うが、百万円未満の軽微な保全活動は民間企業、団体からの寄付でまかなえている（写真Ⅴ-7）。

写真Ⅴ-7 和歌山県世界遺産センターの外観（左）と修繕中の古道（右）

撮影：（株）いよぎん地域経済研究センター（左）、（一財）百十四経済研究所（右）

(3) 海外向けプロモーション活動

国別に志向が異なるので、それぞれの地域に応じたプロモーションを行っている。中国人は食にこだわるのでラーメンやマグロなどの魅力を、台湾人は景観重視のため那智勝浦を重点としたプロモーションを行っている。

また、アメリカ人は歩くことそのものを楽しみ、欧州人はそれに加えて歴史的背景を知りたがる傾向が強いそうだ。一方、豪州人は自然に触れたい様子である。

(4) 外国語対応

地域通訳案内士として 180 名が登録済みで、英語のほか、中国語、フランス語、スペイン語の通訳案内士もいる。一定レベルの語学能力と、定期的なスキルアップ研修の受講を必須としている。

(5) 休憩所の設置

1970 年代から各所に設置されてきた小規模の休憩所を、地元住民と外国人観光客の交流の場所として活用している。運営については地元婦人会に任せてある。基本的に２名ずつで当番制にしており、観光客が多そうな日は必ず対応することにしている。地元の人にとっては、地元の食材（梅干しなど）や手作りの飲み物（しそジュースなど）を販売するなど現金収入を得る場所ともなっている。また、当番が休憩所やトイレの清掃も行うことで、観光客は快適に休憩することができ、地元住民との交流も楽しんでいる（写真Ⅴ-8）。

写真Ⅴ-8 外国人観光客（左）と休憩所（右）

撮影：（一財）百十四経済研究所

新時代における遍路受入態勢のあり方
～遍路宿泊施設の現状・課題等調査～　報告書

発行所　四国経済連合会

〒760-0033
香川県高松市丸の内２番５号　ヨンデンビル本館４階
TEL:087-851-6032　　FAX:087-821-9384

四国アライアンス地域経済研究分科会
事務局：株式会社いよぎん地域経済研究センター
〒790-0003
愛媛県松山市三番町５丁目 10 番地１　伊予銀行本店南別館４階
TEL:089-931-9705　　FAX:089-931-0201

発　行　2019 年６月